
皇子クシ — 太陽の都を築いた若きインカの伝説 —

yamayuri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇子クシ — 太陽の都を築いた若きインカの伝説 —

【Nコード】

N5493W

【作者名】

yamayuri

【あらすじ】

人々に神童として知られる、ときの皇帝の三男クシは、父王から疎まれ、異母兄から妬まれ、陰謀に巻き込まれていく。しかしその試練が彼に強さを与える。やがて国は大きな危機を迎え、彼は国を救うべく立ち上がる。――

『インカ』の伝承のなかの英雄クシ。彼の武勇伝に最強の女戦士との恋や不思議な部族との出会いを絡めて新しい歴史ファンタジーを創りました。クスコ、マチュピチュ、サクサイワマンの砦など、広

く知られた場所も、独自の視点で背景として表現していきます。あくまで創作です。――

『インカ帝国』とは後世の人が付けた俗称です。ここでは『インカ』とは皇族や皇帝のことであり、『インカ人』¹¹『ケチユア族』¹²となります。――

前作『稲妻と星の花』へと続いていくエピソード1になります。が、独立した話としてご覧いただけます。他サイトで公開中のものです。

1、神童

奪って豊かになるのではなく、

与えて豊かになるのだ。

1、神童

山の上に並んだ若者たちは、強い風に煽られて今にも転げ落ちそうだ。まだ華奢な少年たちは歯を食いしばり、こぶしを握って足を踏ん張り一様に天を仰いでいる。突風が吹くとよろよろとよろめく少年が何人もいた。

しかしその様なことでは、これから行われる過酷な儀式にはとても生き残ることはできないだろう。ふもとで見守る民衆たちには、頂上の人影が点のようであつても、最初に脱落するのが誰かその時点でおおよそ見極めることができた。

その山は都を取り囲む山々の中でも特に険しい急斜面を要しており、剥き出しの山肌には砂のように細かい石粒から拳大ほどの石が無数に転がり一面を覆っている。無造作に踏み出せば足を取られて転げ、垂直にも思える斜面を一気に麓まで転がっていくだろう。そうなれば軽い怪我では済むまい。

ただでさえ危険な場所にも関わらず、さらに悪条件を加えるかの
ようにその日は朝から突風が吹き荒れていた。風は雲を驚く速さで
押し流していく。雲が切れれば真夏の太陽が顔を出し、遮るもの
ない山の頂上に立つ少年たちの肌を灼熱の光で炙った。

それでも山の上の少年たちにその場を逃げ出すことは赦されなかつた。使命を全うするか、大怪我を負って最悪の場合は命を失って棄権するか、どちらかの選択しかなかった。

今年は二十人の少年が山の上に揃った。

頭に巻きつけたロープにはそれぞれ、色や形の違う鳥の羽が挿してあり、その羽で誰かが分かるようになっていた。上半身は裸で腰布を巻いただけの姿。足には何も履いてはならなかった。

突然轟音とともに今までにない突風が頂上を吹きぬけた。

かろうじて踏ん張っていた足が一気に掬われる。耐え切れずに八人の少年が山の上から転がり落ちていった。

と同時にほら貝の低い音が山を突き上げるように響いた。それを合図に、残った十二人の少年は一斉に山を駆け下り始めた。岩だらけの急斜面はゆっくり下るだけでも至難の業だ。

駆け出した途端に足を滑らせて三人が転倒した。転倒したひとり
は石ころとともに勢いよく転がって、正面に突き出した大岩に体を
打ちつけ、動かなくなってしまった。残りの二人はそのまま麓まで
転げ落ちていった。

九人の少年が広がってようやく山裾近くまでに下りてきたとき、
そこに待ち構えていた数人の兵士が思い切り棍棒を振った。加速度
は最高潮に達している。勢いの止まらない少年たちは、武器を振り
回す兵士たちの中に次々と飛び込んでいった。

避けることも儘ならず華奢な体が次々とはじき飛ばされた。防ぐ
物のない裸体に受ける衝撃は大変なものだ。叩かれて動けなくなっ

た者もいれば、はじかれても立ち上がってまた走り出す者もいる。中にはうまく棍棒をすり抜けて走り続ける者もいた。

残る少年の数は五人になっていた。しかしその少年たちをさらに試練が襲う。正面から男たちが石や槍を投げて襲ったのだ。この男たちは何と少年たちの親や親類なのだ。この時点でまた何人かが倒れて脱落した。

試練をぐり抜けてゴールの旗の下にたどり着いたのは、たった二人だった。真つ赤な鳥の羽根を付けた背の高い少年と真つ白な羽根を付けた華奢な少年。とくに白い羽の少年はまったくの無傷で、傷を負いながらやつのことでゴールした赤い羽根の少年に大きく差をつけて、一番に旗の柄を掴んでいた。

人々はこの少年たちの勇姿に惜しめない歓声を送った。そのうち多くの民衆が彼らの周りに集まってきた。兵士たちに守られるようにして、ふたりの少年は民衆の間をすり抜け、広間に設けられた壇の上に上がった。彼らには勇者の印のコカの葉の冠が授けられた。コカの葉は、この都のように標高の高い土地に暮らす人々にはなくてはならない気付け薬である。その命の元となる葉は勇者のしるしでもあるのだ。そして一人前の大人が身につけるふんどし褌が与えられる。彼らはこれで大人の仲間入りをしたのだ。

このふたりは身分は違うが貴族の出身であった。彼らは少し緊張した面持ちで貴族の少年にだけ行われる次の儀式を待った。

立派な羽冠を抱いた神官がゆっくりと壇上に上がってきた。

神官はまず赤い羽根の少年に近づき、彼の頭頂を鷲掴みにしてぐいっと横にした。赤い羽根の少年は苦痛の表情を浮かべている。頭を掴まれたからではない。次の痛みに耐えられるかどうか心配な

のだ。神官は少年の右の耳たぶを掴んで引つ張る。容赦なく伸ばされたそこに一気に黄金のキリを刺し込んだ。キリを二、三度回転させて穴を広げると、傍に侍る召使いが手渡した小さな金の丸板をその穴にぐいぐいと押し込んだ。

赤い羽根の少年はひどく顔を歪めて唇を噛み締め、なんとか声を出さないように耐えている。右に続いて左にも同じことが行われている間、さすがに小さな呻き声が漏れていた。

次に白い羽根の少年にも神官は同じことを行った。あれほど力強く山を駆け下りてきた白い羽根の少年は、意外にも大声を出して騒ぎ出した。しかし逃げ出そうとするわけではなく、大声を出すことで痛みに耐える彼なりの方法だったようだ。民衆はその姿を逆に微笑ましく見守っていた。赤い羽根の少年よりも二、三年下のこの少年はまだどこかにあどけなさを残している。苦痛を素直に表現する姿は、山を駆け下りてきたときの神がかった姿から一転、見た目相応であり、人々に親近感を抱かせたのだ。

儀式はすべて終わった。二人はこの部族の中で立派に大人として、そして一人前の貴族として認められたのだ。

高原の都クスコに暮らすケチュア族の男が必ず迎える成人の儀「ワラチコ」。少年たちは過酷な試練をくぐり抜けなければ大人になることはできない。途中で棄権したり脱落した者は次の年もまたその次の年もこの儀式に臨む。中には不幸にも永遠に大人になることはできない者もいた。

白い羽根の少年は十五で初めてこの儀式に臨み、一度で、さらに兵士たちの激しい攻撃をすべてかわして傷を負うこともなく合格した。そのような例は今までほとんどなかった。この少年の勇姿を見物していた民衆はいつまでも興奮が醒めやらず、儀式が終わっても

少年の名を連呼し続け、彼を取り囲んだ。

「アウキ・クシ（クシ皇子）！ アウキ・クシ！」

今までもその少年の噂は知られていたが、このときはじめて彼が人々の前に姿を現し、その噂を証明したのだった。

少年の名はクシ。ときの皇帝ビラコチャの三番目の嫡子である。

少年はそれまでも宮殿の中では神童として知られていた。武術の腕前は数いる皇子の中でも一番秀でており、大人を言い負かしてしまふほどの知恵を持っている。そのうえ整った美しい顔立ちをしていた。非の打ち所のない……いや強いていえば、負けん気が強く、無謀と思えることにでも果敢に挑戦するために、失敗することも多い。しかしその人間臭さ、子どもらしさが、かえって周囲に好感を抱かせ、皇子を慕う者も多かったのだ。

その皇子の噂は一般の民衆の間にも知られるほどだった。

「二年かけてようやく合格したのに、皇子と一緒にとはなんという不運だ。私のことなどすっかり忘れられている」

「冗談まじりにクシの肩を叩いて笑ったのは、赤い羽根の少年だ。

彼の名はワイナ。クシよりも三つ年上で、二年かけてようやく儀式を通過したのだ。

この儀式で無傷で済んだ者などほとんどいない。命を落とす者さえいるほどのだから、ワイナの受けた傷など大したものではない。クシが驚異の成績を出さなければ、明らかにワイナは人々から大歓声を送られていただろう。せっかく努力が実を結んだというのに、人々は噂の少年クシに夢中でワイナの存在はかすんでしまったのだ。それでもふたりは、宮殿で一緒に稽古に励んできた気心の知れた仲なので、ワイナも驚異的な成績を残したクシを心から称えていた。

ワイナは傷を負っているにも関わらず、クシを肩車で担ぎ上げた。ワイナの肩車に乗ったクシが人々の間を練り歩くと、人々はますます熱狂して彼を呼ぶ。その声に応えるためにクシは両手のこぶしを握って天に突き上げた。興奮したワイナがくるりくるりと向きを変え、再び、クシの視界もめまぐるしく変わる。さすがのクシも目が回り、頭がくらくらとしてきた。しかし意地っ張りの彼はそれを振り切るように激しく頭を振ると、また人々の呼びかけに笑顔で応えるのだった。

ふとクシはその姿勢のまま固まった。人だかりの向こう側で自分を見つめる鋭い視線を感じる。クシがそちらに目を凝らすと、人だかりの遥か向こう側で、素早く何か物陰に身を隠した。しかしうごめく人々の波に遮られて、それが見えたのは一瞬だったのだ。

クシは心がざわついた。姿が消えてもその視線が未だに自分を見ているような気がする。普段滅多に怖れなど感じたことのない自分が、その一瞬でうろたえていることが不気味だった。

クシの感じた不安は、その何かがこれから自分に大きく関わってくることを予感するものだったのかもしれない。

クシの心とはうらはらに、クシを肩にかついだワイナは陽気な足取りで人々の間を練り歩いていた。クシの体はそれに合わせて踊るように弾んでいた。

2、婚禮

2、婚禮

成人の儀の翌日、昨日の疲れでぐっすりと眠っていたクシを兄のリヨケが揺り起こした。

「クシ、もうすぐ顔合わせの儀が始まるぞ。早く起きろ！」

クシは半開きの目でリヨケを睨みつけた。

「はあ？ 顔合わせとは？」

リヨケは寝ぼけたことを言う弟の顔を軽くはたくと怒鳴った。

「しっかり目を覚ませ！」

今日は皇帝陛下に新しい側室がやってくる日だ。神殿で花嫁の洗礼が行われたあと、宮殿の大広間ですべての皇族との顔合わせがあるのだぞ」

リヨケの言葉でようやく大切な行事を思い出したクシは飛び起きた。

「兄上！ 今、太陽はどのあたりだ？」

「もう中空だ。早く仕度しろ！他の者はすでに大広間に揃って花嫁が来るのを待っているのだぞ！」

クシは寝台の周りに散らかった装飾品を鷲掴みにして、マントを肩に引っ掛けて部屋を飛び出した。リヨケが慌てて後を追いつ、走りながらクシのマントや装飾を直してやった。

台形型に開いた細長い入り口をくぐると、高い天井の重厚な石造りの大広間が現れる。高窓から差し込む幾筋もの光と、高い位置に掲げられているたいまつが暗い色の石の壁を美しく照らし出していた。壁に貼られた金箔のラインがそれらをよく反射してさらに広間を輝かせていた。

中央通路の左右には大勢の皇族たちが居並んでいる。皇帝の玉座はまだ空席で、儀式が始まるまでにはまだ時間があるようだった。集まった皇族たちが各々勝手に雑談をしているため大広間全体がざわざわと騒がしい。

その中にクシとリヨケが走りこんでくると、何人かが彼らに気づき大声を上げた。

「おお、遅かったではないか！」

「英雄のおでましを今か今かと待っていたぞ！」

「昨日の英雄も、今日は寝坊か」

一斉に笑い声上がる。

クシは顔を真っ赤にして、そそくさと末席に身をうずめた。しかし皇族たちは隠れるクシに容赦なく声をかけて話題の中心に持ち上げようとする。

「しかし、昨日の成人の儀は実に素晴らしかった。あのようは無傷で合格した若者をわしは見たことがないぞ」

「いや。クシ皇子ならやると思っておった」

「宮殿の若者の中では武芸で右に出るものはないからな」

「これからの活躍、おおいに期待しておるぞ」

皇帝の兄弟や従兄弟にあたる年配の皇族たちが口々に褒め称える。クシはリヨケの蔭で肩を竦めて、過剰にも思えるその褒め言葉にちよんちよんと頭を下げていた。

「無傷で成人した者なら、ここにもおりますが……」

上座の方から声が響いた。皇帝の玉座の隣に座るウルコだ。クシの腹違いの兄であるが皇帝によって皇太子に指名されているので、皇帝の隣に座ることを許されているのだ。

ウルコは皇帝の側室の息子だ。ウルコの母は貴族ではなく、皇帝の愛妾から側室に成り上がったのだ。正妃の息子はアマル、リヨケ、クシの三人だった。正妃が亡くなり、皇帝は溺愛するウルコの母を正妃のように扱い、三人の嫡子を差し置いてウルコを皇太子に指名してしまったのだ。

皇帝の地位は世襲制ではあるが、実は後継者選びには嫡子か庶子かはさほど問題ではない。その方法は皇帝が自ら指名するか、あるいは目ざましい功績を上げて貴族の誰もが王に相応しいと認めるか、そのどちらかなのだ。

しかしウルコは頭が鈍く、武芸の才能もなかった。そのウルコをなんとか成人させようと、数年前、皇帝はウルコひとりのために成人の儀を行った。その儀式というのがまったく異例で、普通の式で使われる険しい山とは比較にならないほど低い丘の頂上から、攻撃する兵士たちもない中をただ駆け下りるだけのものだったのだ。

人々は心のうちでは呆れていたが、皇帝の意向に逆らうことは許されないため、ウルコを褒め称えた。そしてウルコの合格を祝って盛大な祭りが何日も催されたのだった。

「ああ、これはこれは。そうでありましたな」

「これは大変失礼を」

何人かが取り繕ったように返事をしたが、ほとんどの者は後ろを向いて苦笑していた。

「クシ。お前も無事一人前の皇族になったのだから、今後は皇帝陛下と私のためによく働くのだぞ」

ウルコはクシの方を見遣って、しゃくれた顎を突き出した。

「はい。皇太子殿下」

クシはそう答えたあと、思わず奥歯をきりつと鳴らした。

「いつもの調子だ。軽く受け流せ」

リヨケはクシを軽くひじで小突いて小声で声をかけた。

「兄上。屈辱ではないですか。後継者に相応しいのは、まずアマル兄さま、次に兄上だ。彼を皇太子と認める者は少ない。父上のお考えが全く理解できない」

リヨケがクシに近づいて小声で叱った。

「しつ。声が高いぞ。この場で他の者にそのような話を聞かれてはまずい」

そしてさらにクシの耳に口を近づけると、それを手で隠してひそひそと耳打ちした。

「クシ。今日の花嫁は十七だそうだ」

「十七？ 父上とはまるで娘か孫ではないですか。私とそれほど変わらず、兄上たちよりも年下だ。なんで今さらそのように若い側室を迎えるのですか」

「隣の部族キリスカチエの（天の女王）の娘だそうだ。キリスカチエとケチュアが和睦を結ぶために陛下に嫁いでくる。」

キリスカチエは少数部族だが勇猛なことで知られている。向こうは小さな部族が生き残るために大部族と手を結ぼうと考えた。わがケチュアは有能な戦士が揃うキリスカチエの戦力が欲しいのだ。ここでケチュアとキリスカチエが手を結ばなければ、ほかの強大な敵につける隙を与えてしまうからな。

ただ、そのように若い娘ならふつう皇太子に嫁がせるものを、わざわざ父上が引き取ったのにはわけがある。

貴族の中には、ウルコを皇太子としての資質がないと批判する者が多くいる。ウルコが即位する前に、そんな者たちが反乱を起こす危険がないとは言えないのだ。そんな危うい立場の皇太子に、大事な人質の姫を嫁がせて、万が一ウルコとともに失脚させることになったとしたら、キリスカチエは黙っていないだろう。ウルコを皇太子にと望みながら、父上もウルコの評価を無視することができない証拠だ。現皇帝の妃であれば、たとえ父上が亡くなったとしても地位が落ちることはないからな。

キリスカチエは誇り高い部族ゆえ、たとえ自分たちが滅ぼうとも

屈辱を受けたことに対して報復するであろう。最後にはケチュア族が不利な立場に立たされてしまうわけだ。

だから父上自ら、同盟の証である花嫁を引き取るしかなかった」

「しかし……この婚礼にはあまりにも無理が。花嫁が哀れだ」

「そんなことはどうでも良い。つまり父上……皇帝陛下でさえ、ウルコを後継者とすることに不安を感じているということだ」

ふたりがひそひそとやっているとき、貴族たちが前の列から順々に跪いて頭を垂れていった。皇帝が広間に入ってきたのだ。前の列がすべて跪くと、クシとリヨケも慌ててその場にしゃがんで頭を下げた。

皇帝がゆつくりと玉座に身をうずめると、深く頭を垂れていた貴族たちが顔を上げてご機嫌伺いを始めた。

「この度はまことにめでたいことでございます。若い花嫁をお迎えになって、陛下におかれましてもいつまでも若々しくご閣達であられますこと、お喜び申し上げます」

「ほんに……。いつまでもお達者でうらやましい限りですな」

まるで仙人のような皇帝よりもずっと年上の皇族が、ところどころ歯の抜けた口を大きく開けて笑う。

しかし、皇帝の方はお世辞を並べる皇族たちを憂鬱な表情で見つめ、何度も大きな溜め息をついていた。

「クシ。お前の言うとおりだな。花嫁に同情するよ……」

リヨケが頭を下げたままクシを振り返って言った。その言葉にク

シはクツクと肩を震わせて笑った。

「クシ！」

突然宮殿に低い声が響いた。クシが驚いてはっと顔を上げると、皇帝がじつとこちらを見つめている。さては今のやりとりが皇帝に聞こえたのか。クシは慌ててまた視線を下に落とした。

「昨日の成人の儀は大変立派であった。余はそなたを誇りに思うぞ」

クシは驚いて再び顔を上げた。

「ありがたきお言葉にございます」

末席に隠れていたクシは一步前に進み出ると皇帝に深々と敬礼をした。クシが父に褒められたのは初めての事だった。

宮殿では有名なクシの奔放な性格を、父が嫌っていることは薄々感じ取っていた。クシはおそらく若い頃のビラコチャに似過ぎているのだろ。似た者同士はその粗までもが見通せる。クシの姿を見るとビラコチャの中に若い頃の挫折や苦悩が蘇ってくるのかもしれない。

理由は何であれ、父が自分を避けようとしていることにクシは前から気付いていたのだ。その父がいま、大勢の前で自分を褒め称えてくれた。それはクシにとって何よりも嬉しいことだった。

周囲の者たちがまた騒ぎ始めた。みな一様にクシに賞賛を送ったが、ウルコだけは横を向いて拗ねていた。

「キヌアさまのお着きでございます！」

台形型の入り口に神官が顔を出し、告げた。その言葉で皇族たちはいつせいに壁側に身を寄せて中央通路を広く開けた。すると間もなく大神官が現れ、そのあとにふたりの侍女が花弁を通路にまきながら入ってきた。

やがて入り口に姿を現した娘の姿を目にして皇族たちはみな息を呑んだ。大きく溜め息をつく音も聞こえてくる。しかしそれは決して感動から出たものではなかった。

皇帝の新しい後はケチュアの民が理想とする女性像とは程遠かった。棒のように長く細い肢体は見事な赤褐色に染まっている。細い体といっても肩幅は広く二の腕や太腿には見事に鍛えられた筋肉がせり上がっている。細かく編み込んで後ろにきつく束ね上げた髪につられて目尻がこめかみまで吊り上がり、その目つきが刺すように鋭く見える。

ケチュアの一族となるためにいまさつき太陽神殿で誓いを立ててきたばかりだというのに、動物の毛皮をまとった異民族のいでたちはそのままだ。なめした毛皮を体にぴったりと貼り付けるように纏い、そこから長くしなやかな四肢が伸びていた。

貴婦人たちは口に手を当て眉間に皺を寄せて、おぞましいものでも見るような眼で新婦を睨みつけた。そしてひそひそと囁き合った。その違和感は花嫁も感じ取っているはずだが、彼女はまるで動じず、背筋を伸ばして正面を見据え、堂々と花弁の散らばる通路を歩み出した。はばかりことなく颯々になっっている長い四肢は優雅に彼女を運んでいく。その姿が野原を駆ける鹿を思い起こさせる。彼女が進んでいくに連れて、大広間にすーっと異国の風が吹き込んでくるような感じがし、その風に当てられた広間の者たちは今までの騒ぎを止めて彼女の姿に見入った。

クシはこの花嫁の姿にひと目で惹きつけられ、その姿から目が離せなくなった。しとやかな物腰を羨けられた貴族の女性ならいくら

でも目にするが、このように野性的な女性には会ったことがない。

クシが思わずその姿をじっと目で追っている、その視線を感じたのか花嫁の方もクシを振り返って見つめた。

花嫁と目が合った瞬間、クシの心臓がドクンと大きく鳴った。その視線は確かに昨日の成人の儀のあとに自分を見つめていたあの視線に違いない。クシの鋭い感覚がそのことを確信した。

（彼女は どうして私を見ていたのだろう……）

クシが驚いた表情になったのを見て、花嫁は一瞬クスツと口元に笑みを浮かべた。しかしすぐさま無表情に戻って正面を向き直り、何事もなかったかのようにそのまま通り過ぎて行ってしまった。クシはそのとき何ともいえない屈辱感を感じ、思わず唇を噛み締めて俯いた。

皇帝の御前に来ると、一見礼儀など心得ていそうにないこの花嫁が、すつと背筋を伸ばして跪き、ゆつくりと頭を垂れていった。今まで野卑な異民族と思って軽蔑の目で見ていた貴族たちは意外な顔をした。それは、彼女のいでたちからは想像できない優雅な振る舞いだったのだ。

頭を垂れたまま花嫁は、横に従えていた侍女に何やら話しかけた。侍女がその言葉を訳して皇帝と広間の者たちに聞こえるように伝えた。

「キヌア様はこうおっしゃっています。

このたびは偉大なケチュアの皇帝陛下の元に嫁ぐことができたこと、大変嬉しく思います。ケチュア族の仲間入りをした今日この日より、末永く陛下にお仕えすることを誓います」

「うむ」

皇帝は短く答えて頷いたが、それ以上は何も声をかけなかった。明らかにこの若い花嫁に戸惑っている様子だった。

「野生のピューマのようなあの女を飼いならすことなど、父上には到底できないだろうな」

リョケがまたクシを振り返って囁いた。クシは今度は何も返事を返さず、ただ花嫁の後姿をじっと見つめていた。

3、戦士の娘

3、戦士の娘

キヌアは重いショールをうらめしそうに眺めていた。立ち上がると首に幾重にも重ねられた装飾品が肩に食い込んでくるようだ。自分はまだで縄で縛られた家畜のようだと思つた。高窓の向こうに広がる青空を見つめて長い長い溜め息をついた。

『姫さまのお気持ちも分かりますが、もうキリスカチエの生活はお忘れになって、早くクスコの生活に慣れることです』

ここに来てからというものの毎日同じ溜め息を聞かされている侍女のティツカが諭した。

『ティツカはもうここに慣れたというの？』

『ええ、ここもなかなか楽しいところですよ。それは故郷で高原を走り回っていたときのような開放感はありませんが、ここには本当にいろいろな人間がいて、毎日新しい発見がありますから』

ティツカは、キヌアがキリスカチエにいたときから仕えている娘だ。王女と侍女の間柄とはいえ、キリスカチエは上下関係に厳しくないため、まるで親友か姉妹のような関係だった。

ティツカにも、今までの自由を奪われ狭い空間に閉じ込められてしまったキヌアの憂鬱は痛いほど分かっていたが、キヌアに早くクスコの生活に慣れてほしくて、無理に強がって見せた。

『どこへ行ってもすぐに慣れるあなたがうらやましいわ。私はこの数日でもうすっかり年を取ってしまったような気がする……』

ティツカの慰めの言葉も虚しく、キヌアはさらに長い溜め息をついた。

婚礼の日から数日が経った。あの日身に纏っていた毛皮はその日のうちに取り上げられて、代わりにひどく重い分厚い布を体中に巻きつけられてしまった。足くびまである長いスカートが脚に絡み付いて前に進むことさえ儘ならない。いつも後ろにきつく束ねて持ち上げていた縮れっ毛を無理やり引き伸ばして垂らしているため、首や体にまとわりついて鬱陶しいことこの上ない。

さらにキヌアに与えられた部屋は四方を石で囲われて穴ぐらのようだ。陽の光は常に一筋しか差し込んでこない。寝るときにしか建物の中に入らなかったキリスカチェの生活とはまるで違っていた。儀式のときに大広間で顔を合わせた皇帝とは、それ以来まったく会うことはなかった。

『何もお部屋の中に閉じ籠っていることはないのですよ。せめて外に出てみてはいかがですか？』

心配してティツカがいろいろと提案をする。

『こんな服を着ていては走るところか歩くことさえ儘ならないわ。この髪も邪魔で仕方がないし。それに外に出ようとする番兵がいちいちどうしたのかと聞いてきて、面倒なのよ』

あのはつらつとしたキヌアが数日で変わってしまったことに、ティツカのほうが溜め息をつきたくなった。

『キヌアさまは皇帝のお后なのですよ！ 番兵が何と言おうと自由に行動していいんです！』

そう叫んでティツカはキヌアのショールを剥ぎ取ると、強引に手を引いて部屋の外に連れ出した。

案の定、番兵がどうしたのかと聞いてきたが、ティツカは「あなたごときに関係のないことです！」と言い切って取り合わなかった。番兵があっけに取られているのを見て、キヌアは小気味良くなってケラケラと笑い出した。

迷路のような宮殿の通路を走り抜けながら、ふたりはスカートの裾をビリビリと裂きはじめた。そして切り裂いた布を使って長い髪を束ねあげる。スカートの裾が無くなり、邪魔な髪を纏めると、カモシカのように軽やかに動けるようになった。故郷の高原を走り回っていた懐かしい感触が蘇ってくる。

やがて狭い通路が途切れ広い中庭へと出た。中庭は青々とした草が生えているだけで、ほかに何もない空間だった。普段貴族たちが武術の練習のために使っている場所だ。

ふたりは大声で笑いながら中庭の真ん中に走りこんでいつて勢よく転がった。倒れこんだ衝撃でたくさんの草がふわっと舞い上がった。草まみれ土まみれの格好でそのままゴロゴロと転がりながらふたりは笑い続けていた。

『ああ楽しい！ そうよ、私は皇帝の後なんですもの！ どんなことをしても許されるはずだわ！ ねえ、ティツカ』

『そうです。キヌアさまはそうでなくては』

ようやくいつものキヌアに戻ったのを見て、ティツカは嬉しくな

った。中庭はかなりの広さがあるが、周囲を石の建物に囲まれた限られた空間だ。しかし今まで石壁の中に押し込まれていたキヌアにとって久しぶりに味わう開放感だった。

ひゅうつつ

そのとき空を切る音がして何かが飛んできた。幼い頃から武術の訓練を受けてきたキヌアは、とっさに身を翻してそれをかわした。その『物』は、キヌアのすぐ後ろに落ち、ボコツと鈍い音を立てて土ぼこりを舞い上げた。それは狩猟や戦いで使われる綱の両端に石をくくりつけた（ボーラ）と呼ばれる武器だった。誰かがキヌアを狙って投げたのだ。

キヌアは素早くそれを拾い上げ、瞬時に投げた相手がいる方向を見定めて投げ返した。その一瞬でキヌアには自分を狙った敵の影が見えていた。やがて広い中庭のはるか向こうで小さな人影が動くのが見えた。

「何者！」

ティツカがキヌアを庇うように立ちはだかると、大声で叫んだ。小さな人影は観念したのかゆつくりとこちらに近づいてきた。ティツカはキヌアを守りながらその人影に目を凝らす。次第にその姿がはつきりしてくると、ティツカが驚きの声を上げた。

「クシ皇子！」

片手でボーラをくるくると回しながら近づいてきたクシは、名を呼ばれてその場に立ち止まった。

「私を知っているのか？」

「聡明で有能と名高い皇子のことは聞き及んでいます。その皇子がこのような悪ふざけをなさるとは！ しかも皇帝陛下のお后を狙うなどと正気の沙汰ではありませんよ。それともこれがクスコの流儀なのですか！」

ティツカは憤慨して、まくし立てた。

「さすがはキリスカチエの戦士だ。私はその腕前を見たかった」

「だからといって寛いでいるところを狙うとは何と卑怯な！」

ティツカは怒りでワナワナと震え出した。キヌアはティツカを落ち着かせようと、彼女を優しく抱えるようにして自分の横に立たせた。

「皇子、どういうことです？」

まだ覚えてたてのクスコの言葉を思い出しながら、キヌアはクシに直接問いかけた。

ケチュア族の者が遠縁にいるティツカはクスコの言葉にも精通している。だからティツカが通訳も兼ねてキヌアの供をしてきたのだ。しかしキヌアはここに来てはじめてクスコの言葉を覚えた。簡単な言葉なら聞いて理解できるほどにはなったが、話すのは容易ではない。

「戦士の实力は不意を狙われたときに発揮される。

キリスカチエ族は老若男女誰もが優れた戦士だと聞いている。その中でも特に（天の女王）の娘は有能だと……」

クシが回していたボーラを止めると、その腕に血が滲んでいるのが分かった。キヌアの放ったボーラはクシの腕をかすっていたのだ。相手の顔も分からないような距離でキヌアは命中させるでもなく外すでもなく絶妙なタイミングで相手に狙いを定めていたのだ。相手が敵だと確信できていれば間違いなく急所を狙っていただろう。

「私を試して何を……」

「別に何も……。ただ有能なキリスカチエの戦士の技をこの目で見てみたかっただけだ。」

ついでに、成人の儀で私を探っていた理由も知りたかった」

キヌアはさつと表情を変え、隣のティツカを振り返ると肩を竦めて見せた。

「気づかれていたのね」

ようやく落ち着きを取り戻したティツカがキヌアに代わって説明した。

「キヌアさまは婚礼の前にクスコの様子を見に来られたのです。ちょうどケチュア族の成人の儀が行われており、あの儀式でいまのケチュアの軍事力を窺い知ることができました」

「それでどう思われた？」

キヌアは視線を下に落としてしばらく考えていたが、顔を上げると口先でふふつと嗤って言った。

「まるで子どものお遊戯のようだった」

「キヌアさま！」

齒に衣着せぬキヌアの言葉に、ティツカがハラハラしながらキヌアとクシを何度も交互に見た。クシは啞然としてキヌアを見つめた。キヌアは構わずに続ける。

「キリスカチエではあれくらいの試練に耐えられない弱い者は生き残れない。ケチュア族は平和な一族だ……」

それを聞いてクシは大声で笑い出した。

「やはり君は素晴らしい戦士だ。クスコにはそんな疑問を持つ人間はひとりもないよ。……そう、この国は平和に慣れすぎて本当の試練を知らないんだ」

笑ってそう言いながら、最後には悔しそうに目を伏せた。

「この国ではあなたは変わった存在ね。儀式の内容はともかく、あなたの能力には感心した」

「いいや。私は未熟だということが今日よく分かったよ……」

クシが腕を押さえた。さっきボーラを回していた腕が腫れあがっている。キヌアの投げたボーラはクシの腕にかすり傷だけでなく、かなりの衝撃を与えていたようだ。

「まあ、手当てを！」

ティツカがクシの腕を取ろうとしたが、クシは体をねじって腕を

隠してしまった。

「このくらい、大丈夫だ。

敵が反撃できないように、あの距離で、そして一瞬で確実に腕を狙うことができるとは。そんな戦士が存在するとは思わなかった。

お願いがある。どうか私にキリスカチエの武術を指南してほしい」

クシはキヌアの正面に来て跪き、頭を下げた。

「そんなこと、無理です。キヌアさまはケチュアとキリスカチエの架け橋となるために皇帝陛下に嫁いできたのです。皇帝陛下の許可無く勝手なことができるはずないじゃないですか!」

「ほう。勝手に部屋を抜け出し、服を破って、宮殿中を飛び回ることは陛下が許したというのか?」

ティツカは「うつ」と唸ってキヌアを見た。キヌアはケラケラと笑い出した。

「皇帝は……父上は何も言うことはできません。君を後に迎えたものの、年老いてすっかり臆病になってしまった父上は、勇猛な戦士である君もキリスカチエ族も怖いのだ。

それに君も、これから毎日宮殿の中に籠って暮らしていくことなどできるのかな?」

キヌアは暗い石壁の中でじっとしている自分を想像して吐き気がしそうになった。

「わかった。その話、受けましょう」

クシの顔が輝いた。

「その代わり途中で逃げ出すことは許さないわよ」

久しぶりにキヌアの目が戦士の鋭い光を宿した。

「キヌアさまがここで生き活きと暮らすにはそれが一番良い方法でしょうね……」

ティツカはそう言って苦笑いするしかなかった。

4、キヌアの教室

4、キヌアの教室

カツ、カツ、カッン……。

早朝の中庭に響く音でリョケは目を覚ました。空はまだ薄暗い。

「相変わらず、熱心だな……」

ぼやいて再び寝付こうとしたがうまくいかず、結局起き上がってマントを羽織ると、中庭に行ってみることにした。

朝もやの中に二人の人影が見えた。向かい合った人影は中庭の中心でゆっくり回るように歩きながら、近づいたり離れたりしている。近づいたときお互いの持つ石斧をかち合わせる乾いた音が、静かな宮殿に響いているのだ。

リョケは中庭の隅に腰掛けてその二人の動きをぼんやり眺めていた。

「クシと、キリスカチエから来た側室か……」

突然後ろから声がして、リョケは驚いて振り返った。兄のアマルが腕を組んで立って同じようにもやの中の人影を見つめていた。

アマルはすでに独立して王宮の外に自分の館を構えている。將軍職にある有能なふたりの武将とともに、クスコの軍部を執り仕切る重要職に就いている兄は、このところやけに忙しいようだ。毎日の

ようにまだ夜の明けきらないうちから宮殿に出向いて軍部の会議に顔を出す。軍部とは違う役職にあるリヨケには兄の仕事について余計な口出しすることはできないが、兄が早朝にここにいること自体、あまり穏やかな状況ではないということは察することができる。

「兄上。おはようございます。随分とお早いことで……。
もう何日になりますか。ああやって毎朝稽古しているのですよ」

「クシも妙なことを考えたものだ。異部族の女に武術を教わろうとは……」

「女と言ってもキリスカチエの戦士ですからね。腕前は確かな筈です」

「しかしあの女はケチュアとの和平の証として皇帝陛下に嫁いできたのであって、武術の指導に来たのではない」

「そんなことはクシも彼女も百も承知ですよ。皇帝陛下の後であるのは事実なので、逃げ出そうとしない限り、彼女が何をしよう、とやかく言うことはできません。

それどころか、クシのお蔭でかえって父上もほっとなさっているのではないですか？ 何せあの女戦士を娶ったものの、どう扱ってよいのか分からず、未だに彼女に会おうともなさらないのですから。クシが彼女の相手をしてくれるのでキリスカチエの機嫌を損ねずに済んでいるですよ。もちろん、クシは純粋に武術を教わりたいたいだけでしょうけど」

「なんという物言いだ、リヨケ！」

「本当のことです」

リヨケは、すっかり老け込んでしまったかつては勇猛だった父王に苛立っているのだ。アマルにも同じような思いがないわけでもないが、あまりにもあからさまな事を言うリヨケを睨みつけた。

「いくら自由が許されているとはいえ、皇子と側室が早朝に二人きりで会っているなど、ほかの貴族たちに知られたらどのような噂が立つか分かったものではない。クシにあまり派手なことをするなと申し伝えておけ、リヨケ！」

そう言い捨ててアマルはその場を後にした。リヨケは顔を顰めて兄の後姿を見送った。

アマルは冷静沈着で思慮深い。それを買われて今の重要職に就いているのだが、実は保身的で事を荒立てるのを好まないだけなのだ。あの兄にはウルコから王位継承権を奪おうという気概はなく、ウルコが皇帝の座に就いたあと、何食わぬ顔で従順に仕えていそうだが、兄の姿が消えたあと、リヨケは脇にペツと唾を吐き出した。

クシは必死だった。

—— この戦士にはまだ敵わない ——

向き合ってみると、ますます相手の強さを思い知り、今まで誰よりも強いと称されてきた自分が恥ずかしくなった。しかし同時にそれは喜びでもあったのだ。高い位置にいる彼女に追いつくという新たな目標ができたのだから。

必死になって斧を振り回すクシとは対照的に、キヌアは斧を持つ腕をダランと下げたまま、ただするするとクシの攻撃をかわす。そしてときどき自分の正面に来たクシの斧を自分の斧で軽く受け止め

る。しかし自分のほうからクシに攻撃をしかけることはしなかった。彼女が薄ら笑いを浮かべているようにさえ思えてくる。クシは余計に焦り苛立った。

キヌアの視線が一瞬横に逸れた。その瞬間をクシは見逃さなかった。今までの苛立ちを全てぶつけるように、渾身の力をこめて斧を振り上げた。

リョケの視線の先で、朝もやの中のひとりが「うつ」と声を上げて倒れこんだ。リョケは慌ててそちらに駆け寄った。クシが腕を押さえてうずくまっていた。

「なんと、クシが倒されるとは！」

「兄上、見ていらしたのか！ 恥ずかしい」

恥ずかしいというよりも、悔しいというのが強いのだろう。クシは唇を噛んで拳で地面を思い切り叩いた。

キヌアは座り込んでいるクシを見下すような格好で立ち、彼の目前に斧を向けた。

「私の隙をついたと思ったのでしょうが、あなたの動きはすべて見えていましたよ。クシ皇子。」

焦れば焦るほど視野が狭くなるものです。戦いは力だけで勝てるものではない。全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです。常に命がかかっていると思えば自然と感覚が鋭くなるものですよ」

「悔しいが、私には勉強することが山ほどあるようだ」

クシはそのまま手足を投げ出して地面に転がった。

「少し休みましょう」

キヌアも自分の斧を置こうとしたとき、

「キヌアどの、私と手合わせしてくれまいか」

と言って、リヨケがクシの斧を拾ってキヌアに向かって突き出した。

「ええ、どうぞ。手加減はしませんよ」

キヌアはニツと笑って、またゆっくりと斧を構え直した。

筋肉質のしなやかな体躯にぴったりと張り付くような服を着ている。キリスカチエ族が着る毛皮をクスコでしかも宮殿内で着ることは許されない。しかしクスコの女物の服といえば、裾も袖も長いものばかり。この稽古のためにわざわざ侍女に仕立てさせたのか、あるいは長い服の袖と裾を切って腰紐でぴったりと巻いたのだろうか。いずれにしてもその特別な服を着て、長い髪の毛をしっかりと纏め上げたキヌアは非常に好戦的に見えた。キリスカチエの伝統であり相手を威嚇する目的のある、眉間や頬や手足に刻まれた刺青が、余計に攻撃的に見せている。

「私はクシと違い、戦の覚えがある。こちらも容赦はしないぞ！」

リヨケはキヌアの迫力に気圧されないように凄んで見せた。クシよりも五つ年上のリヨケは、確かに辺境の部族との小さな争いに出征したことがあるのだが……。

リヨケは斧を担ぐように構えると、キヌアに突進していき、彼女の頭めがけて「やあつ」と斧を振り下ろした。斧の刃先が額を掠めたかと思われた瞬間、キヌアは素早く身を引いた。

全身の力を込めて斧を振り下ろしたため、リヨケは勢いを止めることができず、躓いてよろけた。前のめりになったリヨケの首筋にキヌアが肘てつを加える。リヨケは目の前が真っ暗になりそのまま顔から倒れこんでしまった。

すぐさまキヌアが倒れたリヨケの両肩を掴んでグツと力を入れる。リヨケはすぐに目を覚ました。

「兄上、なんと無様な！」

泥だらけの兄の顔を見て、クシはお腹を抱えて笑い転げた。

「キリスカチエの戦士は聞いていた以上の腕前だ」

「腕前？ 私の腕前をお見せする前に倒れておしまいに……」

「やあ、これは……そうであつた。すまん！」

リヨケが頭を掻いて笑う姿を見て、キヌアも笑い出した。ひとしきり三人で笑い合うと、リヨケがキヌアに切り出した。

「キヌアどの、貴女の指導をクシに独占させておくのはもったいない。ほかの貴族の子どもたちも指導していただけないか」

「私が？ 私は子どもの相手などしたことがないので、できるかどうか」

「子どもと言っても、成人式を迎える直前の少年たちだ。ケチユア

の未来の戦士を育てるために協力していただきたいのだ」

「兄上、その申し出はあまりにも大胆です。皇帝の側室である彼女に、公に武術の指導をしてほしいとは」

クシが口を挟むと、リヨケはクシを睨みつけた。

「大胆なのはお前の方だろう。いくら武術の練習とはいえ、側室と皇子が二人きりで会っていては、どのような噂を立てられるか分かったものではない。彼女が正式な指導者であれば、お前も堂々と習うことができるではないか」

「なんという下世話な勘ぐりだ。大人はそのようなことを疑うのか！」

クシは横を向いて拗ねた。

「クシ、貴族たちがいまウルコを擁護する派と改革派に大きく分かれて反目し合っていることはお前も知っておろう。まだお前には理解できないのだろうが、われらを陥れようとする者たちはどんな些細なことも醜聞に仕立てようとするのだ。慎重に行動せねばならない」

リヨケはキヌアの方を向き直ると続けた。

「キリスカチエとケチュアが手を組んだのは、大国の脅威に備えるためだ。しかし貴女も気付かれたと思うが、われわれはしばらく大きな戦いを知らずに来たので若い世代は戦い方を知らぬ。今、大国に攻められればともに戦える戦士はいないのだ。」

父王も皇太子もキリスカチエと手を組んだことで安心しているが、

それは大きな間違いだ。貴女がここで戦士を育てればクスコに来た意味が大いにあるというものだ」

それを聞いてキヌアは目を閉じ額に人差し指を立てて考え込んだ。しばらくの間そうしてから、ゆっくり顔を上げると言った。

「私にその大役が務まるか分かりませんが、お引き受けしましょう。しかしお二人にも私の侍女にも手伝ってもらわなければなりません」

「それはありがたい！ キヌアどの、是非頼む」

リヨケはキヌアの肩を掴んで頭を下げた。キヌアは微笑んで頷くと、リヨケとクシを見て言った。

「キヌアと呼んでもらって結構です」

しかしクシは難しい顔をして考え込んでいた。彼は兄の話の中にあつた重要な部分を聞き流してはいなかったのだ。

「兄上、大国の脅威とは、もはや単なる危惧ではないということです」

「危惧に終わるかもしれないし、そうでないかもしれない。いずれお前自身も現状を知る時が来るだろう」

空が明るくなり、三人の姿を朝焼けが真っ赤に染めていく。やがて不穏な朱い太陽が静かにクスコの街全体を照らしていった。

数日後、宮殿の中庭に貴族の少年たちが大勢集められ、キヌアの教室が始まった。

面白いことに、婚礼の儀で蔑む様な目でキヌアを見ていた貴族たちも、クシを負かすことのできる女戦士から直々に自分の子どもを教えてもらえるとあつて、競って子どもを参加させようとした。故にこの教室に反対する声など上がる隙はなかったのだ。

すべてはリヨケの巧みな触れ込みのお蔭だった。

あまりの評判にキヌアだけでは到底手が足りず、侍女ティツカとクシとリヨケもその対応に大わらわだ。

派手なことをするなと伝えておいた筈なのに全く逆の状況になってアマルは頭を抱えたが、今更どうすることもできなかった。

「リヨケ兄さまは、悪知恵にかけては天下一品なのだ」

クシがキヌアに囁くと、キヌアは噴き出した。

「皇子、私にも手伝わせてもらえないか？」

後ろから声をかけられて二人が振り向くと、成人の儀でクシと一緒に合格したワイナが立っていた。ワイナは成人の儀からそれほど経っていないというのに、見違えるような逞しい体つきになっていた。日に焼けた黒い肌がそう見せているのかもしれない。

彼は儀式のあとすぐに、自ら願い出て辺境の視察団に付いて西の外れまで行っていたのだ。

「ワイナ、戻ったのか？」

クシは喜んで親友に飛びついた。

「ああ、ちょうど昨日帰ってきたところなのだ。この面白いことに皇子も絡んでいると聞いてね。是非私も参加したいと思ったんだ」

「それは心強い！」

クシがワイナを紹介すると、キヌアは

「ええ、よく存じ上げています」

と言って笑った。それもそのはず、キヌアは成人の儀の様子をすべて見ていたのだから。クシとともに合格した赤い羽根の少年を知らない筈はない。しかしそんないきさつを知らないワイナは不思議な顔をした。

「勇敢な青年ワイナの噂は、キリスカチエまで届いていたそうだよ」

「冗談めかしてそう言つと、クシはキヌアの方を見て肩をすくめて見せた。

クスコの宮殿に活気が戻ってきたのは何年ぶりだろうか。戦いを忘れ、意味も分からずに形式だけの稽古をしていた少年たちは、部族を身をもつて守ろうとしてきた戦士キヌアの気迫に触れ、意欲が湧いたらしい。今まで嫌々訓練を受けていた少年たちの目が皆輝いていた。

そんな少年たちを見て、クシやリヨケやワイナも身の引き締まる思いがした。自然と指導にも熱が入る。

中庭に元気な子どもたちの掛け声がこだまする。自分の子どもを見守る親たちだけでなく、子どものいない貴族や貴婦人たちもその

様子を興味深々に見に集まってきた。

キヌアを侮蔑していた貴婦人たちも、自分たちとは違う特技を持つキヌアに対して見る眼が変わったようだ。逆に懂れるような眼差しで彼女を見つめていた。

毎日賑わう中庭の様子を見ていて、面白くないのはウルコだ。ただでさえ、クシの成人式から『ウルコさまの式の時とは大違いだ』と噂する声を耳にして苛立っていたのだ。

皇帝には「側室が勝手なことを始めたのですが、あのまま放っておいて良いのですか」と告げたが、関わるのが面倒な父王は「皆が必要だと思うのなら、それでいいのではないか」と全く煮え切らない。ウルコの視線は常に、キヌアの教室でも中心的な存在であるクシに注がれていた。

「あいつがすべての元凶だ。この平和なクスコに余計な揉め事を持ち込む。いつか思い知らせてやらねば」

キヌアの教室が開かれてから特に、ウルコのクシに対する恨みが募っていった。今やクシを陥れる計画を練ることで彼の頭の中はいっぱいだっただけだ。

ウルコの気持ちを他所に、キヌアの教室は連日大賑わいだ。

生徒たちの一番の楽しみは稽古のあとに行われるクシとキヌアの合わせ稽古だった。少年たちの指導が終わると、クシの指導を兼ねてキヌアとクシが合わせ稽古をするのが日課になっていた。生徒たちはその試合の観戦を心待ちにしているのだ。小さな観客たちに囲まれて対戦するふたりは緊張を隠せない。少年たちは皆、懂れのクシに勝ってほしいと応援する。

しかし何度対戦しても、クシが一方的に攻撃をしかけ、キヌアが

それをかわして最後に一撃を加えるという態勢は変わらなかった。大勢の小さな観客がいる手前、クシに恥をかかせまいとしてキヌアが負けてみせることもあった。少年たちはクシが勝つと大歓声を送ったが、クシにとってこれほど屈辱なことはなかった。しかし、屈辱感を味わう度にクシの腕は少しずつ確実に上がっているのだった。いつかキヌアに追いつき追い抜こうと、クシはひたすら練習に励むのだった。

5、狩り（その1）

5、狩り

ざわざわと騒がしく、朝から宮殿中が落ち着かない。大勢の走り回る音、話し声、ときどき怒鳴りつける声も聞こえてくる。そんな喧騒を他所に、クシはひとり部屋の中で作業に没頭していた。

拳ほどの石を細かく編み上げた縄で包みしつかりと固定する。そこから一筋の縄を伸ばし、その反対側にも同じように石を結わえ付ける。片腕を伸ばしたくらいの長さの縄の両端に同じ大きさの石が均等に結び付けられたもの、（ボーラ）と呼ばれる道具を、昨晚からもう十数個仕上げた。

最後のボーラの縄をしつかりと引き締めて準備を完了させると、それらを束ねて腰に提げ、肩に斜めに掛けたたすきに挟むようにして背中に小ぶりの石斧を携えた。

部屋を出ると宮殿内の騒ぎがますます賑やかに聞こえてきた。皆が慌ただしく動き回っている中を、クシは悠々と歩いていった。

その日は、年に一度、貴族たちが揃って狩りを行う日なのだ。それなりの地位のある者たちは大勢の侍従を遣って狩りの支度をする。主人のために侍従や召使いが粗相のないようにと必死で走り回っているのだ。

成人したばかりのクシは、初めてこの行事に参加することを許された。新参者の若い皇子には代わって支度をしてくれる侍従などいない。しかし自分の納得のいくように準備するほうがよほど楽だ。

ばたばたと走り回っている侍従、召使いたちを横目に見ながら、クシはつくづくそう思った。

宮殿の出口に続く広い廊下を歩いているとき、突然見知らぬ女性が声をかけてきた。

「大物を仕留められるといいわね」

クシは怪訝な顔で女性を見る。

女性にしてはやけに背が高く、そのせいで着物の丈が合わずに、本来隠れるはずの細い足首がむき出しになっている。体つきもこれまた女性らしくなく頑丈そうで、随分と肩幅があるので裾^{ゆき}がきつそうだ。無造作に垂らした長い髪にはあまり艶がなく、縮れて大きく広がり顔を半分隠している。優雅な宮殿の貴婦人とはとても思えない。

はて、どこで会ったのかと考えを巡らせながら、しばらく女性の顔を見つめていると、彼女の背後から見慣れた顔の女性が声をかけてきた。

「クシ皇子。今、狩りのお見送りに行くところだったのですよ」

そう言ったのはティツカだ。

「さあ、行きましょう。キヌアさま！」

「キヌアなのか？」

クシは驚いて、女性の顔をしげしげと覗き込んだ。

顔の左右に垂らした髪の毛に隠れてよく分からなかったのだが、彼女が軽く首を振って髪が払われると額や頬に小さな刺青があるの

が分かった。よくよく見ればその顔は確かにキヌアのものだった。

「ほら御覧なさい、ティツカ！ 私、やはり広場には顔を出さないわ！」

キヌアはすっかりふてて、踵を返すと自分の部屋に向かって歩き出した。

「キヌアは狩りに参加しないのか？」

勢いよく振り向いて、キヌアが怒鳴った。

「女は参加してはいけないそうよ！ 盛装をして殿方を送り出すのが慣わしなんですって！」

狩りには誰よりも自信のある自分が女という理由だけでどうして参加できないのかと目で訴えている。さらに慣れない着物は窮屈なうえ似合わないこともよく分かっていて、その姿で人前に顔を出したくないのだろう。

毎日武術の指導をしているキヌアがクスコの女性用の着物を身につけることは今までほとんどなかったのだ、おそらくキヌアの丈に合う着物の用意が間に合わなかったのだ。

ぶいっとな後ろを向いて歩き出したキヌアの腕をクシが追いかけて捕まえた。

「良い所がある。ティツカも一緒に来てくれ」

クシはキヌアの腕を無理やり引っ張り、廊下の奥へと歩き出した。「何を！」と言いながらもクシに引かれるままにキヌアも付いていく。ティツカが慌ててその後を追った。

長い廊下の突き当たりに広い部屋があった。立派な構えの部屋だが人気がない。中へ入るとすべてがきれいに整理されていて、今さっきまで部屋の主が身支度をしていたかのように、身につける様々な物が並べられていた。きれいに畳まれて重ねられた色鮮やかな織物や美しく輝く銀や青銅の装飾品は、その部屋の主が女性だったことを物語っている。

「ここは一体……」

「私の母の部屋だ」

「母……と言うことは、皇后さま？ 勝手に入ったことが知れたら……」

ティツカが怯えて後ずさった。

「母は私が幼い頃に亡くなった。この部屋には母の遺品がそのまま置いてあるのだ」

キヌアは美しい織物や装飾品にうつとりと見入った。

「この中に、どれかキヌアに似合うものが見つかるかもしれぬ」

クシはあれこれと物色すると、積み上げられた織物の一番下にある薄手の布を引っ張り出した。

「キヌアにはこれが合いそうだ」

クシが手にした小さい長方形の布には、極彩色の模様が細かく織

り込まれている。

「この頭巾を被れば髪が気にならないだろう」

クシはキヌアを石の寝台に座らせると、頭にその布を軽く掛けた。ティツカがクシに替わって布をキヌアの頭に押さえつけると、広がった髪を丁寧にまとめて頭巾の中に押し込み、布に付けられた細い紐を顎の下で縛って固定した。

「まあ、キヌアさまのお顔の色によく似合って素敵だわ！」

ティツカは自分で作った作品を眺めるように、キヌアの顔を見て感嘆の声を上げた。そうしている間にもクシはまた部屋の中を探し回って、今度は厚手で大きめの布と青銅製の長いピンを持ってきた。

「着物の丈が合わないのは、このショールを掛ければ目立たないだろう」

クシから受け取った布をティツカが広げてみると、それはキヌアが被っている頭巾よりもさらに色彩豊かな模様が織り込まれた大判の布だった。キヌアもティツカもその色の鮮やかさに思わず揃って溜め息をついた。

「クシ、亡くなった方とはいえ皇后さまの物ですもの。勝手に持ち出せばすぐに分かってしまうわ」

心配そうに言うキヌアにクシは首を振った。

「大丈夫。これらは母が自分には似合わないと言ってほとんど身につけたことがなかった物なのだ。この青銅のピンも、皇后が公で身

につけるものは銀と決まっているから、人前でつけることはなかった」

クシがキヌアの肩に布を掛けると、ティツカが丁寧に前を重ね、ピンを刺して留めつけた。

「キヌアさま、お立ちになって」

ティツカに促されてキヌアが立ち上がると、クシとティツカが同時に「おお！」と声を上げた。

先ほどまで鬱陶しく顔に掛かっていた髪の毛を色鮮やかな頭巾が覆って、キヌアの日にやけた凜々しい顔を際立たせていた。丈の合わない不恰好な着物はすっぽりとシヨールに隠れ、その極彩色の模様がキヌアの長身の体をかえって引き立てている。

「これなら外に出るのも恥ずかしくないだろう」

「恥ずかしくないどころか、ほかのご婦人よりもずっと美しいですよ！」

クシとティツカは、キヌアをままごとの道具にして遊ぶ子どものようにはしゃぎようだ。ふたりのおもちゃにされているようであまり気持ちは良くないが、いつまでも拗ねて籠っているわけにはいかない。キヌアはふたりに抱えられるように広場へと向かった。

広場では、黄金で装飾された皇帝の輿の周りに大勢の貴族が集って出発を待っていた。その周りでは歌や楽器が奏でられてお祭り騒ぎだ。

クシが遅いのであちこち捜し歩いていたりヨケが、広場に入って

きたクシをいち早く見つけて駆け寄った。

「婚礼の儀のときといい、お前というやつは！」

文句を言おうとしたが、クシの後ろに立つ女性を見て言葉を切った。

「クシ、こちらの方は……」

クシはティツカと顔を見合わせてクスクスと笑った。その様子を見てリヨケは女性に向き直り、驚いた顔で頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「まさか、キヌアなのか？」

クシとティツカが同時に深く頷く。キヌアは恥ずかしそうに顔を伏せた。

「ほう。なんと見違えた。どうやって化けたのだ？」

近づいてそう言ったリヨケの脛をキヌアが思い切り蹴飛ばした。シヨールの中でビツと着物の裾の裂ける音がすると同時に、リヨケが脚を抱えてうずくまっていた。

狩りに出る男たちの列を女たちが左右に並んで見送る。特に皇帝の輿の右側に居並ぶ側室たちの列は華やかだ。ウルコの母を先頭に順々と若い后が並んでいる。

輿がゆつくりと進んでいく間、見送る側室たちの顔をひとりひとり眺めていた皇帝は列の最後に並んだ后に思わず目を留めた。驚い

た顔になった皇帝は、輿が行き過ぎても振り返ってその后を見つめている。輿のかなり後ろの方を歩いていたクシとリヨケにも、皇帝の表情の変化が見て取れた。

「これで父上も、キヌアを少し見直してくださるといいのだが……」

リヨケの言葉にクシも頷く。ちょうどふたりはキヌアの横を通り過ぎるところだった。ふたりが手を上げると、キヌアはシヨールの陰から片手を出し、力強く握って見せた。そして二人に鋭い視線を送りながら深くゆっくりと頷いた。

「私の分まで大物を捕らえてこいと言っているぞ！」

「格好は変わっても、中身はそう簡単に変えられるものではないな

……」

クシとリヨケはそう囁きあつてクスクスと笑った。クシがその応援に答えるようにキヌアに向かって同じように拳を握って頷くと、キヌアは柔らかな表情に戻ってにつこりと頷き、シヨールの陰から出した手を小さく振った。

クスコからだいぶ離れ、一行は見渡す限り丈の低い草しか生えていない広大な平原に着いた。

周囲が広く見渡せる場所にすみやかに天幕が張られ、下ろされた輿が据えられて、そのまま皇帝の玉座になった。皇帝の天幕の周りに貴族たちは各々天幕を張り、自分の持ってきた道具を点検し、どの辺りで狩りをするかを仲間と話し合った。

最大の見せ場は狩りの最後に行われる。目星をつけた大型の獲物

を貴族たちが一斉に追いかけて、罾に追い込んで捕らえるのだ。立派なりヤマや鹿を総出で追いかけていく様は壮観だ。

しかし大掛かりなその獵が行われる前に貴族たちは各々小型の動物を獲りに行く。特に初めて参加した者は、そこでどのような動物を捕らえたかによって、古参たちに自分の実力を見せ付けることができるか否かが決まるのだ。

新米のクシは同じく新米のワイナと顔を突き合わせて何を狙おうかと作戦を立てていた。

そのとき突然、クシのいる天幕へ大勢の侍従を引き連れてウルコがやってきた。

「お前たちは今日が初めてなのだ。あまり気負うでないぞ。何も捕らえられなくて当たり前なのだ。ウズラ一羽で十分。ビスカツチャ【野うさぎの一種】など捕らえたら大したものだからな。グアナコ【鹿くらいの大きさの動物】を狙おうなどと考えるでないぞ。せいぜい大怪我をして終わりだ」

ふたたりを覗きこんで馬鹿にしたようにそう告げると、ウルコは高笑いをしながら自分の天幕へ戻っていった。

「今に見ている。グアナコでもリヤマの群れでも、あいつに獲れないものを獲って驚かしてやる！」

ウルコの言葉でクシがひどく興奮し出したことに気付き、ワイナは慌てて忠告した。

「皇子、皇太子の口車に乗ってはいけない。皇子の気持ちを煽って恥をかかせようとしているのだ」

「私が気負って何も獲れなくなるとでも思うのか、ワイナ。失敗しなければ恥をかくことなどない。ウズラしか獲れずに終わったら、あいつは私を馬鹿にしてあざ笑うだろう！」

そう言いつと、クシは斧とボ―ラをひつつかんで広い平原へと駆け出してしまった。残されたワイナは嫌な胸騒ぎを覚えたが、クシに限って失敗することはないと思いき、自分の獲物を探しに行った。

5、 狩り（その2）

その日は穏やかな良い天気だったが、平原にはほとんど動物の姿が見られなかった。狩りの腕には自信のあるアマルやリヨケでさえウズラー羽すら仕留めることができず、高原を彷徨っていた。誰よりも早く出発したクシはそんなことなど知らない。自分のアタリの付け方が悪いのだと考えて、平原のずっと先まで獲物を探して歩いていった。

皇帝や貴族たちの天幕もすっかり視界から消え、ほかの貴族たちの姿もどこにも見えない。クシはいつのまにかひとりぼっちになっていた。しかし誰にも知られないうちに大きな獲物を捕らえられるかもしれないという期待で胸が高鳴り、不安などまったく感じていなかった。

行く手にみすばらしい小屋が何軒か寄り集まって建っているのが見えてきた。ほんの数家族が暮らす小さな集落なのだろう。

しかし小屋に近づいてみると人の気配はまったくなく、どの小屋もうち捨てられたあばら屋のようだ。住人はとくにここを捨ててどこかへ移り住んだのだろうか。今は人が住んでいないにしてもかつて集落があったということは、狩りに適した平原を逸れてしまったのだとクシはがっかりした。

来た道に引き返そうとしたとき、すぐ脇にある灌木の茂みが揺れて、ひとりの老人が姿を現した。老人はひとり集落の周りを散歩でもしていたのだろうか。クシの姿を見て目をまんまるにして驚いた。そして貴族の身なりをしたクシを畏れ、慌てて跪き、頭を地面に擦り付けた。クシはあまりにも恐縮している老人に優しく声を掛けた。

「私は狩りの途中で誤ってここへ迷い込んでしまったのだ。ほかには誰もいない。そんなにかしこまることはない。面を上げてくれ」

老人は恐る恐る顔を上げて、上目遣いにクシを見た。

「今日は獲物がまったく見つからないのだ。どこかでリヤマの群れなど見かけなかったか？」

クシは老人の緊張を解こうとわざと親しげに声をかけてみた。老人はしばらく無言でおどおどとクシを見上げていたが、何かを決心したように腰を浮かせると、クシに縋り付いてきた。

「貴方さまならわしらの村を救ってくださるかもしれない。

実は、わしらの村の畑が黄金のビクーニャ【グアナコと同じく鹿くらいの大きさの動物】に荒らされて困っているのです。追い払っても追い払っても何度もやってきて、作物の芽はほとんど喰い尽くされてしまいました。わずかに残る作物の芽を喰われてしまったら、わしらはみな飢え死にしまいます。そうなればこの村と同じように滅びるしかありません。

ビクーニャは神の遣い……捕らえたことが知れば死罪です。わしはこの老いぼれの命を捧げて村を救いたいと思い、ビクーニャを追いかけてきたのです。しかしあのすばしっこい動物をどうやって捕らえられるのか思案に暮れておりました。しかし貴方のように立派な方なら……。どうか、わしの代わりに黄金のビクーニャを捕らえていただけませんか？」

老人は哀願するようにクシの服の裾を掴んだ。

「しかし……貴族であってもビクーニャを捕らえるのは特別に皇帝

の許可を得た者でなくてはならないのだ。それは難しい相談だ」

「捕らえたビクーニヤを皇帝に献上すればお赦しを得ることもできましょう。わしら庶民には決してできませんが、貴族の方なら皇帝に差し出すことは可能でございます」

「例え皇帝に差し出したとしても、許しを得ずに捕らえたことには変わりない。そのようなことが赦されるかどうか……」

「ここに迷ってこられたあなたを、わしは勝手に天が遣わした救い主だと思い込んでしまいました。しかし無理なお願いなら諦めるしかない。わしがうまく捕らえてひとり罪を被るか、そうでなければ村人はこのまま飢え死にするのを待つほかはないのでしょうか……」

老人は縋り付いた手をするするとクシの脚に沿って下ろし、そのまま地面についてその上に顔をうつ伏した。

クシは老人がうつ伏したまま肩を震わせて泣くのをしばらく見下ろしていたが、溜め息を深くつくと、しゃがんで老人の肩に手を置いた。

「ビクーニヤはどの辺りにいるのか、案内してくれ」

老人ははつと顔を上げると、クシの腕を掴んで今度は嬉し涙を流した。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

目の横にある大きなホクロがますます老人を憐れに見せて、クシは助けてやらねばという使命感にかられた。

老人に連れられてクシは集落を越え、さらに向こうに続いている平原へと歩いていった。

遙か向こうのほうに二頭のビクーニヤが草をはんでいるのが見えた。太陽に照らされて、繊細な体毛に覆われたその動物は黄金に輝いているように見える。その姿は太陽神の遣いと呼ぶにふさわしい。ビクーニヤの毛はどの動物の毛よりもなめらかで美しいので、その毛織物は皇帝しか身につけることを許されていないのだ。

「あの二頭です。ビクーニヤは敏感で逃げ足が速い。慎重に近づいてください」

老人が親切に教えてくれるが、クシは緊張から返事も返せず手にじつとりと汗をかいていた。ボーラが滑らないようにしっかりと手に巻きつける。

「あとは任せて、そなたは後ろに下がっているがいい」

クシは草の蔭に身を潜めながら、少しずつ少しずつ獲物に近づいていった。ビクーニヤは相変わらずのんびりと草をはんでいる。

ボーラが届く距離まで近づいたとき、一頭がさつと顔を上げて耳を立てた。クシが素早くボーラで頭を狙う。ボーラが見事に命中して一頭目が倒れ込む前に、二頭目は向きを変えて走り出した。二頭目の足を目掛けてクシはボーラを放つ。縄の両端にくくりつけられている石が遠心力でビクーニヤの後ろ足にくると勢いよく絡みついた。

後ろ足にボーラを絡ませたまま、ビクーニヤは疾走を続けるが、動きは明らかに鈍い。もうひとつの後ろ足に向けてボーラを放つとボーラが引つ掛かり、そのまま横の脚も一緒に締め上げてビクーニヤの動きを止めた。両後ろ足を縛り上げられ走ることのできなくな

ったビクーニヤは、前足をいざるように動かしたが自分の身体の重みでそれ以上進むことができずにその場に倒れ込んだ。

クシは素早く駆け寄って、一頭目の喉を斧で切りつけてとどめを刺し、さらに二頭目にも走り寄ってその体を押さえつけとどめを刺した。汗を拭いながら初めて自分で捕らえた獲物を眺めた。

神の遣いと呼ばれる神聖な動物を二頭もその手にかけたことへの罪悪感は、村の人を救ったという正当性と俊敏な動物をひとりで仕留めたという高揚感が覆い隠し、そのときのクシには感じられなかった。

この大きな獲物はあとで遣いの者をよこして皇帝の天幕へ運ばせよう。一度天幕へ戻って事の次第を話さなければ……。そんなことを思いながらビクーニヤを縛り上げ、老人のほうを振り返ったときはるか向こう側でこちらを眺めている老人の後ろに、ウルコと侍従たちが揃って立っているのが見えた。

一番の見せ場となるはずの囲い込み猟も、その日はまったく成果を得られなかった。唯一迷い込んできたグアナコにまんまと逃げられ貴族たちはみな意気消沈していた。狩りの成果は国の運命を占うことにも繋がる。貴族たちの中には狩りの不猟とは別の不吉な何かを感じている者も多かった。

ワイナがやっと捕らえた野ねずみを袋に詰めていると、リヨケがやってきて声を掛けた。

「ワイナ、クシと一緒にではなかったのか？ 囲い込み猟のときにも姿が無かったのだが……」

「はい。クシ皇子は私よりもずっと早く出発しましたが、まだ戻ってきてはいません。天幕が出る前に皇太子さまに声を掛けられ、大

物を捕まえて見返すのだと大変意気込んでいましたから」

「勇み足をしていなければいいのだが……」

リヨケの表情が曇った。

皆が帰り支度を終えても、ウルコとクシだけはなかなか戻ってこなかった。皇帝がふたりを置いて出発せよと命令したとき、クシがこちらに向かってくるのが見えた。

「クシ！」

リヨケとワイナが駆け寄ろうとしてはたと止まった。クシは両腕を後ろ手に縛られ、ウルコの側近がその縄を持って付いてきている。さらにその後ろからウルコと侍従たちがぞろぞろとやってきた。侍従たちは二頭のビクーニヤの死骸を抱えてよろよろと歩いてきた。皇帝の輿の前に来ると、クシはウルコの侍従たちによって罪人のように跪かされた。クシの横にはビクーニヤの死骸が並べられた。貴族たちは呆然と立ち尽くしたまま、その様子を見ている。

「これは一体……」

皇帝が目の前の光景の意味を理解できずに呟いた。

「こ奴は、恐れ多くも神の遣いであるビクーニヤに手をかけたのでございます……」

ウルコが声を張り上げた。

「クシ、何故このようなことをした……」

皇帝はクシの凶行をまだ信じられない様子だ。

「ビクーニヤの毛を皇帝陛下に献上するつもりでした」

「それなら何故先に陛下のお赦しをいただかなかったのだ」

ウルコが腕を組みクシを見下して言う。

「このビクーニヤに畑を荒らされて困っている村人がいたのです。その退治も兼ねて捕らえようと思ったのです」

「それはこの老人か？」

ウルコは侍従が連れてきた老人を前に引き出すように命令した。

皇帝の御前なので、老人は素早く侍従たちに頭を押さえつけられた。

「皇子の言うことは本当か？」

頭を押さえられたまま、老人は苦しそうに話す。

「い、いいえ。私はこの方に獲物がいる場所を教えるように脅されて……。ほかに何もいなかったため、仕方なくビクーニヤのいる場所を教えてしまったのです」

クシははっと顔を上げて俯いている老人の背中を見つめ、次にウルコを睨みつけた。

―― 嵌められた！ ――

「貴族の立場を利用して、なんという横暴なことを！」

ウルコが大げさに驚いてみせた。

「クシ、ビクーニヤが神の遣いであることを知らなかったとは言わせないぞ。ビクーニヤを殺せばどのような罪が待っているのかも承知であるう」

皇帝が静かに問いかける。クシがここで言い訳をしたとしても証拠はない。仕方なくクシは無言で深く頷いた。

クスコに帰ってきた貴族たちの列を、送ったときと同じように后や召使いたちが並んで出迎えた。

キヌアも窮屈な着物やシヨールを一日脱がずに我慢し、ようやく出迎えの時間がきてホツとしていた。

宮殿前の広場を皇帝の輿が通り過ぎ、次に貴族たちが獲物を抱えた侍従を従えてぞろぞろと通り過ぎ、宮殿の中へと入っていく。

キヌアは自然とクシの姿を探していた。

ウルコ、アマル、リヨケの一団が通り過ぎていった。リヨケが通り過ぎるときにキヌアと目が合い、眉間に皺を寄せて辛そうな顔を見せた。キヌアはさっと顔色を変え、今度は必死でクシの姿を探した。

大勢の貴族と従者が後から後からやってくる。しかしどこを探してもクシの姿が見当たらない。列も終わりに近づき、ワイナが自分で袋を抱えてとぼとぼと歩いてきた。ワイナも暗い顔でじっと俯いている。

列はひととおり通りすぎ、出迎えた人々はその後ろに付いて、祝宴に参加するために宮殿の大広間へと入っていった。広場にはキヌアとティツカだけが取り残された。

「ティツカ、クシがまだ帰ってきていない……」

「ええ、見当たりませんでした」

キヌアは広場の向こうにじつと目を凝らした。しばらくすると大通りのはるか向こうから六、七人の集団がやってくるのが見えた。近づいてくるとそれは皇帝の衛兵たちだった。ふたりの衛兵に抱えられるようにして、真ん中を歩くのはクシだ。クシは病人のように弱々しい足取りで深くうなだれて歩いてきた。

「クシ！」

キヌアが駆け寄ると、うなだれていたクシが顔を上げ虚ろな目を向けた。しかしクシに近づく前に衛兵が手を広げてキヌアを払いのけた。その三人の後から、四名の衛兵が付いてくる。彼らが担ぐ棒には手足を縛られた大きな動物の骸むくろが下がっている。その骸は二体。キヌアに気付いたクシは衛兵に両腕を掴まれたままなんとかキヌアの方に顔を向けようとしていた。通り過ぎてもキヌアの方を振り返り、何かを彼女に訴えかけようとしたが、とうとう一言も発することもなく神殿へと姿を消した。

「どうということなの？」

キヌアの声は震えていた。

「あれはビクーニヤです。ケチュア族はビクーニヤを神の遣いと崇めているのです。赦し無く捕らえたら厳しい処罰が与えられるのです。クシ皇子はほかの動物と間違えてビクーニヤを捕ってしまったんですよ」

「ティツカ、クシがそんな間違いを犯すと思う？」

「そうですね。クシ皇子に限ってそんなことはありえませんか」

「何か誤解されているのよ。誤解が解けるといいのだけれど……」

今まで見たこともないクシの弱々しい姿にひどくショックを受け、キヌアはティツカの手を強く握り締めてその場に立ち竦んでいた。

6、流刑

6、流刑

祝宴は形だけで、まったく盛り上がらなかった。狩りで起きた予想外の事件に衝撃を受けている者が多かったのだ。狩りに参加した者たちは事情を知っているが、留守番をしていたものたちは事情を知らない。しかし重々しい雰囲気には満ちているその場で理由を問う勇気のある者はいなかった。

初めて参加したクシとワイナを称える祝宴のはずだった。期待の皇子が大人の仲間入りを果たしたことを称えようと、皆この祝宴を待ち望んでいたというのに、その主役はいま罪人として神殿で尋問を受けているのだ。事情を知らない者たちも、主役の皇子の不在ということで良からぬことが起こったのだと察することはできた。

キヌアは一応大広間に顔を出したが、気持ちは落ち着かなかった。無言で下を向いてただ時間が過ぎるのを待っていた。場を取り繕うために演じられる陽気な歌や踊りは虚しく聞こえるどころか彼女の心を苛立たせた。

クシがどこでどうしているのか、それだけが知りたかった。

やがて皇帝の傍に寄ってきた側近が何か耳打ちをすると、皇帝はすっと玉座を立ててどこかに姿を消した。

皇帝に続いてウルコが席を立ち、そのあとにアマルとリヨケも続く。ワイナも気が気でなく、もうひとりの主役にも関わらず、彼らに続いて広間を出ていった。残されたものたちはザワザワと騒ぎ出

す。キヌアはたまらなくなつて騒ぎに乗じて広間を抜け出し、ワイナの後を追つた。

彼らは間を空けて点々と太陽の神殿へと入っていく。ワイナもその中に姿を消した。キヌアがその後から神殿に入ろうとしたが、入り口を守る兵に行く手を阻まれた。

「ここからは入れません。お引き取りを」

キヌアは伸び上がつて番兵の背後を覗いたが、薄暗く静まり返つた神殿の中で何が行われているのかまったく分からなかった。諦めて神殿を何度も振り返りながら部屋に戻っていくキヌアだった。

クシは太陽の神像の前に座らされて、神官たちから尋問を受けていた。何故『神の遣い』を手にかけたのか、何度問われても答えることはできなかった。

「皇子、貴方が何の理由もなく、このようなことをするとは信じられない。正直におっしゃってください」

神官が屈んでクシの顔を覗きこみ、親身になつて説得する。

―― ウルコの悪巧みに嵌つたのだ。謎の老人が自分を騙したのだ――

そんなことを誰が信じるだろう。あさましい嘘で罪を逃れようとするとは何と情けない人間なのだと思われて、クシの自尊心が傷つくだけだ。どちらにしろ有罪になるのなら、下手な言い訳をして見苦しい姿を見せるのは止めよう。

クシはどんな罰でも受ける覚悟を決めた。

「すべては神のご意志に従います」

「皇子……」

説得していた神官は残念そうに目を閉じてため息をつく、クシの前から退いた。

ちょうどそのとき、皇帝が側近たちを従えて神殿に入ってきた。ウルコがその後を付いてくる。少ししてアマルとリヨケが足早にやってきて、遅れてワイナが飛び込んできた。クシは兄たちとワイナの姿を見て少し緊張が解けると同時に、急に弱気になっていくのを感じた。思わず縋るような目を兄たちに向けていた。

神像の許に立った皇帝に神官が今までの経過を告げる。クシが何も語らないと聞いて皇帝はクシに厳しい眼差しを向けた。

「理由もなく神の遣いを殺したとなれば、死罪。クシは手柄を立てたいという自己満足からビクーニヤに手をかけた。弁解の余地もない」

皇帝の横に立つウルコはわざと気難しい顔を装ってそう言つと、自分で何度も頷いた。

「理由なら、心当たりがあります」

突然アマルが声を張り上げた。

「もうすぐシトウアの大祭——春分の厄払いの祭り——があります。」

クシは兼ねてより大切な行事を迎える前に、皇帝陛下に上等な織物を差し上げたいと申しておりました。そこで狩りに出た際には是非立派なビクーニヤを仕留めようと考えたのだと思います。陛下がお召しになる織物を作るためにビクーニヤを捕ることは赦されるはずですから。

本来なら先にお許しを請うべきでしたが、まだ若い弟は果たしてうまくビクーニヤを仕留めることができるかどうか自信が無かったことと、陛下をご存知ない方が喜んでいただけるとは思えないかと考えたのでしよう。そこは若さゆえの無知とお許しください」

クシは驚いた顔でアマルを見つめた。クシと目が合うとアマルは深く頷いた。

「そ、それならそれで、何故自分で申し開きをしなかったのだ！嘘について誤魔化そうとしたのは何故だ！」

アマルの進言は予想外の出来事で、ウルコは動揺して叫んだ。

「行動してしまっただあとで事の大きさに気づき、気が動転してしまっただけでしょう」

「は。なんとでも言えるわい。そんな理由で赦される罪ではないぞ！」

ウルコは興奮してアマルに食って掛かる。クシはそんなウルコの姿を憎しみを込めて睨みつけた。

—— こんな状況でなければ、殴りかかっているところだ！ ——

クシは唇をきつく噛んで怒りを必死で抑えていた。

「ウルコは黙っておれ」

皇帝がやつと口を開いた。まだアマルに何か言っただろうと思っていたウルコは、グツと喉を鳴らしてやつとこのことで言葉を飲み込んだ。

「クシ、お前がビクーニヤを余に差し出したいという気持ちであったことはよく分かった。

しかし、市民を脅したり、罪を問われて嘘をついたことは赦されん。さらに神聖なビクーニヤはいかなる理由であろうと黙って手をかけてはならないのだ。

本来ならば死罪だが、お前が若く無知であつたことを考え、最果ての地に流刑とする。

期間はリュウゼツランの苗が生長し、花を咲かすまで……」

リョケとワイナが同時に息を飲む声が神殿に響いた。

サボテンの一種リュウゼツランは生長して咲くまでに十年以上掛かると言われている。極刑は免れたものの、それに次ぐ程重い罪であつた。

ウルコは、極刑まで追い詰めてやることはできなかったものの、邪魔者のクシを遠くに追い払うことができるかと心の底でほくそ笑んでいた。十年あれば自分が王座を継ぎ、クシなどに大きな顔をされることもなくなるのだ。堪えきれずに思わず笑みが浮かぶ。

皇帝は簡単に判決を申し渡すと、すぐに神殿から出て行ってしまった。ウルコも慌ててその後を追った。

皇帝が去ってしばらくすると、罪人には変わらないクシは、衛兵に縛られた腕を乱暴に引き上げられて立たされた。立ち上がったクシはアマルの方を向き、力なく頭を下げた。

「兄上、私を庇ってくださいって、ありがとうございます」

アマルは俯いて大きくかぶりを振った。

「一体……どうしてこんなことになったのだ……クシ……」

アマルの言葉は溜め息に混じってほとんど聞き取れない。

「クシ！ ウルコの策略だろう。何故正直に言わなかったのだ！」

リョケがクシに飛びつこうとして衛兵に止められた。

クシは兄たちの方から正面の神像に視線を移し、キッと睨みつけた。

「今は何も言うことはできない。しかし私は必ず帰ってきます」

クシの強い決意を感じさせる表情を見て、兄弟とワイナは、少しだが心配が和らいだ。

「クシ皇子！ 私は正式に辺境の警護兵に志願する。そして皇子のいる場所まで頻繁に会いに行くからな！」

引き立てられるクシにワイナが必死で声をかけた。クシは微笑んで頷いた。

乾季の空はどこまでも澄み切った藍色をしている。幾筋もの筋雲が空に縞模様を描いていた。

クシが西の最果てに出発する日だ。

出発に先立って、宮殿の中庭の片隅に刑期を計るリュウゼツランの苗が植えられる。皇帝と神官とクシがそこに立ち会った。

そのときクシは、回廊の柱の向こうからその様子を眺めているウルコの存在に気付いた。ウルコの横に従えている侍従たちの中に派手な首飾りと羽根冠を付けた呪術師がいた。目の良いクシは、その呪術師の目の横に大きなホクロがあるのを見つけた。それは間違いなくビクーニヤを捕まえてくれと頼んだあの老人だ。

今更気付いてももう遅い。罪の確定したクシには何も訴えることはできない。ウルコはそれを知っていて、わざとクシに見せ付けているのだ。ここで動揺してはウルコの思うつばだ。クシはいつさい表情を変えず、ふたたび植樹の作業に視線を戻した。

宮殿内の誰もが目にする中庭にクシの運命を決めるリュウゼツランが植えられ、誰も掘り返すことができないように、周囲には太い木の杭がびっしりと立てられた。

数人の衛兵に付き添われて、クシはいよいよ最西の僻地に向けて出発する。

荷物は当座の食糧以外はほとんどなく、粗末な麻の服に巻かれた細い帯に小さな斧を挿すことだけが赦された。耳にはめられた金板も抜き取られて、クシが皇族であることを証明するものは何も無くなった。

貴族たちが大勢クシの見送りに詰め掛けたが、言葉を交わすことは禁じられているため、黙ってクシが通り過ぎるのを見ていた。

宮殿の門を出る間際、クシがもう一度名残惜しそうに宮殿の中を見回すと、柱の陰からじっとこちらを見つめているキヌアの姿を見つけた。

そこに居たのはあの勇ましいキヌアではなく、蒼ざめて今にも泣

き出しそんな顔をした弱々しい女性だった。彼女は、そうしていなければ倒れてしまうのではないかと思うほど頼りなく、柱に全身を預けて立っていた。

『短い間だったが、師として尊敬し、姉のように慕った人……』

クシは、門を出てその姿が見えなくなるまで、キヌアを振り返って目を離そうとしなかった。

広場にクシが姿を見せると、人々がどつと押し寄せて自分のことのように嘆いた。

約一年前、成人の儀で勇者として賞賛された皇子が、今度は一転、罪人となって人々の前に晒されているのだ。ほとんどの市民がそれを信じることはできなかった。どこからかあの時と同じ掛け声が湧き上がってきた。

「アウキ・クシ！ アウキ・クシ！」

「止める！ 止めるんだ！」

衛兵が掛け声を止めさせようとすると、ますます声が大きくなった。

衛兵は群がる人々を乱暴に払いのけて道を作ろうとするが、人の波は次から次へと容赦なく襲いかかってきた。もみくちゃになりながら、衛兵たちはようやくクシをクスコの郊外に連れ出すのに成功した。

クシが去ったクスコの街からは相変わらず人々の喚声が響いている。多くの人が自分を呼ぶ声を背に受けながら、クシはこの都に必ず戻ってくるのだと決意を新たにしていた。

6、 流刑（後書き）

リュウゼツランは日本では数十年から百年に一度開花すると言われていますが、気候によって十年あまりで開花するのだそうです。

1、呪われた部族

1、呪われた部族

冷たい石壁と湿った石の階段は暗い地の底へと続いていく。先は漆黒の闇でどんなに目を凝らしても何も見えない。少年は肩に担いだ大きな麻袋の口を片手で握り締め、もう片手で石壁の肌を伝いながら闇の中へと下りていった。足に伝わる感覚だけを頼りに階段の終わりを確かめて、下り立った地下通路をさらに奥へと進んでいく。通路の遙か先に仄かに明かりが見え、ようやく自分の目指す方向に見当をつけることができた。

果たして明かりの灯ったその場所には壁を大きく抉って作られた空洞があり、通路とその空洞を仕切るように何本もの木の杭が立てられて、杭の隙間には鋭い棘を持つ蔦が張り巡らされていた。手前の壁に掲げられているたいまつのも明かりも絡み合った蔦に邪魔されて空洞の奥にまで届いていない。木の杭の向こう側は真っ暗でその中に何が潜んでいるのかまったく分からない。

少年は空洞の前に麻袋を置くと中から蠟の塊のようなものを取り出した。そして松明の炎の下にそれをきつく縛り付けた。その塊は動物の脂身を乾燥させたもので、そうしておくことでやがて括りつけた燃料に火は燃え移っていき、松明は絶えることなく燃え続けるのだ。

それが済むと少年は、空洞のほうに向き直って声を張り上げた。

「おばさま、変わりはないか？」

ややあって、空洞の闇の中から微かにしわがれた声が響いてきた。

「ああ、哀しいことに、何の変わりもない」

続けて自嘲するような嗤い声が聞こえてきた。

「今日はご馳走だ。干し芋に干し肉もあるぞ」

麻袋を探りながら少年が得意げに声を張り上げる。

「また首領の館から盗んできたのか」

「人聞きの悪いことを言うでないよ。首領さまは遠征に出ていなさるので処分に困った食料を片付けてやったのさ」

そう言いながら少年は、立てられた杭の上の方に僅かに開いた隙間めがけ、大きな木の葉で包んだ食料を次々と放り込んだ。食料が投げ入れられるやいなやそれを開こうとするガザガザという音が響いてきた。

しばらく包みを開いてはムシャムシャと頬張る音が響いていたが、やがてそれが止むと再び空洞の中の声が少年に語りかけてきた。

「いつも済まない。情けないことにこんなことになっても腹は減るものだ」

「当たり前だ。おばさまは神でも何でもなし。人間なんだから」

「そう言ってくれるのはそなただけじゃ。ほかの者たちは私のことを飲まず食わずでも生きていける特別な存在だと信じておる。私は未来を見通すことができるだけじゃ。それなのにいつのまにやら、私が予言することで事が起こるのだと思ひ込むようになった。良い

ことなら喜んで信じるが、悪いことを忠告すれば私が悪いことを引き起こすのだとして疎まれる。その結果がこれじゃ！」

暗闇の中から響く老婆の声が怒気を孕んだ。

「首領たちに何を言ったの？ おばさま」

「何も……。見えたことを伝えたまでのこと！ しかしそれには救いの手段も付け添えたはずじゃ！」

今の凶行を続けておれば、やがてわれらを滅ぼす者が現れるであろうと……。われらは昔のようにこの地で必要な獲物を仕留めて暮らしていくのが道理なのだと。われらほどの大部族が周りと争わずして繁栄していくのは少々無理な話であるうが、せめて罪もない民を捕らえてきて生贄に捧げることは止めなくてはならないとな。そうでなければ必ずわれらは滅ぼされる。

……いや、子どもに向かってする話ではなかったな」

「子どもじゃないやい。おいらは今度、大首領さまの軍に付いて戦に出るのだからな。ああ、もちろんちゃんとした戦だ。小さな村を襲って人をさらってくるのではないよ」

「はて、今はもうこの大国と戦おうという度胸のある部族など、この辺りには存在しないはずじゃが……」

「日の昇る未知の大地に向かうのだ。日の昇る地の果てには大変な富を湛えた国があるという噂だ。その過程に陣を作るため、道中に存在する部族を征する戦なのだ」

「ほうか……。それで得心がいった。新たな戦いの武運を祈るために盛んに生贄が集められていたのじゃな。日の昇る大地……首領たち

の目当ては東の征服か」

「おいらが戦いに出る前におばさまを出してやらねば、おばさまは飢え死にしちまう」

「ああ、心配はいらない。そなた以外にもとき世話役の少年がやってくる。油粕のようにふやけた雑穀を持つてな……。首領たちも私が死んでは困るのだ。それに万が一のために今までお前が持つてきてくれた食料を少しずつ蓄えておいたのだよ」

「しかし、首領たちが新たな戦争に出ていってしまったら、おばさまのことなど忘れられてしまふよ」

「私を誰だと思っておるのじゃ。長年この部族の命運を占い、ここまで導いてきた呪術師キータであるぞ。愚かな首領たちよりもこの国のことを知っている。そして未来の姿も。私にはこの場所から出て、新たな世界へと旅立つときがやってくる。しかしな、それはわれら一族が滅びるのと時を同じくすると天は告げた。もしも私の先読みが誤っているのであればそれは幸運なことだ。私は喜んでこの命を捧げようぞ」

「何と恐ろしい予見だ。だから首領たちは聞き入れられなかったのだよ。おばさま」

「恐ろしいのは自分たちの力を過信してこの大地に恐怖を撒き散らしている首領たちの奢り高ぶった心じゃ。分相応に生きねばわれらは神さえも敵に回すことになる。やがて神々を味方につけた大きな敵が現れることであらう……」

「神々を味方に付けた大きな敵……。それはどこの部族だ？」

「さあ、そこまでは知り得ない。われらが無用な戦いを挑んでいけばやがてその敵と対峙するときがくるであろう。」

……東の地か。どうもその辺りに不穏な空気を感じるがな。

それにしても、少年。お前はなかなか聡明な子じゃな。こんな年寄りの戯言おもむきごとによく耳を貸してくれることよ。この罪人にただ食事を運ぶだけの役目であつたのであるうに」

「おばさまの話は戯言などではない。おいらの親父さまはおばさまの予言は正しいと言っている。それを聞かないいまの首領たちがおかしいのだと。」

どうかおばさま、おいらが戦から戻るまで生きのびておくれよ」

鳶の向こうの暗闇から石壁を震わせるような高らかな笑い声が響いてきた。

「なんと頼もしい若者じゃ。ばば、ばばと呼ぶがな、私はそれほど耄碌もろろくしてはおらん。大首領に従えている大呪術師よりはずっと若いのじゃ。まだまだ何年でも生き延びていくぞよ。」

ところで、そなた名は何と言ったかのう」

「アンコワリヨだ」

「ほうか……。そなたとは何やら深い縁を感じるぞよ。お前こそ戦地より必ず生きて戻るのだぞ」

少年は「必ず」と力強い声で返事をする、空になった麻袋を掴んで地上へと戻っていった。

彼は年若い、がっしりとした体格と逞しい手足の持ち主であることを、このときの老婆は知り得なかったが、やがて彼が自分を救

う存在になるであろうことは確信していたのだ。

「われらは呪われた運命から抜け出すことができるであろうか……」

深い闇の中で感覚だけを頼りにめぼしい小石を集めて、それを一筋に並べると、小声で何かを唱えながら、老婆は己と己の一族の運命を占い続けるのであった。

2、西の果て（その1）

2、西の果て（その1）

荒地は果てしなくどこまでも続いている。石ころの転がる大地に、強い風に運ばれた枯れ草の束が転がっていく。食べ物になりそうな植物も動物も、どこにも見当たらない。

植物といえば、蜘蛛の足のように地を這うアロエの一種や空に向かって高くそびえるサボテンが、ところどころ唐突に地面から生えているだけだ。

クスコを中心として栄えているのはほんの僅かな範囲でしかない。村々が密集する地域を外れてさらに西へ向かえば、そこは一面の荒野であり、人が暮らす集落には数日間歩き続けてもたどり着けるかどうか疑わしい。そもそもその土地に人が住めるのかどうかさえ分からないのだ。

その一帯も一応はケチュア族の支配する領域とされているが、国によって特に管理されているわけではない。

その昔、アヤルマカという大部族が治めていた広大な地域を、先代の皇帝がかの大部族を征服したことをきっかけとして領土に取り込んだのだ。しかし今では都からの警護兵が忘れかけたところに時折巡回にやって来る程度で、それ以外は都の目の届かない辺境の地である。

神々が住まうといわれる高く美しい峰が連なる山脈の、その懷に抱かれた風光明媚な高地クスコとは天と地ほどの差がある。乾いた荒野が果てしなく続くその土地はまさに死の大地である。人が暮ら

すには大変酷な場所だ。

クシに課せられたのは、その辺境に自力で生きる場所を見つけ出し、何時とも知れない刑が解かれるその日までただひたすら生き抜いていくという、単純でありながら最も過酷な試練である。

クスコからの道はとくに途絶えた。クシが逃げ出さないようにと、彼の両脇をしつかり抱え込んで引き連れてきた兵士たちは、道が途切れた途端、ひび割れて使えなくなった土器を投げ捨てるようにクシを突き放し、さっさとクスコへ戻って行ってしまった。

かろうじて数日生き延びられようかというほど僅かな食料と、氷点下にもなるこの土地の夜の寒さにはほとんど役立ちそうにない薄い毛布を投げ与えて……。

役に立たない自尊心など捨てて、兵士たちに哀願し縋りつくように後を追う方法もなかったわけではないが、それならば潔く死を選ぶのがクシである。

あれから何日この荒野を彷徨っているだろうか。

終わりの見えない地平線に向かって歩き続け、枯れ草に溜まった朝露で喉を潤し、夜は地面を掘って寒さをしのぎ、何とかクシは生き延びていた。

ここはまさに地の果てだとクシは改めて実感した。語り部の語りや、父王とともに遠征に出てこの地を訪れたことのある兄たちの話に聞いてはいたが、他人から聞く話は所詮絵空事であり、自らの足で踏みしめているこの大地とそれとは全くの別物であった。

すべての物をさらって吹きすさぶ風は、空腹でふらついているクシの身体を一気に空へ舞い上げようとする。クシは這い蹲るように重心を低くして脚を踏ん張り、風にさらわれるのを堪えた。風に逆らって進むうとするものの、どうやら後ろに押しやられているよう

だ。

西の果ての異国との境界辺りにひとつ村が存在すると聞いたことがある。唯一の頼みであるその噂を信じてそこを目指すしか方法はないだろう。当てのない目標に向かってひたすら歩き続ける。

『本当にそんな村など存在するのだろうか？』

そもそも流刑などとは建前で、実は自分がこの荒野でのたれ死ぬことを期待して、この罰が下されたのではないだろうか？』

厳しい環境に晒され続け、日を追うことにクシの心は疑念でいっぱいになっていった。

数日間荒野に吹き荒れた砂嵐が止んだとき、地平線に近い遙か彼方に一筋碧い線が見えてきた。クシの歩調に合わせ茶色一色の地面に時折濃い群青色が見え隠れする。近づくたびにその筋は幅を増し、やがてかなりの広さを持つ碧い大地となってクシの前に姿を現した。脚がもつれ思うように速く歩けない。片足を引きずるようにして、それでもクシは残る力を振り絞り、ようやくその蒼のふちへと辿り着くことが出来た。

「水だ！」

そこには平原の真ん中にぽっかりと口を開けたような広い湖があった。

空よりも深く濃い群青の上に時折風が吹き渡り、無数のさざなみを作って水面を白く染め変える。そして通り過ぎればまた、深い藍色は雲を映して沈黙した。美しい光景よりもまず、クシはその豊富な水に心が躍った。

クシは湖の入り江にジャブジャブと入り込み、水を手で掬っては頭から浴びた。何日も荒野を彷徨っていた身体には固まった砂が厚くこびり付いており、流れ落ちた泥砂が足許の澄んだ水を濁らせていった。全身に水を浴びぐつしよりと濡れても、荒野の乾いた風はあつという間に乾かしてくれる。

汚れを落として喉の渴きを潤すと、今度は猛烈な飢えを感じた。

湖の周りには緑の草や背の低い木が茂っていた。木や草の中には小さな実をつけているものもあり、草や実をひととおり口に含んでみる。あまり美味くはないが何とか食べられそうだ。クシは夢中になってそれらを漁った。

こびりついた汚れが落ち、腹が落ち着くと、それまでクシの心を覆っていた怖れや疑念がいつの間にか消えていた。

クシは誰もいない広い湖に向かって大きく手を広げると、叫んだ。

「私はもう皇子ではない。この地で自由に生きていくのだ！」

そう決意した途端、クシの心は軽くなり、新たな希望が湧いてきた。

湖のほとりは湿気を帯びた心地よい風が吹いているものの、その日差しは刺すように鋭い。強い日差しをよけるため、灌木の茂みに顔を潜らせて横になる。すると今までの疲れがどつと襲ってきて、彼を深い眠りに引き込んでいった。

まどろみの中で何故か鮮明にキヌアの姿が浮かんできた。あの強く逞しい彼女が、幽魔のように蒼白い顔で自分を見つめている、宮殿を出るときに見たあの姿だ。

彼女の痛々しい姿に目を伏せようとする一方で、不屈の精神をもつ彼女が自分のために嘆く姿に快感を覚えている自分がある。

夢とも現実ともつかないその世界で、クシは自分の心の奥底を知った。

——そうか。武術を教わろうなどとは建前で、その実は単に彼女と居られる時間がほしかっただけのだ。私は彼女より強くなることで彼女に認めてもらおうと必死になっていたのだ。だからあのとき、彼女が私との別れを嘆いてくれたことで私の心は満足している——

「今更……愚かなことに気付いたものだ……」

眼を閉じたまま、うわごとのように呟いて、やがてクシは深い深い眠りに落ちていった。

2、西の果て（その2）

どのくらいの時が経っただろうか。

誰かに服の裾を引っ張られているような感じがした。まだうつらうつらとしながら無意識に手をやって裾を戻すが、何者かがまた引っ張り返す。

クシは異様な気配にはっと目覚め、足元に視線をやった。真っ白なリヤマが枝の間から覗き込んでいた。食べ物と勘違いしているのか夢中でクシの服の裾をかじっている。

「うわっ！」

驚いて飛び起きようとして、低い木の陰で寝ていたクシは覆いかぶさる木の枝で顔を傷つけた。同時にリヤマの方もクシの声に驚いて一瞬飛び退いたのだが、またすぐに寄ってきて服の裾をかじり始める。クシは夢中でそれを払いながら、何とか木の陰から抜け出そうと背中ではざった。

「××！ ××××……」

枝の向こう側から人の声が響いてきた。声の主は近づいてきてリヤマの首に手をかけると、その身体を一所懸命引っ張っている。しきりに何かを叫んでいるのだがクシにはその言葉が理解できない。クシは、今居る地がクスコの言葉が伝わらない辺境であることを改めて悟った。

リヤマがようやく外へと引き出されて、解放されたクシは茂みを

抜け出した。そこには、抗うリヤマの首に縄をかけているひとりの少女がいた。リヤマの首を縄で引き寄せ必死に押さえながら、少女はクシを振り返って怪訝な顔をした。

クスコの周りでは見かけない服装だ。厚手の毛織物を幾重にも着て、頭に丸い頭巾を被っている。この辺りの強い日にやかれたためか、肌の色は暗褐色でところどころ表皮が剥けた痣がある。

クシが立ち上がると、驚いて一步下がった少女は、威嚇しているつもりなのか険しい顔で何かを必死に叫んだ。それもそうだろう。見慣れない服を着た薄汚い男が茂みの中からぬうつと現れたのだから。

「××××！」

大声で叫ぶ少女に気付いて、今度は向こうから中年の男が慌てて駆けてきた。

色鮮やかな模様を編みこんだ耳あて付きの毛編みの帽子を被り、腰まで隠れるような毛織の貫頭布を羽織っている。男は少女よりもずっと日に焼けて黒々とした顔をしていた。

ふたりはどことなく顔つきが似ているので親子と思われる。何も持たずに湖のほとりに倒れていた男を怪しげに思っているのだろう。ふたりとも詮索するようにクシの頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「この辺りに村があるのか？ 私は行くところがない。あなたたちの村に泊めてくれないか？」

言葉が通じないことは分かっていたが、クシは何も持っていないという身振りを交えて、とりあえず親子にそう頼んでみた。

クシが必死に訴える姿を見て、親子は顔を見合わせ、あれやこれやと相談し始めた。

先ずはクシの言った言葉の意味を議論しているのだろう。随分と時間をかけて話し合ったあと、ようやく二人はクシに向き直って笑顔を見せた。

クシの言葉を正しく理解できたかどうかは分からないが、気持ちに通じたようだ。父親と思われる男がクシの肩をたたいて『付いて来い』というような仕草をした。

クシが男に付いて歩き出すと、その後ろからリヤマの首にかけられた縄を引きながら、少女が付いてきた。

クシが振り返ると少女はニッコリと笑みを返した。少なくとも怪しい男という誤解は解けたのだろう。クシはホッとして少女に微笑み返すと、また前に向き直って歩いていった。

湖のほとりに沿って向こう岸まで歩いて行き、その先にある小高い丘を上っていく。丘の頂上から下ろうとしたとき、クシは思わず声を上げた。

丘を下ったその先に、一面を丈の短い草が覆う広大な緑の平原とそこでのんびりと草を食むリヤマの群れを見た。今まで彷徨っていた乾いた荒地とはまるで違う光景だ。

広い野原にはぼつんぽつんと泥レンガを組み合わせで造った家が点在している。

リヤマの群れの中にそれを追う人の姿も見えるが、人の数よりもリヤマの数のほうが圧倒的に多い。リヤマの群れの中に立つ人たちは、群れを外れたリヤマを追っては再び群れの中に返していく。

彼らはどうやらリヤマを放牧しながら暮らす遊牧民らしい。

クシを見つけた少女はおそらく、丘の向こうまで冒険に出てしまったリヤマを連れ戻しに来たのだ。帰りが遅いことを心配した父親も一緒に丘を越えてきたのだろう。

群れからはぐれた悪戯なリヤマのお陰でクシは命拾いをしたのだ。

男は点在する泥レンガの家のひとつに入って行った。クシが入るのを躊躇っていると、後ろから少女がクシの背中を押して中に入るように勧めた。

中は薄暗く、明るい外から入った瞬間は目が眩んで何も見えなかった。目が慣れてくると、家の奥に少女と同じくらいの年の少年がひとり座っているのが見えた。少年は竈かまどに火をくべて食事の支度をしている。竈の上で炙られた肉の香ばしい匂いが家中に漂っていた。

クシの腹がそれに反応してぐぐつと音を立てた。少女はそれを聞いてくすぐすと笑うと、竈の肉を土器の上に載せてクシに勧めた。クシの体は思うよりも早く動いて肉にかぶりついていた。もうなりふりなど構わない。ちぎれそうな空腹を満たすことだけしか考えられなかった。

幼い頃から皇族として厳しい躰を受けてきた自分にもこんな原始的な本能が残されていたのかと、心のどこかで驚いている自分がいた。しかし他方で何が何でも生き抜こうとする強さを残していた自分を頼もしく思った。

空腹が満たされて、改めてクシは自分が今いる場所を観察した。

四方を土壁で囲い、天井には藁が葺いてある小さな家。空気抜きの高窓から細い明かりが差し込むだけの狭く薄暗い空間には、隅に小さな竈があり、反対側には備蓄の食料が入った袋が積まれている。その間の藁と毛織の敷物が敷き詰められた床に、寄り添うように親子三人が座り、膝を突き合わせて無言で肉をかじっている。その中に自分も幅を取っているの、家の中はいっぱいだった。

人の良さそうな父親と負けん気の強そうな少女、そして少女と瓜二つだが、彼女よりも気の弱そうな少年。二人はおそらく双子なの

だろう。何故かそこに母親の姿は見当たらなかった。

食事が済むと、少女がクシの肩を叩いて呼んだ。意味の分からない言葉でしきりに何か言っている。クシは首を傾げて少女の動きを観察した。だんだんと少女の言おうとすることに察しがついてきた。少女は自分の胸を何度も叩いて繰り返している。

「オルマ、オルマ……」

そう、それは彼女の名前だった。クシが少女に頷くと、今度は父親と少年が順に胸を叩いて名乗った。

「ポ」

「チャキ」

初めて通じた異民族の言葉にクシは嬉しくなり、自分も胸を叩いて告げた。

「クシ！ クシ！」

すると三人の親子は顔を見合わせた。クシがもう一度名前を告げると、少女がプツと噴き出した。あとのふたりもそれに続いて笑い出し、やがて三人はお腹を抱えて笑い出した。

驚いたクシは何か可笑しいことを言ったかと慌てた。しかし親子は構わず笑い続ける。彼らの言葉を話せるようになるまで、彼らにとって何が可笑しいのかクシには知ることはできない。未知の地で生きる難しさをそんな些細なことで実感するクシだった。

クシのいなくなったクスコでは、今までと変わらない日常が流れていた。

キヌアの教室も毎日開かれて子どもたちも熱心に指導を受けている。成人の儀を控え張り切る少年たちに影響されて、キヌアの指導にもますます熱がこもっていた。

そのキヌアが部屋に帰ると、ひとり涙が枯れるほど泣いていることなど、誰も想像しなかった。一番傍にいるティツカだけが、日に日にやつれていくキヌアを心配していた。

クシがキヌアに武術の指導を申し入れたお蔭で、このクスコでもキヌアは居場所を見つけることができたのだ。そのクシを失ったことでキヌアの心は抛り所を失くしてしまったのだらうとティツカは考えた。

しかし帰るあてのない人を待ち続けるのは辛すぎる。

ティツカは、キヌアが武術の指導に夢中になることでクシを忘れてくれることを願っていた。

クシがクスコを去ってからだいぶ経ったある日、ティツカがキヌアの部屋に慌てて飛び込んできた。

「キヌアさま、大変です。今晚、お部屋に皇帝陛下がいらっしゃるそうです。」

早くお支度をしないと……」

ティツカは衣装籠をひっくり返してあれこれと選び始めた。相変わらず武術の指導ばかりしているキヌアには適当な服がない。

衣装をほとんど籠から出して、一番底には見事な織りのシヨール

と頭巾が残った。

「キヌアさま、さすがにこれはまずいですよね」

ティツカがおずおずとそれを広げて見せた。

「これはクシのお母さまの……」

キヌアはそれをティツカから受け取ると、懐かしそうに眺めた。

「クシさまにお借りしたまま返せずに……」。

私たちであのお部屋に返しに行くのは難しいですね。黙って入ったことが知れたらどんなお咎めを受けるか分かりませんもの」

「ティツカ、これはこのまま仕舞っておきましょう。クシが帰って来るときまで」

キヌアはそれらの着物を丁寧に畳むと、籠の底に大切に収めた。

「別に着飾らなくていいのよ。無理に作っても仕方ないでしょ？これからずっとお傍にいるのだから。いま着ているものでいいわ」

キヌアは、散らかった服を畳んでその上に重ねながら言った。

「では、せめて御髪おぐしを整えて香油を塗るだけでも」

ティツカは慌てて準備を整えると、いつも束ねて絡まっているキヌアの癖毛をほぐし始めた。

「キヌアさま、良かったですね。」

クスコに来た意味が見出せず、さらに懇意にしてくださったクシさまが居なくなられて沈んでいらしたので、心配だったんですよ。皇帝陛下がキヌアさまをお后と認めてくだされば、それこそキヌアさまがここに來られた意味があるというもの。立派にお役目を果たすことができますもの」

「……そうね」

キヌアは少し口の端を上げて笑ってみせるが、その表情は固かった。ティツカは婚礼の日以來会うことのなかった皇帝の突然の訪問にキヌアがひどく緊張しているのだと思った。

「そうですとも！ お母様……『天の女王』さまもお喜びになります！」

キヌアはまだ強張った表情のまま軽く頷いた。

日が落ちると、数人の侍従を従えて皇帝がキヌアの部屋に姿を現した。キヌアが挨拶を済ませると侍従もティツカも速やかに部屋を引き上げていった。

まだ腰を低くして頭を下げたまま畏まっているキヌアに近づくと、皇帝は彼女の顎に手を伸ばして持ち上げ、彼女の顔を自分に向けた。婚礼の日に大広間で挨拶をして以來、全く顔を合わせることがなかったので、キヌアが皇帝の顔を間近で見るのも初めてだ。

キヌアの婚礼が決まった途端、これまでキヌアの戦士としての技

術と精神力を鍛えることだけに腐心してきた彼女の教育係たちは、俄かにクスコ風の女性としての振る舞いを身につけさせることに執念を燃やし始めた。

普段の彼女の行動をすべて否定されることから始まったその躰は戸惑うことばかりで、何度も逃げ出してはまた連れ戻された。

しかし、それはまだ序の口だったと彼女が知ったのは、最後の教育が始まったときだった。

まだ若い王女は、側后として何を為すべきかということを一から覚えねばならなかった。

今までの生き方を変え、屈辱にも耐えて、ひと通りのことを身に付けたというのに、クスコに来てみればその大役を果たす機会は与えられず、ただ漫然と時を過ごすことしかできなかった。ようやく本来の役目を果たす時が来たのだ。

キヌアは仄暗い松明の明かりに照らし出されている皇帝の顔をじつと見つめた。

僅かにクシに似てはいるが、深い皺を刻んだその顔は、弱々しく憐れな老人にしか映らない。かつてはその名を聞けば誰もが震え上がると言われた勇猛な皇帝の面影はどこにも感じられない。

キヌアの顎を持ち上げているその指も細く骨ばって血が通っていないのではないかと思うほどひんやりと冷たい。

皇帝は、顔を近づけて彼女の瞳を覗き込むようにして言った。

「間近に見ればなんと似ているのだ。そなたは母上にそっくりだ。野蛮な娘かと思っていたのは、余の大きな誤りであった」

そう言つとキヌアの身体を抱きかかえ、甘えるように縋りついてきた。

キヌアは背筋に水が走るような嫌悪感を抱いた。

擦り寄る皇帝の身体を受け止めながら、クシと無邪気に合わせ稽古をしていた日々をありありと思い返していた。

3、流浪の民（その1）

3、流浪の民

クシが西の地で暮らし始めて、もうすぐ季節が変わろうとしていた。その頃にはリヤマの放牧をする民の中にも少しずつ溶け込めるようになっていた。

どこか遠い地からやってきた謎の少年を、放牧民たちははじめ、物珍しく少し怖いものでも見るような目で遠巻きに眺めていたが、本来気さくなその民は、いつのまにか昔からの仲間のようになりに親しげに接するようになっていた。

やがて誰も彼もがクシに興味を持って話しかけてくるようになり、クシがこの民の言葉を理解するようになるまでにそれほど時間はかからなかった。

そのうえ少しおせっかいなオルマが発音から細かい言い回しまで厳しく教えてくれるので、クシの覚えは格段に早かった。

彼らは自分たちのことを『ロハ』と呼んでいた。

オルマ親子がクシの名前を聞いて笑った理由もほどなく分かった。ロハの間では、『クシ』というのは、『くしゃみ』のことだったのだ。

慣れ親しむようになってからも、いや親しくなれば尚更、彼らはクシのことを、わざと【くしゃみ】の意味の方の発音で呼んだ。からかい……というよりも、もう自分たちの仲間だという親愛の情を込めてそう呼んだのだ。だからクシのほうもそう呼ばれて悪い気はしなかった。

宮殿で家来に傳かれて生活していたときよりも、気の置けない仲間と暮らしている今の生活のほうをクシは気に入っていた。

オルマとチャキの双子は、男女が入れ替わったかのように性格がまるで逆だった。オルマは男勝りで体力があり、父親とともにリヤマを追うのは主にオルマの仕事だった。一方、チャキはあまり家から出ずに、家事をしたり、リヤマの毛を紡いだりしていた。

オルマはクシに、まるで男同士の親友のように接する。

「【くしゃみ】は気持ちのいい奴だな。街の方から来たというから最初はすました嫌な奴かと思ってた」

「オルマも女とは思えないほどさっぱりしている。チャキのほうがよほど女らしい」

「きっと神さまはあたしらに付けるものを取り違えたのさ！」

あっけらかんとして言う、オルマは豪快に笑った。日にやけた顔に白い歯がやけに目立つ。

オルマとは特に気が合うのか、彼女というだけでクシは心から楽しかった。リヤマを追いながら、一日中二人は笑い合っていた。

しかし放牧民の生活は気楽で楽しいばかりではなく、むしろ危険に晒されることが多い。平原とはいえ、ところどころに地の裂け目があり、リヤマとともにそこへ滑落して命を落とすものもいたし、夜になるとリヤマを狙ってくるピューマなどの猛獣を追い払わなくてはいけなかった。

クシはそこに暮らすうちに自然と危険を察知する感覚が研ぎ澄まされていった。

やがて平原の草が霧雨で湿る季節になった。乾季の終わりに毛を刈り取ったリヤマたちを放ち、口八の民は移動をするために家の荷物をまとめ始めた。

「いったい、どこに行くのだ？」

「雨季は谷間に下りて作物を育てるんだよ」

ポコが半年間眠っていた木製の足踏み鋤を一本一本磨きながら言った。

「リヤマたちは？」

「この季節は野生に返す。乾季になったら戻ってきてまたリヤマを集めるのだ」

彼らはこの平原に定住しているわけではなかった。季節ごとに場所を移動し、生活に必要な物を育てたり、集めたりしながら生活しているのだった。

クシにとつては不思議なことばかりだ。

「【くしゃみ】には珍しい生活だろ？」

谷間の暮らしは忙しいぞ。必死で働かないと半年間食うものが無くなってしまふからな」

オルマはたくさんの干し肉を袋に詰めていた。チャキは前の年に採れたとうもろこしの種を丁寧に選別している。

「今年はうまく育つかな？」

チャキが呟いた。

「去年は本当にひどかった。種に残す分を取ったら食べる分は僅かしか残らなかった」

「虫にやられてしまったからな」

食べ物もろくにならない半年をどうやって生き延びてきたというのか。リヤマの干し肉を分け合ってようやく暮らしてきたのだろうか。そんな苦労は感じさせないほどオルマの家族は明るく逞しい。クシがひとり増えてもそんな不自由など微塵も感じさせずに彼を歓待してくれた。

クシも種の選別を手伝いながら「今年はうまく育つように」と祈りを込めた。

口ハの民は、一斉に泥レンガの家を後にした。大人はもちろん、子どもたちも生活に必要な荷物を体中にくくりつけてよろよろと重そうに歩き出す。乳飲み子を持つ母親は荷物とともに赤ん坊も布に包んで体に縛り付けている。大きい荷物を運ぶためにリヤマも数頭連れるが、ほとんどの物は人間が自分で運ばなくてはいけない。リヤマは山道に行くのが苦手なのだ。

ポコの一家も、背中に藁束やとうもろこしの種の入った袋や鍬など、それぞれが大荷物を背負って家を出た。

平原は果てしなく広い。谷に下りると言っても、どこまでも平らかな大地に溪谷があるようには思えなかった。

荷物で重くなつた体を抱えながら、口八たちは広大な平原を何日もかけて歩いていった。

何日歩き続けても、景色は相変わらず見慣れた平原ばかりで溪谷が見えてきそうな気配もなかった。ただ広く、ほかに何も見えない大地の真ん中で、何度も野宿をした。

口八たちは、疲れを癒す方法をよく知っている。

夜は焚き火を囲んで干し肉をかじりながら、昼の疲れなど感じさせないほど陽気に歌ったり踊ったりする。踊りつかれてぐっすり睡眠り、翌朝はまた元気になつて颯爽と歩き出すのだ。

しかし全員が寝入ってしまうわけではない。必ず交替で見張りが立ち、夜の平野に出没する猛獣から民を守る。長年同じ暮らしを繰り返してきた遊牧民の知恵だった。

平原の家を後にしてから何日経つたのか分からなくなる頃、ようやく山道に入つていった。荷物を抱えて山道に行くのは、平原を歩いているときより数段きつい。慣れた口八たちは山道などものともせずどんどん進んでいく。クシは息も絶え絶えに、口八の列をやつと追いかける。

やがて頂上を越えると、目的地の深い溪谷が現れた。

一列に並んだ口八たちは、慎重に溪谷を下っていく。木々などほとんど生えていない平原から、木々が鬱蒼と生い茂る山の中へ、その生活の変化はとても大きい。

溪谷の中腹あたりに、木が切られて土が均ならされた場所がいくつかあった。細い木を丈夫な蔓で組んだ小屋がそのまわりに点々と建っている。それは口八たちの雨季の住まいなのだ。

ポコが入り口を覆う伸びた枝を掃うと、ひとつの小屋に入っていた。チャキが続く。

「さあ【くしゃみ】、入って」

オルマがクシの背中を押した。

ひと季節放置されていた小屋の中はかび臭い匂いがした。細い木を組んだだけの隙間だらけ壁からは、木の枝や蔦が容赦なく侵入してきている。

ポコが家の中の枝を掃い、クシとチャキがそれを外に運び出す。

オルマが腐りかけた敷き藁を手早くかき集めて外に出し、各自が背負って持ってきた新しい藁を敷き詰める。

壁や屋根に掛かる蜘蛛の巣を払うと、ようやくこざっぱりとして生活できそうな空間になった。

その日は小屋の掃除で一日が終わった。夜になると、刈り取った枝を薪にして火を焚いた。それで干し肉を炙って夕食にする。ポコは小屋の隅にある甕から蓄えてあった酒を出して晩酌を始めた。

ポコはクシにも酒を勧めると、話し始めた。

「わしらはずっとこんな生活を続けている。同じ地に定住できればいいが、家畜も畑も手に入る土地というのはそうそう見つからないのだ。

食べ物もその年の気候次第。気候が悪ければどんなに大事に育てても全滅してしまうこともあり、気候が良くても虫が増えてやられてしまうこともある。

収穫が多すぎれば蓄えた分は腐らせ、ほかの家族と収穫の量が違えば、争いになることもある。

平原の暮らしはここよりは気楽だが、食べ物はここの畑の蓄えと、リヤマの肉しかない。それにあそこには凶暴なピューマが出る。ピューマは滅多に人を襲わないというが、あの土地のピューマは人を襲うことがあるのだ。

わしの妻、この子たちの母親もピューマに襲われた」

クシは、したたか酔って潤んだ目をしているポコの横顔を見つめた。

「厳しい暮らしだ。しかし、わしらの先祖が長い間かけて編み出した生活の知恵だ。ほかの方法は考えられない。

【くしゃみ】もここに暮らす限り、いつ何が起こるかわからないと覚悟しておくんだぞ。わしは知らないが、【くしゃみ】のいた大きな街の暮らしとはだいぶ違うだろうからな」

ポコはそう言うとき木のカップに注がれた酒を一気に飲み干した。ポコの話聞いたクシは考え込んだ。

『ロハの民の暮らしを豊かにする方法は無いのだろうか』

次の日から、とうもろこしの植え付けが始まった。半年掘り返していない谷間の畑には木の根や草の根が広く深く這っていて、土を耕すには時間と労力がある。

いつもは家に籠っているチャキも出てきて手伝うが段取りが悪く、オルマに叱られてばかりいた。

そのオルマは手際が良く力もある。太い根をひとりで掘り起こして引き出しては脇にどんどん積み上げていく

「さすが、オルマだな」

クシが感心して言うと、オルマは手を休めずに声を張り上げる。

「当たり前だよ。チャキがあだから、あたしがすっかりしなかったら大変なことになる」

本当に神さまはオルマとチャキに付ける物を間違えてしまったようだ。クシはオルマの言葉を思い出して、つい噴き出した。

「けど、今年は助かった。【くしゃみ】のお蔭で仕事が倍はかどるよ」

オルマは泥だらけの顔をほころばせて笑った。どんなに勝気で男勝りでも、笑顔はあどけなさを残す少女の顔だ。

「おい【くしゃみ】。ポコの畑が終わったら、こっちも手伝ってくれよ」

向こうのほうから声をかけてきたのは隣の畑を耕すティトーだ。

「やなこった！ 【くしゃみ】はうちの家族なんだ！」

オルマは手に持った太い木の根を大きく振って、ティトーを怒鳴りつけた。

「オルマ、いいじゃないか。ここが早く終わったら手伝ってくるよ」

「ダメだ。あいつらは前の年、うちの作物が虫にやられてしまっても何も分けてくれなかったんだ。なあ、チャキ」

いつもは物静かで自分を主張することのないチャキが、ティトーたちを睨みつけて大きく頷いた。

同じ一族でありながら互いに恨みを持つ家族たちにクシは不安を

覚えた。

3、 流浪の民（その2）（前書き）

（ご注意）

自然災害の描写があります。 敏感な方は閲覧をご遠慮ください。

3、 流浪の民（その2）

その年の雨季はほどよく雨が降り、ほどよく日が差して、作物の育ちが良かった。

とうもろこしはオルマの背もクシの背も越えて伸びていき、見事な林を作った。

「やっぱり【くしゃみ】は神の遣いだ。今までこんなに立派に育ったことなんかないよ。今年は空腹で生きるか死ぬかの心配をしなくて済みそうだ」

オルマはとうもろこしの梢を見上げてクシの腕を握り締めた。

ちょうどオルマの顔の辺りに大きなとうもろこしが頭を覗かせていた。クシがそれを取って皮を剥くと、中から艶やかな黄色い実が出てきた。

「うわぁお」

オルマが嬉しそうに声を上げた。

収穫は枝が枯れて実が乾いてからになる。しかしここまで立派に育てばもう豊作に間違いはなかった。

「楽しみだな」

オルマがとうもろこし林の間を無邪気に走り回って声を上げた。

事件は突然に起きた。

穏やかな雨季が終わろうとしていた頃、スコールが度々やってきたのだ。雨は集中的に激しく降り続き、地盤をもろくしていった。もしも土砂が流れたら谷の中腹に暮らす口八たちは一瞬で流される危険がある。しかし彼らには、それぞれの小屋に籠って震えながらひたすら祈り続けることしか方法がなかった。

激しい雨音が不安を余計煽り立てる。

グゴゴゴ……………

雨音に混じって微かにくぐもった唸り声のようなものが聞こえてきた。

「土なだれだ！」

ポコが叫んでチャキ、オルマ、クシを急いで小屋の外に押し出すと、自分も飛び出した。

ポコは三人の背を押しやりながらぬかるんだ谷の斜面を登っていた。小屋から少し離れた高台の林に飛び込み、斜め下方に自分たちの小屋と畑を見下ろす。

ポコたちが避難した林の中には後から次々とほかの家族が飛び込んで来た。最後にテイトーの家族が走り込んできた。

テイトーたちが林に走りこんだと同時に、彼らのすぐ背後に轟音が響いた。巨大な茶色の濁流が恐ろしい勢いで斜面を流れていく。口八たちはみな叫ぶことも泣くことも忘れて呆然とその光景を眺めていた。

雨が上がり、林の中に身を屈めて体を寄せ合っていた口八たちがぼつぼつと立ち上がり、自分たちの住まいと畑の方を見た。

遙か向こうに見える小屋や畑はそのままの形で残っていた。しかし、彼らの目の前には幅広いのっぺりとした土の斜面が横たわっていた。

土石流が溪谷に古くから根付いていた木々とともにすぐ手前にあった畑と小屋をも押し流してしまったのだ。緑深い谷の斜面は、その場所だけ耕したばかりの畑のようなまっさらな空間に変わっていた。

そこにはティトー一家の所有地があった。しかし今は跡形も無くなっていた。ティトーの畑のすぐ横にあるポコの畑も一部が流されていた。

ティトーは呆然と立ち尽くし、彼の妻はうずくまって悲鳴のような泣き声を上げた。ティトーの小さな子どもたちも、意味は分からないが母親の泣き声に怯え、母親の体にすがりついて震えていた。

天候が落ち着くと、男たちが木の皮や蔓で丈夫な縄を作り、その先端に括りつけた棒を土の斜面の向こう側に残っている木に投げ渡した。族長の力チカリヤが張られた縄を最初に渡って安全を確かめると、その後が続いて口八たちはひとりひとり土の斜面を渡っていった。

自分たちの家に戻った人々はようやく安心した。しかしティトー一家には帰る家がない

ポコは敷地の一部を分けてやった。ティトーの家族はそこに小屋を建てて身を寄せることになった。

ポコとクシは小屋を建てるのを手伝ったが、オルマはよほど昨年のティトーの仕打ちが忘れられないらしく、一度も顔を出さなかった。

土なだれですべてを失ったティトーはすっかりやる気を無くしてしまった。小屋が出来上がってしまうと、新しい作物を育てようと

もせずに毎日ポコから分けてもらった酒を飲んで寝ていた。

とうもろこしの茎や葉が黄土色になって乾き、いよいよ収穫ができるようになった。口八たちは喜びの歌を歌いながら一斉に刈り入れを行う。どの畑もいつにない豊作だ。ポコの畑も、一部は流されたものの、残された畑で失った部分の収穫を十分補えるほどの実りを得ることができた。

収穫に忙しい人々の様子を酔っ払ったティトーは恨めしそうに眺めている。彼がポコから分けてもらったとうもろこしの酒はもうすぐ底をついてしまうだろう。そしてその後の一家の生活をどうするつもりなのか。ティトーには全くそれを憂える気配はなかった。

収穫が終わればそれらを袋に詰めて、ふたたび草原へ戻る準備をする。持ち運べる量に分けて袋に詰める筈のだが、オルマはひとつの麻袋に収穫したとうもろこしをめいっぱい詰め込んでいた。

「そんなに詰めたら麻袋が破れるよ。もう少し少なくしないと……」

クシが言つと、

「これはティトーの家にもっていくんだ」

袋の隙間を探しては器用にとうもろこしをねじ込みながら、オルマが答えた。

ティトーに恨みを持っていたオルマだったが、彼の妻と子どもたちのことは不憫に思えたのだろう。収穫した作物を分けてやることにしたのだ。クシがぱんぱんに詰まった麻袋を持ってやり、オルマの後を付いてティトーの小屋を訪ねた。

「あたしらもこれで半年食っていかなくちゃならない。少いで悪いんだけど……」

ティトーの妻は何度も何度も頭を下げていた。

「余計なことをするな。畑が流されたのは当然の報いだと他の者たちもみんな思っているんだろ」

奥のほうからティトーの呻くような声が聞こえてきた。

「これはタラサにやるんだ。あんたには関係ない」

オルマはティトーの妻の顔を見ながら答えた。

「流された畑だけがわしら家族に与えられた分なのだ。それを急に神サマは取り上げなすった。何の気まぐれなのか、わしら家族を気に入らなくなっただらうよ」

呂律の回らない口調でばやいてティトーは軽く鼻を鳴らした。そんなティトーの姿をちらりと見たあと、彼の妻は大きく溜め息を吐いて申し訳なさそうに胸の前で手を組み俯いた。

「ロハは収穫を皆で分け合わないのか？ 困った人がいたら助け合うことをしないのか？」

ティトーの小屋を出たあと、クシはオルマに問いかけた。

「土地は一族皆で占ってその割り当てを決める。それは各々に豊穰の神が分け与えてくださったものだ。それを活かすのは各々の努力

次第。神から分けてもらった土地を活かせないのは自分のせいだ。それが昔からの口八のしきたりなんだ。

前の年、ティトーは同じことを言っであたしらを助けてくれなかった……」

「しかし、オルマたちが見舞われた虫の被害やティトーが受けた土なだれの被害は自分のせいではないだろう」

「そうだ。それは神に嫌われたのだから仕方ない。皆、毎年誰かが何かしらの被害を受け、収穫の量には必ず差が出る。どの家族も樂をして収穫を得るわけではないし、豊作といっても人に分けても余るほどの実りにはならない。苦労してほかより収穫を得た者が、いちいち不幸に見舞われた者の面倒を見ていたら損をするのは苦労した者じゃないか。働き者はいつも損をすることになる。あたしらは昨年我慢した分、今年は神から恵みを与えられた。それだけのことだ」

「……それではまた新たな恨みが生まれるではないか」

クシは、口八たちの考え方に納得がいかなかった。

雨季は最後の嵐とともに終わりを告げ、風が少し涼しく感じられるようになった。

口八たちは、収穫したとうもろこしで作った酒の甕だけを残し、谷を後にした。谷にやってきた時の荷物に加え、収穫した作物を抱えてまた平原に戻っていく。彼らの荷のひとつひとつが、これからのひと季節、口八たちの命を支えることになるのだ。

谷間を上がり、小高い山を越え、リヤマの群れが待つ平原まで、口八たちの長い旅がまた始まった。

4、ピューマ（その1）

4、ピューマ

ロハたちは平原に戻り、また放牧の生活を始めた。

ポコは、平原の暮らしは厳しいと言うが、クシはのんびりとリヤマを追って一日を終えるこの暮らしが気に入っていた。リヤマを追いながら広い大地を走り回るオルマも、谷間の暮らしよりずっと活き活きと輝いているように見える。

豊作のお蔭で食べ物に不自由しないことが、この何もない土地の暮らしも穏やかに楽しく感じさせてくれるのかもしれない。数粒のとうもろこしを挽いて作るパンを分け合ったり、一頭のリヤマの肉を保存して少しづつ何日かに分けて食べるという質素な食事だが、ロハにとっては十分恵まれたものだった。

乾季も深くなり、草平野には刺すように冷たい風が吹きつけるようになった。空の蒼はさらに深みを増して吸い込まれそうな色をしている。雨の降らないその季節の日差しは今までよりもずっと鋭い。気温は低いが、一日中外で働くロハたちは誰も、黒リヤマにも負けないほど色濃く焼けていた。

昨季はまだロハに來たばかりで何もできなかったクシも、ようやくリヤマを追うコツが掴めてきたところだ。相変わらず厳しいオルマの指導を受けながら、放牧民としての仕事をなんとかこなせるようになってきていた。

ときどきリヤマに水を飲ませるために、クシが最初にオルマと出会った湖までリヤマたちを移動させる。たくさんのリヤマを追いな

がら移動するのは大変な作業で、行つて戻つてくるにはまるまる一日かかった。

その日も、クシとポコとオルマの三人は湖までリヤマを率いて行った。留守はチャキが守っていた。

湖から戻る途中、数頭の仔リヤマが群からはぐれてしまい、クシが探しに行くことになった。幸い仔リヤマたちは反対側の岸边でまとまって草をはんでいた。

クシは慣れない手つきで仔リヤマたち一匹ずつに縄をかけると、必死にそれを引っ張って丘の向こうに連れて行こうとする。そうすると悪戯ざかりの小悪魔たちはクシをからかうように違う方向へと駆け出した。

いくら力のある者でも一度に別方向へ引っ張られては、その場に抑えておくのが精一杯だ。大汗をかきながら縄を離すまいと全身で踏ん張り、仔リヤマたちとクシはその場で長い間縄を引き合っていた。やがて仔リヤマたちが虚しい抵抗に飽きて自らおとなしく従うまで、クシの悪戦苦闘は続いたのだった。

「思っていたより時間がかかってしまった……」

寒い季節にもかかわらず汗だくになっているクシが意地になって平静を装おうとしているのを見て、オルマは指を指して大笑いした。

「まだ放牧に慣れないのは仕方ない。段々とコツを覚えていけばいいのさ」

そう言ってポコは優しく慰めてくれたが、オルマは容赦ない言葉を浴びせる。

「いつも冷静な【くしゃみ】が、仔リヤマごときに必死になってい

るなんて、おかしいったらありやしない！」

クシはオルマを睨みつけたが、オルマはお腹を抱えて涙まで流しながら笑い続けていた。

口ハの集落に着いたのは、もう日が暮れた後だった。

帰り着く前に暗くなってしまったので、三人は途中で火を熾^もしたいまつに灯りをもした。やつのことでリヤマたちを彼らの埒^{なぐさ}の草原に帰すと、三人はたいまつの灯りを頼りに家の方に向かった。チャキが家に灯りをもしているはずだが、どこまで行っても家の灯りは見えてこない。昇りはじめた月の明かりに助けられて目を凝らすと、暗闇に沈んだ泥レンガの建物が見えた。空気抜きの穴からも入り口からも、まったく灯りは漏れていない。

ポコが顔色を変えて走り出した。オルマとクシも続く。

家に飛び込んだポコは、たいまつの灯りで慎重に家の中を照らしていた。ポコの目にまず飛び込んできたのは真っ赤に染まった床だった。震える手でたいまつを握り、その先を照らしていく。

人の足先が見え、腿が見え、その先の上半身はとうもろこしの山に埋もれていた。

「チャキ！」

ポコの後から家に入ってきたオルマは金切り声を上げてポコを押し退け、倒れている体に駆け寄った。上半身にかぶさるとうもろこしの山を狂ったように払いのける。

クシもオルマを手伝って、必死にとうもろこしを払い除け、腿を抱えてチャキの体を引っ張り出した。チャキの腹も胸も血だらけで、顔は蒼白だ。もう生きてはいないかもしれない。オルマは泣き叫んでチャキの体を抱きかかえた。

「一体、何が？」

クシが呟くと、ポコが頭を抱えて答えた。

「ピューマだ。ピューマがチャキを襲ったんだ。しかしチャキは日が暮れたら必ず火を焚くはずだ。それなのに何故ピューマが入ってきたのか……」

ポコは頭を振りながら、何故だ何故だ……と繰り返した。彼の妻もピューマに襲われ、悪夢がまた繰り返されたのだ。ポコのシヨックは計り知れない。

クシは、オルマが抱きかかえるチャキの無残な姿を悲痛な面持ちで見ている。しかし、ふと何かに気付き、チャキの頭の横にしゃがみ込んだ。

チャキの耳に顔を近づけ、彼の名を呼ぶ。

「チャキ、チャキ……」

何度か呼ぶうち、チャキの指先がそれに反応してぴくんと動いた。

「生きているぞ！」

クシが叫ぶと、ポコとオルマが驚きの声を上げた。三人で手を持つたり体をさすったりして何度も呼びかける。チャキの体はときどきそれに応えてピクピクと動いた。傷だらけだが、よく見るとどの傷も急所を外れているようだ。

「良かった！ チャキ！」

オルマの涙が嬉し涙に変わった。手早く自分の服の裾を裂いてチャキの傷の手当てをする。

「ピューマが暴れたときに積み上げてあったとうもろこしの袋から中身が落ちてきたんだ。ピューマはとうもろこしに埋もれてしまったチャキをそれ以上襲うことができず、諦めて逃げていったんだろう」

ポコがホツとした顔で言った。

「しかし……チャキの血の匂いを覚えたピューマはまたやってくるかもしれない。ピューマを退治しなければ危険だ」

クシが入り口の外に広がる闇の平原を睨んだ。

「ピューマを退治するなんて、そんなこと無理だよ」

チャキを介抱しながら、オルマが溜め息をついた。

「ピューマはチャキの血を付けて逃げていった。夜が明ければ血の跡を辿ってピューマの罅ねぐらを探し当てることができるかもしれない」

「罅を探し当てたって、どうやってピューマを倒すんだい！」

オルマが顔を上げ、クシを睨んで聞き返した。

「私が行く。私はこれでも故郷で戦士としての訓練を積んできた。今ならチャキが与えた傷でピューマは弱っているはずだ。勝てるかもしれない」

そう言つと、チャキが埋もれていたとうもろこしの山の下から、血だらけの石斧を見つけて引っぱり出した。それはクシがクスコから唯一持ってきた物だが、ロハの村では使う機会がなかったため、普段は竈の横に置いてあつたのだ。

チャキは咄嗟にその斧を掴んでピューマに抵抗したのだらう。斧の刃には血がこびりついていた。

「ダメだ、【くしゃみ】！ 人間がピューマに敵うはずはない。しかも奴は傷を負っているのだ。気が立ってさらに凶暴になっている。【くしゃみ】がいくら訓練を積んでいたとしても勝てるわけがない」

ポコが必死で止める。

「随分と見くびってくれるな、ポコ。私は武術の腕には自信がある」

クシは笑って見せた。しかしその後で真顔になって続けた。

「それに……………」。

実は、私は故郷で死罪に等しい罪を犯したのだ。しかし運良く故郷を追われるだけで済んだ。かろうじて死罪を免れたこの身なのだ。万ーピューマに敵わなかったとしても、その命を、助けてくれたロハの為に捧げられるなら本望だ」

「莫迦なことを言うんじゃないよ、【くしゃみ】！

あなたは大事な家族なんだよ。ピューマが襲ってきたら、皆で一緒に戦えばいいじゃないか！」

オルマがクシを怒鳴りつけた。

「オルマ、万ーの話だよ。私は命を粗末に考えているわけではない。

勝てる自信があるのだ。オルマまで私を見くびるのか？」

「だって【くしゃみ】。相手は獣の中の王なんだ。相手にしようなんて気が狂っているとしたか思えない」

「獣の王でも獣は獣だ。人間には知恵がある」

クシはこめかみに人差し指を立てて得意気な顔をして見せた。

本当はクシに自信などなかった。逆に恐ろしくて息が詰まりそうだった。戦で敵を倒したこともない自分に凶暴な獣など倒せるのだろうか。

しかし、いったんその味を覚えたチャキの血を求めて、獣はまたやってくるに違いない。そうなればチャキだけでなく、オルマもポコも、自分も襲われるだろう。

命の恩人を救うために投げ出す命なら惜しくはない。クシは無理に自信満々の様子を装っていたのだ。

どんなに止めても聞く様子のないクシに、オルマ親子はそれ以上何も言うことはできなかった。

「ポコ、頼みがある。これくらいの石と縄をできるだけ多く集めてくれ」

クシは入り口に転がっていた握り拳ほどの大きさの丸い石を拾ってポコに見せた。

「それと、リヤマの皮を厚く巻いて腕当てを作ってほしい」

「そんなことはお安い御用だが……」

（本当に行くつもりなのか）という言葉の代わりに、ポコは訴えるような目をクシに向けた。

「父さん、【くしゃみ】を信じよう。あたしらに協力できることがあるなら、できる限りやってやろうよ」

溜め息をつきながらオルマが呟くように言った。

ポコが集めてきた石と縄で、夜が明けるまで三人はボーラを作った。

「これをどうするんだい？」

クシに言われるままに作ったはいいが、その用途に見当がつかず、オルマはそれを顔の前に持ち上げて、垂れ下がった石がぶつかり合う音を聞いている。

「回して勢いをつけて投げ、動物の首や脚に絡ませて倒す」

言いながらクシは軽くそれを回し、部屋の隅に立て掛けられた鍬の柄めがけて投げた。ほんの少し回転させただけが、ボーラは勢いよく飛んでいき、柄に固く巻きついた。オルマがそれをほどうとしたが、びくともしない。

「へえ、【くしゃみ】は頭がいいな。これなら勝てる自信があるはずだ！」

オルマはボーラの威力に感心して、これならクシがなんとかしてくれるだろうと信用した。

『キヌア、獣に勝つにはどうしたらいい……』

縄に石を括りつけながら、クシは心の中の師に問いかけた。

—— 全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです ——

突然脳裏に、鮮やかにキヌアの声が蘇ってきた。

『キヌア、どうか私とともに戦ってくれ』

今、クシが頼れるのは、記憶の中のキヌアの教えだけだった。

夜が白々と明けるころ、クシは泥レンガの家を出た。

かち合って音がしないようにボーラを束ねて腰に結わえ付け、たすき掛けにした縄の背中側に斧を挿し、両腕にはリヤマの皮を幾重にも重ねた丈夫な腕当てを巻いた。

「【くしゃみ】、必ず無事に帰ってくるんだぞ！ 敵わないと思ったらすぐに諦めて逃げてくるんだぞ！」

オルマは心配のあまり、クシの姿が小さくなるまで大声でいろいろと呼びかけていたが、声が届かないくらいに離れてしまうと、いつまでも勢いよく手を振って見送っていた。

土の上には既に乾いて黒ずんだ血の跡が点々と付いている。ピュームの足跡も微かに残っている。

その日は風が穏やかだったのが幸いだ。黒い染みは風に運ばれた土に覆い隠されることなく、はるか遠くまでピューマが辿った道を示してくれていた。

血の跡が小さく薄くなってきたとき、小高い丘に突き当たった。丘を上り切り、その先を見下ろすと干上がった川の跡が見えた。水はないが、湿った土が蛇行する流れを描いており、それに沿って背の低い木がぽつぽつと生えている。

丘の上に身を潜めて慎重にその周辺に視線を走らせる。すると大きな繁みの陰から動物の脚らしき物が覗いているのが見えた。

「あいつだ」

クシはそれがチャキを襲ったピューマであることを察した。黒い染みは微かではあるが、丘を越えてその繁みの手前まで続いていた。

視線をそこに向けたまま、ゆっくりと腰に手をやり、ボーラを留めている縄をほどく。そしてそのひとつを取り出して軽く放ると、ボーラは半円を描いて繁みの前にすんと落ちた。

落ちてきたボーラに誘われるように、繁みの中から琥珀色の丸い頭が覗いた。突然目の前に降ってきた謎の敵の正体を確かめようと盛んに鼻を鳴らしながら近寄っていく。続いて現れた頭に似つかわしくないどつしりと大きな体には、ところどころ肉が裂けた跡があり、乾いた血がこびり付いていた。

チャキが必死に負わせた傷だ。しかしその傷がピューマの頑丈な体を弱らせている様子は見られない。

クシは二つ目のボーラを取り出し、今度はそれを勢いよく回して力いっぱい放った。ボーラは高速で回りながら空を切り、ピューマの後ろ足を捉え、絡みついた。

猛獣は敵の奇襲を察して、素早くボーラが放たれた方へ向き直り、

突進してきた。その脚を捕らえていた筈のボーラは、強靱な後ろ足を完全に締め上げることはできておらず、虚しくほどけてしまった。クシは向かってくるピューマの眉間を狙って再びボーラを投げつけ、すぐさま斧を構える。

ボーラを眉間に浴びたピューマは一瞬たじろいだ、さらに獰猛さを増して一気にクシに飛び掛ってきた。

クシはリヤマの皮が厚く巻かれた左腕を突き出し、ピューマの牙を食い止めた。ピューマはクシの腕に喰らいついたまま、頭を左右に激しく揺すった。クシの腕をちぎり取ろうとしているのだ。クシは喰いつかれた腕と両脚に力を入れてピューマの動きに抵抗する。そしてもう片方の腕で、ピューマの首に向かって斧を何度も振り下ろした。

首の苦痛に耐えかねたピューマはクシの腕から口を離して後ろに飛び退いたが、再びクシに飛び掛ろうと身を屈めた。

クシはピューマの動きを慎重に観察しながら、斧を握る反対側の手を腰のボーラにかけ、石の部分を持って引き抜いた。

ピューマは低く唸ると前脚で地面を引っ掻いた。

ピューマが牙をむき出して飛び上がった瞬間、クシはピューマの口の中めがけてボーラの石をまっすぐに投げ入れた。石がピューマの喉にすっぽりと納まった。そして飛び上がったピューマの腹の下に素早く転がり込み、そこに一撃を加える。

ピューマはクシの身体を飛び越えてその向こうに仰向けに転がったが、すぐさま身を翻して起き上がった。

しかしすぐに襲い掛かってくる気配がない。むせながら、しきりに頭を振っている。クシの投げ入れた石が喉を塞いでいるのだ。

その隙をクシは見逃さなかった。真正面から向かっていくと、ピューマの脳天に斧を振り下ろした。

気付いて獣はクシに飛び掛ろうと前後の脚をぐっと伸ばしたが、クシの斧が獣の額を打ち砕くのが僅かに速く、脚を突っ張ったまま

ドツと横に倒れた。

クシは気を失った獣の身体に跨り、その喉をかき切つてとどめを刺した。ピューマが再び起き上がることはなかった。

戦いが終わり、クシはしばらく呆然と獣の遺骸を見つめていた。

―― 獣の王に勝った ――

ふと我に返つて自分の体を見回すと、流れ出る自分の血と獣の血で全身が赤い斑模様になっている。

うまくかわしたと思つていたピューマの爪は、クシの体をあちこち傷つけていた。

腕に喰いついたピューマの牙は厚いリヤマの皮を貫いて腕の肉にまで達していた。ボロボロになつた腕当ての下から血が後から後から滲み出てきて、地面にばたばたと滴り落ちた。

それをぼんやりと見つめているうちに、クシの意識は薄れていった。

4、ピューマ（その2）

「クシ、クシ……」

誰かが呼んでいる。懐かしいその声にクシは目を開いた。ゆつくりと上半身を起こすと、目の前にはキヌアがいた。いつもの稽古の格好で、真っ白な朝もやを背にして立っていた。

「キヌア……。私はクスコに帰ることができたのか？ 罪を赦されたのか？」

問いかけると、キヌアは何も言わずに微笑んで頷いた。

「そうか。しかし……」。

私は、ビクーニヤを殺した罪よりも、もっと重い罪を犯してしまった。

ピューマを殺したのだ。ビクーニヤが神の遣いならばピューマは獣の王、神そのものだ。あのように強健な獣に挑むなど無謀なことだと分かっているながら捨て身で挑んだのだ。そして私はその不可能なことをやってしまった。ただ夢中だった。恩人を助けたかったのだ。

後悔はしていない。この上は天の裁きに従うのみだ」

クシはそう言ってうな垂れた。

キヌアはクシの前に跪くと両手を差し出した。その手でクシの手を取り優しく包み込む。クシが再び顔を上げると、キヌアは微笑んだままゆつくりと首を振った。キヌアの笑顔を見つめていると、

負い目を背負った彼の心が少しずつほぐれてくる。

「でもキヌア……。私は獣の動きを察することができたのだ。あのときキヌアの教えを思い出した。」

―― 全神経を研ぎ澄まして自分の周りの空気を読み取る ――

今まで分かっていたもなかなかできなかったことが、命がけの闘いでようやく掴み取ることができたのだ。皮肉なものだ。私にはもう先はないというのに」

クシは淋しく笑った。キヌアがクシの顔を覗き込んで静かに口を開いた。

「その感覚は稽古では得られないわ。自分の命が懸かってはじめて得られるものだわ。あなたはそれを体得したのよ。」

神の裁きがあるとすれば、それはあなたがその技を民のために使っていくという使命だと思うわ」

「キヌアは優しいのだな。そんな慰めを言ってくれるな。私に待っているのは死罪だ」

「いいえ。慰めなんかではない。その使命は死罪よりも辛く苦しいことかもしれない。それでもあなたは生きてその使命を果たしていくのよ」

クシがキヌアを見つめていると、キヌアはまた微笑んで深く頷いた。

そしてクシの手を離すと立ち上がり、くるっと背を向けて濃い朝霧の中に消えていってしまった。

「どこに行くんだ。待ってくれ、キヌア！」

クシは立ち上がって追いかけようとするが、体は鉛のように重く動かない。

やがて周囲の霧が晴れてきて、目の前に壁が見えてきた。それはクスコの石壁ではなく、ロハの泥レンガの壁だったのだ。

「私は戻ってなどいなかった。キヌアは幻だったのか……」

しかし、何故か手にはキヌアの手のぬくもりが残っていた。

また霧が流れてきて、今度は自分の体さえも見えないくらいに何もかも真っ白に覆い尽くしてしまった。

天井に開いた穴に吸い込まれるように、煙がゆらゆらと立ち昇っていく。ぼやけた視界の中でその白い筋の動きだけがやけにはっきりとしていた。

気付くとクシは横になって天井に立ちのぼっていく煙を見つめていた。体を起こそうとしたが、地面に縛り付けられているかのようになり、ぴくりとも動かない。無理に力を入れようとすると、全身を多数の槍で一斉に突付かれたような激痛が走った。

まったく動くことができず、ただ煙の動きを目で追っていると、その視線の先に誰かがひよいと顔を出した。しかし目が霞んでよく見えない。

「キヌア？」

じっと目を凝らしていると、ぼんやりとした人影が次第にはつき

り見えてきた。

「【くしゃみ】目を覚ましたんだね」

目にいっぱい涙を溜めて、オルマが見つめていた。

オルマはクシの手をきつく握り締めている。さっき夢の中でキヌアのぬくもりだと感じたのは、オルマの手だったのだ。

「おお、奇跡だよ。【くしゃみ】が生き還った！」

ポコが叫んでクシを覗き込んだ。オルマがクシの体をそっと抱えて、水の袋をあてがい、それを飲ませた。クシの喉に冷たいものが走り意識がしっかりとしてきた。

「よかった。もう二日も目を覚まさなかったからダメかと思った。本当に良かった……」

「二日？」

クシは不思議な顔をした。

ピューマを倒して気が緩んだ途端、意識がなくなり、キヌアの夢を見ていた。しかしそれはほんの一時のことではなかったか？

「【くしゃみ】がピューマを探しに行ったあと、オルマは心配のあまりお前を追いかけたのだ。ようやくお前を見つけたときには、ピューマの遺骸の上に覆いかぶさるように倒れていたそうだ。

オルマはひとりではお前を連れ帰ることができず、村に助けを呼びに来た。【くしゃみ】が死んじゃう！と半狂乱だったよ。

わしらが駆けつけたときには、お前は大量の血を流したせいで冷たくなっていた。それから二日間、まったく目を覚まさなかったの

だ。わしらはもう諦めると言ったのだが、オルマは必死でお前の体を温め続けた。そうしたら青かったお前の顔に段々と血の色が戻ってきて、目を覚ましたではないか。オルマがお前を生き還らせたんだ」

ポコが説明すると、オルマは顔を赤らめた。

「【くしゃみ】に生きる力があつたからだ。あたしは手伝っただけさ。でも、本当に良かった」

オルマがぼろぼろと涙を流した。この二日間よほど心配して、必死に看病してくれたのだらう。

「ありがとう、オルマ」

オルマは泣きながら首を横に振った。

「お礼を言うのはこっちだよ」

向こうから声がして、体中に布を巻いたチャキがよろよろと近づいてきた。

「チャキ！ 気付いたのか？」

「うん。まだ傷は痛むけど、もう大丈夫。でも【くしゃみ】がピューマを倒してくれなかったら、やっと良くなっても、またあいつに襲われて命を落としていたところだよ。ありがとう【くしゃみ】」

「そうか、良かった。本当に……」

言いながらクシは、全身に痛みが走るのを覚え、顔を歪めた。

「さあ【くしゃみ】、もう少し寝ていたほうがいいよ」

オルマは母親が子どもを寝かしつけるように、クシの胸に手を当てて優しくとんとんと叩いた。その響きに誘われるように、クシは深い眠りに落ちていった。

「……を、口八から追放しよう」

「そうだ。あいつのやったことは決して赦されないことだ」

数人がぼそぼそ話し合う声を聞いて、クシは再び目を開けた。話し声のするほうに顔を向けると、ポコと二人の男たちが膝を突き合わせて話し合っていた。壁に積まれたとうもろこしの袋の上にオルマとチャキが座り、彼らの様子を上から神妙な面持ちで覗き込んでいる。

「あいつのせいでチャキは襲われたのだ。チャキは命を落としていたかもしれない。殺人と同じだ」

「昨年のポコの災害のときには一粒のとうもろこしも出さなかったくせに！」

「そうだ。ああいう奴がいる限り、口八の団結が崩れるではないか」

クシは、ただ事ではないと感じて無理に体を起こした。だいぶ眠ったせいか、体はだいぶ軽くなっていたが、やはり体中に鋭い痛みが走った。

「どういうことだ？ チャキがピューマに襲われたのは誰かのせいなのか？」

クシが後ろから声をかけると、五人が一斉にクシを振り返った。

「いや、大したことじゃない。心配いらないよ。お前はまだ寝ていた方がいい」

ポコが慌てた様子で言った。

「穏やかには聞こえなかったが。」

お蔭で私はもう大丈夫だ。詳しく聞かせてもらえないか？」

クシが真剣な顔で言うので、ポコは少しの間考えてから言った。

「そうだな。【くしゃみ】にも話しておいたほうがいいな」

ポコがほかのふたりに同意を求めると、彼らは顔を見合わせ、お互いに頷いた。

「あの日、わたしの留守の間に、うちにティトーがやって来たそう。ティトーはチャキに足踏み鍬の先を向けてとうもろこしを出せと言った。オルマや村の者が少しずつ分けてやったとうもろこしでは足りず、うちのとうもろこしを無理やり奪おうと考えたのだ。」

チャキが断ると、ティトーは鍬の柄でチャキの頭を殴った。チャ

キが意識を失っている間に、やつはとうもろこしの袋をいくつか奪っていったのだ。

チャキは日暮れになっても目を覚まさなかったので火を焚くことができなかった。さらに殴られた頭の傷から漂う血の匂いに誘われて、ピューマが忍び込んで来たのだ。

チャキはそのとき意識を取り戻したが遅かった。ピューマはチャキに襲い掛かってきた。暗闇の中で竈の横にクシの斧があることを思い出し、手探りで斧を取り出すと、覆いかぶさるピューマを切り付けた。ピューマがひるんだ隙に逃げ出そうとして、とうもろこしの袋の山に当たり、落ちてきたとうもろこしの下敷きになってしまったのだ」

チャキはポコが話すのを頭を抱えて聞いていた。チャキにとっては二度と思い出したくない出来事だ。

「だから、すべての原因はティトーにあるのだ！」

ポコが力強く言い切った。

「……………本当にそうだろうか？」

クシは、ポコと、ほかの二人の男をゆっくりと見た。ひとり背中の中曲がった老人、ロハの長老。もうひとりは大柄の男力チカリヤ、ロハの実質的な族長だ。

「本当にティトーを追いつせば済む問題と思っているのか？」

クシはもう一度、三人に向かって聞き返し、さらに奥にいるオルマとチャキにも問いかけるように二人に目を向けた。

「悪いのはティトーだ」

オルマが声を上げた。

「一族の秩序を乱す者を、ここに置いておくわけにはいかない」

長老は毅然として言った。

「私は気さくで親切な口八が大好きだ。でも、ひとつ気になることがあった。収穫をめぐって小さな争いがよく起こるということだ。私のような異邦人を親切に受け入れてくれるのに、なぜ同じ部族の者同士で争うのか。不思議でならない」

「畑の収穫は、家族の命を守る大切な糧だ。不運に見舞われた者がいたとしても、助けてやれる余裕などない。それに毎年誰かが天の災いを受ける。それは誰にでも起こりうることなのだ。それに耐え抜けばまた豊作の年もあるのだ。すべては天と大地の神の思し召しだ。」

族長の力チカリヤが説明した。

「そうだろうか。天災を受けた者だけが不運と割り切らずに、一族でその被害を請け負えば、ひとりが大きな被害を背負って苦しむことはなくなるではないか」

言葉に力を込めたため、クシはまためまいを覚えてふらついた。オルマが慌てて袋の山から飛び降りて駆け寄り、クシを支えた。

「【くしゃみ】、あたしはこうやって何十年も暮らしてきたんだ。それに従えない奴は口八として暮らす資格はないんだよ」

「今のままでは、またティトーのような者が出てくる。その前に口ハのやり方を変えていった方がいい。」

「私に考えがある」

クシはポコと長老とカチカリヤの三人の顔を見て言った。

「なんだ？話してみろ」

カチカリヤが訝し気な顔で聞く。若造が生意気な口を聞くなと言わんばかりだ。

「口ハたちは、自然から与えられた土地を活かせないのは自分の責任だと言うが、それは違う。」

口ハに与えられたすべての作物が自然から与えられたものなのだ。一部の土地が災害に見舞われてもほかのすべての作物を合わせて分ければ苦しむ者が生まれない。全体が不作になったとしても、収穫を分け合って協力してしのいけば乗り越えられる。少なくとも一家族だけが苦しんで恨みを持つこともなくなるではないか。争いも生まれない」

「しかし、すべての収穫を等しく分けるなんて無理だ。それに自分の土地が豊作だった者は、それを不作だった者に分けてしまうのは嫌がるだろう」

「土地を分け与えてしまうからだ。畑はすべて口ハの一族のものだ。そして人々はそこを協力して耕し、一族の倉庫に蓄える。そこから長が等しく分けていくのだ。倉庫は、数年間の蓄えができるような造りにしておく。その年に余った食料は次の年が不作だったときのために取っておくのだ。」

最初は抵抗があるかもしれない。しかしこの生活がうまく回っていくようになれば、何年も飢饉が続かない限り、飢えも争いもなくなる……」

一度に話したため、クシは額にじつとりと脂汗をかき、言葉を切つてからがつくりとうなだれた。

「分かったよ。分かった。少し休め、【くしゃみ】」

オルマは自分の袖でクシの汗を拭き取ると、クシの身体を抱えて横たえた。クシはしばらく苦痛に小さく呻いていたが、やがて眠ってしまった。

まだ苦しそうなクシの寝顔を見ながら、オルマが呟いた。

「【くしゃみ】は本気で口八のことを心配してくれているんだ。何とかできないか？ カチカリヤ」

カチカリヤはクシの考えにはまだ半信半疑だった。しかしクシの必死の訴えを聞いたあとでは、それを無碍にすることもできずにいた。

「【くしゃみ】の怪我が良くなったら、本当にそれが出来るのか見せてもらおう。【くしゃみ】の責任で口八をまとめていつてもらおうじゃないか。どうだろう、長老」

長老は頷いた。

「少なくとも、この若者は口八のことを思っ言ってくれているのだからな。うまくいかなければ、元の生活に戻るまでだ。

チャキ、それまでティトーを追いつ出すことはできん。それでもい

いか？」

「ぼくは【くしゃみ】を信じるよ！」

チャキはいつにない強い眼差しを向けた。

「【くしゃみ】、責任は重いぞ。早く良くなって口八を助けてくれるのを待っているからな」

荒い息をしながら寝ているクシの髪を撫でながら、オルマは言った。

5、斜陽の都

5、斜陽の都

クスコの街には淀んだ空気が漂っていた。

その頃、皇帝ビラコチャは公の席に出るのを拒むようになり、滅多に人前に顔を出さなくなった。

皇帝の不在にその代理を任されるのは当然、皇太子―ウルコである。しかし怠惰な彼はすべての政に無関心で、国の重要な会議で居眠りをしていることも珍しくなく、最高位の者が下すべき決議はいつも重臣に任せっきりであった。

上に立つ者が無能であった場合、単に下の者がその責務を負って苦勞するといった単純な図式で済むのならまだ良い。国の最高権力者たる者がそうであったときには、必ずやこれを好機とばかりに今まで表舞台に立つことを赦されなかった者たちの台頭が始まる。

クスコも例に漏れず、野心をもつ重臣たちが己に都合の良い方向へと政治を動かし始めていた。彼らに有利となるものなら民が苦しもうとも強引に推し進め、関心の及ばない下々の訴えはすべて切り捨てていった。

さらに目先の甘い汁を吸う方法を覚えた重臣たちにとって、対外的な問題や国の将来などを考えることはまったくもって面倒な話で、そういった案件に対してはほとんど目を逸らしていたのである。

それに加え、事実上最高位であるウルコには誰も意見できない。彼が皇帝の代理としてその位に就いてから、彼の愚行はひどくなるばかりだった。

いつも酔っ払って側に女をはべらせ、気に入らなければ侍従を殴る。酔って乱れた風体を晒し、街を徘徊していることも度々あった。いまや宮殿内だけではなく、クスコの街全体に不満と憤りの声が高まっていたのだ。

「兄上、ウルコの噂をお聞きになりましたか？」

リヨケが、兄のアマルを朝稽古に誘い、手合わせをしながら訊いた。

二人の周囲には、武術の指導を受ける少年たちの威勢の良い掛け声が満ち満ちていて、彼らの声がほかに聞かれる心配はない。

アマルはリヨケの斧に自分の斧を押し付けながら言った。

「ああ、知っている。毎晩、陛下の側室たちの部屋を順に渡り歩いているとか……」

「後宮での権威をもつウルコの母が見て見ぬ振りをしているのですから、ウルコは勝手し放題です。」

街なかに出て、酔って醜態を晒していることもあるそうで、市民の間にもウルコの悪評は広まっています」

「父上は毎夜キヌアの部屋に入り浸りで、気付いていらっしやらないのだな……」

賑やかだった少年たちの掛け声がぴたりと止み、彼らは吸い寄せられるように中庭の中心に集まり、中心から放射線を描くように美しく整列して一斉に腰を下ろした。

少年たちの中央にすつと立つ長身の女性。たくさんの羨望の眼差しを受けながら、彼女は武器の構えの模範を示して見せている。

「あの女はクスコに災いをもたらす存在かもしれん……」

中央の女性に気を取られているアマルの斧を思い切りはじいて、リヨケが言った。

「兄上、キヌアは関係ないではないですか。むしろ憐れなのはキヌアです。クスコに嫁いであらばらくは皇帝に相手にされず、ようやく皇帝に認められたかと思えば、皇帝を惑わす存在ではないかと噂され……」

「リヨケ、何をムキになっている？」

「別にムキになっていいるものではありません。キヌアのせいにする前に、我々が何とかしなくてはいいけないのではないですか？」

辺りがしんと鎮まってしまったため、アマルはリヨケの襟首を掴んで引き寄せると、耳元に顔をぐつと近づけて耳打ちした。

「分かっているが、これはそんな簡単なことではない。」

今や表立って政治を執り仕切ることのできなかつたウリンの貴族たちが、ウルコを傀儡として裏で堂々と政権を握っている。これ以上ウリンの貴族が好き勝手をするのを阻止するには、もはや普通的手段では無理なのだ……」

ケチュア族が生きる大地では、太古よりどの部族も普遍的な自然信仰のもとに暮らしていた。自然は常に相対するふたつの概念の間で均衡を保っていると考えられている。天に対しては地、北に対しては南、昼に対しては夜……。

この自然の摂理に倣い、ほとんどの部族にはふたり、ないし偶数の長が存在したのである。

しかし、急速に勢力を伸ばし、多くの民と異民族を抱えたケチュア族は、太古のしきたりを保っていることが難しくなった。この大部族をひとつにまとめるためには絶対的な求心力が必要であり、やがて権力を握るのは唯一無二の皇帝となったのだ。

建前では皇帝と同じ地位をもつとされる皇族も存在していたのだが、常に戦いと隣り合わせにあったため、やがて、ふたりの中で、武力に長け、多くの功績を為した方が皇帝と認められ、他方の存在は軽んじられることとなった。

しかしかつてふたりの長が存在した名残は未だに存在し、それは貴族の派閥となって受け継がれていた。

ふたつの派閥とは、ハナン（天）とウリン（地）である。

貴族たちはこの大きな二大派閥の中に、それぞれの家系を持っていたのである。

ウリン派はクスコを建国した祖から五代目までの皇帝を輩出し、六代目から現皇帝ビラコチャまではハナン派の出自である。皇帝の地位は特別であるが、その下の皇族、貴族たちになると、どちらの権威も同等である。同等であるがために、権力を巡る争いは熾烈であった。

ビラコチャの子どもたちはそれぞれの母系によってハナンとウリンに分かれていた。

ウルコは、ビラコチャからその母とともにハナン派の新しい家系

を与えられていた。アマルたちの兄弟は母がハナン出身の皇后であるためにハナン派である。

皇位継承を有力視されている皇子たちが全てハナン派である限り、ウリン派から次期皇帝を立てることは叶わない。しかしそのウリン派の者たちにとって、無能なハナンの皇太子が権力を握っていることは好都合であった。

皇太子を蔭でうまく操り、実質上の権威を握ることが可能だからである。同じ家系の者を次々と重臣に取り立てることも、身内の懐が潤うような財政政策も、もっともらしく仕立てて申請すれば、皇太子は特に詮索せずに許可を下してくれる。

ウリンの貴族たちは巧みに計画を進行していった。ハナン派の者たちが気付いた頃には、ウリンが宮殿内の決定権をほぼ掌握していたのだ。

もちろん、ハナン派の中にも自分の一族の利になるように、同じような画策をしている者もいた。

私利私欲を貪ろうとする者たちは進んでウルコを指示し、かえってウルコの権力が増大していくという矛盾も生まれていた。

アマルの言葉を聞いて、リヨケが呟いた。

「普通的手段ではないとすれば……革命……」

瞬時にアマルははじかれた斧を拾うと、リヨケの喉元に突きつけた。

「滅多なことを口にするな、リヨケ。お前は口が軽すぎる」

アマルは斧を引いてリヨケに鋭く一瞥を与えると、マントを翻し

て足早に中庭を出ていった。

『兄上はいつたい何を考えている?』

リヨケは去っていくアマルの後ろ姿を見つめて、急に心がざわついた。

指導を終えて部屋に戻ってきたキヌアは、異様な光景を目にして立ちすくんだ。

部屋の前には枯れ草や枯れ枝が山のように積まれていて、入り口を塞いでいた。

「なんですか！　これは！」

ティツカが叫んで枯れ草の山に飛びつくと、狂ったようにそれらを払い退け始めた。

「まあ、御覧なさい。異民族の娘は鳥の巢のようなねぐらに住んでいるんだわ」

「おお、汚らしい。あの娘がいる限り、そのうち宮殿中が鳥の巢のようになってしまうよ！」

回廊の向こう側から着飾った側室がふたり、こちらを眺めてわざと聞こえるように話していた。

「なんとなく嫌がらせをするのですか！」

ティツカが彼女たちに向かっていくと、側室たちは抱き合っ
て怯えるような素振りをした。

「まあ、まるで野獣だわ！ 恐ろしい。」

私たちにそんな汚らしい物が運べると思うの？ 知らないわよ！」

「自分たちで集めておいて、見つかったら私たちがやったとい
うつもり？ ひどいわ！」

「さつさと片付けなさいよ。ひどい匂いがして堪らないわよ」

ふたりの側室は、甲高い声で笑いながら回廊を走り去った。

ティツカは悔し涙を流しながら戻ってきて再びゴミの山に飛びつくと、その悔しさをぶつけるように太い枝を引つ張り出しては傍らに力いっぱい放った。目の前の悪意の固まりと、嘲笑う側室たちの姿を目の当たりにして、キヌアは深い溜め息を吐き、自らも枯れ草を拾い始めた。

「何故こんな目に遭わなくてはいけないんでしょう！」

キヌアさまといえば、キリスカチェでは偉大な天の女王の娘にして指折りの戦士。誰もが跪く存在でした。友好のために将来有望とされた戦士の座を降りてまで嫁いできたというのに、この国の者たちは異民族というだけで私たちをまるで虫けらのように見て！」

キヌアは何も答えずに黙々と片付けをしている。ティツカは大きな枝を思い切り放りながら、大声で話し続ける。

「でも、キヌアさま。皇帝陛下だけはキヌアさまの味方ですよ。あのように下劣な者など放っておけばいいのです。何と言われようと、

陛下のご寵愛を受けているのはキヌアさまだけなのですから。こんな嫌がらせをするのも、ひとえにキヌアさまが羨ましいんですよ！」

「心配しないでティツカ。このくらい何てことないわ」

キヌアはティツカに笑顔を作ってみせたが、『何でもない』とはとても思えないような悲しげな笑顔だった。

5、斜陽の都（後書き）

（解説）

／／／ハナンとウリンについて／／／

インカ皇族の派閥について、実は私自身もうまく理解できていません。

単なる皇族の系統だけでなく、この地域独特の世界観であり、このふたつの派閥はクスコ市を二分して上の領域、下の領域に居を構えていました。すべての空間を二分し、それをさらに二分し、その間を三分割するという空間の理念で、それぞれのポジションにも時間も分類されるという考え方のようです。（セケ・システム）この派閥が一定の秩序のもとで皇位を継承していたのか、それとも常に争いがあったのかも定かではありませんが、名前の知られている歴代皇帝以外に数十人が存在していたという説や、同時期に二人が同じように権力を握っていたという説、無能な皇帝は伝承から名前とその存在を抹消されたため今記録にあるのは一部の皇帝だという説、さまざまな説が混在し、王位継承の方法について定かな説はまだありません。

最近、Wikipediaの解説を読んだら、皇帝は同時期に三人存在したと書かれていました。

ますます理解に苦しむ内容になってしまったので、物語の中で述べた解説はこの物語の進行上、私が勝手に解釈し、創作を加えたものと理解してください。

6、 悲しみを越えて （その1）

6、 悲しみを越えて

クシの体はだいぶ回復し、最も深い傷を負った片腕をリヤマの皮でしっかりと固定していれば、大体のことはできるようになった。チャキの方は、体中に痛々しい傷跡は残るものの、もう痛みを感じることはなく、普通に生活できるようになっていた。

一家は、あの悪夢が嘘だったかのように、また穏やかな生活を送るようになっていた。

その日はリヤマたちを早めに塹^{ねぐら}に帰し、ポコの一家は家の前で雑談をしながら毛糸を紡いでいた。

クシがまだ本調子ではないから放牧のときに自分の苦勞が絶えないとオルマがぼやき始め、ほかの三人は日が傾き出したことを好機に、そろそろ家に入ろうと片付けを始めたときだった。

そのとき夕焼けを背にした黒い影が音もなく近づいてきて一家の傍に立った。オルマがギョツとして振り返ったが、その姿を確かめて安心したように呟いた。

「なんだ。カチカリヤじゃないか。驚かさないでくれ」

しかしカチカリヤはその大きな体を無理やり縮めるかのように小さく背中を丸め、ぐったりとうなだれていた。しばらく一家の前で地面を見つめて立ちすくんでいたカチカリヤが、聞こえるか聞こえないかというくらい細かい声で告げた。

「ティトーの子どもが死んだ……」

オルマが聞き違いかと思って、カチカリヤに大声で訊き返した。

「何だつて？ カチカリヤ」

「……ティトーの末の子どもがさつき、死んだんだ」

その衝撃的な内容をカチカリヤは繰り返した。聞き間違いではない。

「何でだ？」

ポコが震える低い声でカチカリヤに問う。

「飢え死にだ」

「だって！ うちからとうもろこしを奪っていったじゃないか！」

オルマは怒りを向ける先がなく、カチカリヤの襟首を掴んで怒鳴った。

「ティトーがポコのとうもろこしを盗んだときはもう手遅れだったんだ。おそらく平原に戻ってきたときにはすでに腹が弱っていたに違いない。弱った腹では干し肉などは受け付けないからな。気付いて盛んに穀物をやろうとしたが遅かったのだらう。それからあつという間だつたらしい……」

「ティトーは何で早くにそれを言わなかったんだ！ そうと知って

いればもう少し分けてやることもできたのに」

「あいつは自分で何とかできると思っていたのだ。昨年ポコに何も援助しなかった負い目もあったからな。」

高原に来てから末の子どもを見かけないので、どうした？と訊いたことがあったが、ピューマを怖がって外に出ようとしないのだと誤魔化した。そうしてまで隠そうとしていたんだ」

「でも、そうやって意地を張ったために、チャキも【くしゃみ】も死ぬような怪我を負い、最後には自分の子どもを亡くしてしまったんじゃないか！　なんて莫迦なんだ！」

オルマはカチカリヤの胸を叩いて泣き叫んだ。激しい後悔と怒りを持っていく場が見つからない。

「【くしゃみ】……いや、クシ……」

カチカリヤが弱々しくクシに呼びかけた。

「お前が言ったとおりだ。今までの口ハのやり方では、悲劇は繰り返される……」

カチカリヤを追ってあとから長老もやってきた。そしてクシの前に立ち、手を取って真剣な眼差しでクシの瞳を覗き込みながら言った。

「クシよ。そなたには口ハを変えていける策があると言ったな。」

口ハは、大昔は数家族が寄り合って生活するだけの小さな集団だった。そういう時代なら、各々が自由に土地を手に入れ、ごく僅かな収穫が得られれば十分に生活は潤った。しかし今は多くの家族が

共に生活する大集団だ。畑の割り当ても限られてくる。もはや『自分の糧は自分で』という考えは通用しないのかもしれない。大勢の人間が集まれば争いも起きるが、協力すればそれ以上に大きな力となる。

クシの考えを皆に聞かせてもらえないか？ 皆が納得すれば喜んでお前に従おう。この通りだ」

長老が跪いて深々と頭を下げると、カチカリヤもそれに従った。

「長老、分かりました。もう悲劇を繰り返さないために知恵を絞りましょう」

クシは長老の前に跪き、その手をしっかりと握って約束した。

幼くして亡くなった命を天に返すためには、高い山に葬らねばならない。口ハたちはそう信じていた。

集落に、女、子どもと数人の留守番を残して、男たちはティトーの子どもを弔うために高い山の頂を目指した。雨季の大移動のときと同じく数日を掛けて山地に向かう。

その隊にはティトーの妻とオルマの姿もあった。子どもが入れられた小さな籠に縋りついて歩くティトーの妻を必死で支えて歩くオルマ。

ティトーが罪悪感を感じて援助を申し入れられなかったのと同じように、今度はオルマがティトーたちに罪悪感を抱いている。本当はオルマもティトーの家族を心配していたのだろう。しかし意地や誤解がティトーもオルマも追い詰めてしまったのだ。

鎮痛な面持ちで黙々と歩き続ける口ハの民ひとりひとりを見て、クシは本気でこの民を救う方法を考えねばならないと、決意を新た

にした。

弔いの儀式を終え、山を下りた口ハの男たちが小休止を取っているとき、長老が皆の前に立って呼びかけた。

「われわれは大きな過ちを犯していた。しかし長年の習慣に慣れきってその過ちに気付かなかったのだ。その過ちに気付く知恵と変えようとする努力があれば、小さな命を失うことはなかったのかもしれない。

ここにいる異民族の青年がそれを教えてくれた。そしてわれわれが救われる道を示そうとしてくれておる。今までの伝統から抜け出すのは勇気がいるが、まずはこの青年の話を聞いてやってほしい」

そうして傍らにクシを立たせた。クシは、自分を見上げる口ハの男たちをひととおり見回した。向こう側で膝を抱えて背中を向けているのはティトーだ。彼はしばらく何にも耳を貸さないだろう。しかし、ティトーの妻は寄り添うオルマとともに真剣な顔でクシを見上げていた。

クシは深く息を吸い込むと、ゆっくりと語り始めた。

「私を救ってくれた口ハの民に、まずは感謝を述べたい。荒地で死にかけていた私は、あなたたちのお蔭でこうして生き延びることができたのだ。

しかし、あなたたちが災難を受けても何もできなかったことが悔しい。そしてとうとう、幼い命が消えてしまった。

口ハの民は支えあって生きている。しかしそれは個人の好意の範囲でだ。それではどこかで誤解や嫉妬が生まれる。そして今回のような悲劇になることもあるのだ。

私は、口ハの民がすべてひとつの家族となって、労働も収穫も等

しく分け合つてはどうかと思う。天から与えられた土地を皆で協力して耕す。天災を受けた土地があれば、ほかの土地で補うのだ。そして出来た作物はすべて口ハの皆の物だ。だから口ハの民なら誰にでも、老人も病人も子どもにも、等しく与えられる権利があるのだ。すべての民に等しく収穫を分けるためにはどうすれば良いのか私は考えた。まずはすべての収穫が収まる大きな倉庫を作り、作物を納める。そこから長が皆に平等に分けるのだ。倉庫には作物が腐らないような工夫を凝らし、余った作物は次の年にも使えるようになるのだ。

天災は人の力ではどうすることもできない。しかし、皆が協力してしのいでいけば、被害を少なくすることもできるのではないだろうか。

私のことを信用してくれる者は一緒に倉庫を建て、いま持っている作物を預けてほしい」

クシの話を聞いて、口ハたちはざわついた。

それがどんな内容であっても、古くからの慣習を切り捨てるには勇氣がいる。口ハたちの反応は冷やかで、クシの案を喜んで受け入れる者はいなかった。

そのときカチカリヤが声を上げ、立ち上がった。

「クシは命をかけて村をピューマの脅威から救ってくれた人だ。私はクシを信用する。喜んで作物を預けよう」

カチカリヤは口ハの中で一番の働き者であり、大家族を抱えている。持っている作物の量も他の者より多いのだ。そのカチカリヤがクシに賛成したことで、ぽつぽつと立ち上がって賛成する者が出てきた。

ティトーの妻も、後ろのほうに座るティトーの背中にちらちらと目を遣りながら、それでもオルマとともに立ち上がった。

協力を申し出たのはその場にいた者の三分の二程度だったが、倉庫を建てる人員には十分な数だ。

「ありがとう。では帰ったら早速倉庫を建てる準備をしよう。大事な作物は預けてくれた人すべてに役立てる。二度と悲しい争いが起きないように」

クシは協力を申し出てくれた口八たちの肩を順に抱いて感謝を述べた。

6、 悲しみを越えて（その2）

クシに協力を申し出た口八たちは、村に帰ると早速倉庫を建てるために使う日干しレンガ作りに入った。留守を守っていた者も加わるとそれは盛大な作業となった。交替で放牧をしながら、作業は順調に進んだ。

大勢で協力して同じ仕事を行うのは楽しいものだ。本来陽気な口八たちは、黙々と単純作業をこなすのを味気ないと感じたのだろう。どこからともなく歌声が起こり、そのうち皆が大合唱をしながら作業をするようになった。

その賑やかで楽しそうな様子を目にして、またさらに協力を申し出る家族が増えていった。

ティトーは相変わらず家に籠っていた。しかし彼の妻はティトーが反対してもレンガ作りを手伝いたいと言って進んで働いてくれたのだ。

十分な量の日干しレンガが用意できると、次はいよいよ倉庫を建てていく。流れ作業や分業をうまく活用して建築作業も順調に進んだ。

ある程度の外郭が出来てくると、皆がその使い勝手を真剣に考えるようになった。

「壁には、カビよけに空気穴を多くして風通しを良くしなくては…」

…」

「虫や野ねずみに喰われないように、作物を地面から離して置くためにはどうしたらいいだろう」

クシが何も言わなくても、ロハの民からは様々なアイデアが自然と湧いてくる。ロハの生活に根ざした知恵を絞るのはやはりロハの民でなくてはならない。そう考えたクシは、出されたアイデアをどんどん計画に取り入れていった。

するとクシが当初想像したものよりもずっと立派で使い勝手の良さそうな建物に仕上がっていくではないか。クシが投げかけた案がロハたちの心に届き、大きく膨らんで実現していく様を見ながら、クシは驚きと喜びをおぼえていた。

倉庫が出来上がるころには、ほぼすべてのロハがクシの呼びかけに応じて協力していた。

倉庫が落成し、そこへ収めるためにロハは自分たちの蓄えを差し出した。ロハが持つすべての蓄えを集めるとそれは大変な量となり、乾季が終わるまでに皆の腹を満たし、さらに次の季節に種として使う分には十分に足りそうだった。保存が良ければ次の年に取っておくこともできるだろう。

早速、それらの蓄えからロハひとりひとりに平等に分ける作業が行われた。与えるのは長老と力チカリヤだが、分ける量を計算するのはクシの役目だった。クシはすべての蓄えから、植え付けに使う量を差し引いて、ロハの人数分それぞれを割り当てた。不平等のないように、作物の品種や大きさを丁寧に選別して分けていく。クシの正確な計算と細かい配慮にロハの民は不満を漏らすどころか、誰もが感心し、分け前を受け取る時には心から感謝の意を示した。

働き手が少なく、子どもや老人を抱える家族にとっては今までの苦労が嘘のように有難いことだった。今まで他よりも多くの蓄えを持っていた家族は、少ない蓄えでやっと生活していた家族から感謝の言葉を掛けられて良いことをしたと満足した。

「この倉庫はロハの民の生きる力になる。クシのお蔭でロハは生き返った。ありがとう」

カチカリヤがクシの手を握った。

「いや、今でも後悔している。もっと早くに私が呼びかけていれば、ティトーの子は死なずに済んだ」

「それはロハの皆が悔やんでいることだ。ロハを変えていくことはティトーの子が命をかけて教えてくれたことなんだよ。クシが悔やむことではない。」

クシ、どうだろう。お前さんはまだ若いが、ロハの長になってくれないか？ クシのことは皆が尊敬している。若いからといって反対する者はいないだろう。お前さんこそロハを率いていくのに適している人物だ」

カチカリヤがクシの手を両手でさらに強く握って何度も頷いた。

「わしからも頼むよ。クシ」

長老もクシの肩を叩いた。

「わしも賛成だ」

「私も……」

それを聞いていたロハの民がクシの周りにわらわらと集まってきた。

「わしからも頼む……」

低く、静かに響いたひとりの声に、皆の騒ぎが静まった。クシの周りの人間が一斉に振り返る。そこにはティトーが立っていた。

「ティトー……」

ティトーはそれ以上何も言わずにクシの目を見つめて深く頷いた。クシはしばらく考えてから口を開いた。

「私には故郷がある。一度追われた故郷だが、帰ることを赦されたらいずれは帰りたいと思っているのだ。

だから故郷から迎えが来るまでの間で良ければ、ロハの長としてあなたたちの役に立つよう努力しよう。もちろん、カチカリヤと長老に支えてもらいながらではあるが」

ロハの民から歓声が上がった。皆、クシを取り囲んで飛び跳ねる。

「しかし！ 今までどおりに【くしゃみ】と呼んでくれ。かしこまっって呼ばれると調子が狂う！」

一斉に笑い声が上がった。

「なんだか、【くしゃみ】がどんどん遠くなっていくようだ……」

民衆の盛り上がりとは裏腹に、オルマは淋しそうに呟くとひっそりと家に戻って行った。

ロハたちはクシの指導の下で、つぎつぎと新しい習慣を作っていた。

雨季には谷に下りて新たな生活が始まったが、クシは谷の生活を変える方法も考えていた。ロハの持つ谷の畑を労働できる人数で割り、均等に割り当てたのだ。

しかし割り当てられた土地だけに拘らず助け合うことが条件だ。育ちの悪い畑があればほかの者も手伝って肥料を与え、害虫が出ればまた協力し合って駆除をする。土地はロハたちすべての持ち物であるから、労働力の足りないところは補うのが当然と考えたのだ。そして得た収穫は新たに谷に設置した倉庫に保管して平原と同じように割り振られた。

乾季に谷を移動するときには、以前と同じようにそれぞれが作物を持って平原に移動し、平原の倉庫に納める。

前の年の豊作とまではいかなかったが、皆に割り当てられた食料は十分な量だった。

クシのアイデアはロハの中に浸透していき、それに従うことでロハの絆も深まっていった。

ロハたちは何かに付けクシに頼り、意見を伺うようになった。

季節はひと巡りし、クシがロハにやってきて三度目の乾季が訪れた。平原に乾いた風が吹き、厳しい寒さが訪れた頃、村にひとりの見知らぬ男が迷い込んできた。

彼は一軒のロハの家にふらっと入ってくると、そのまま倒れこんで意識を失った。驚いた住人が急いでクシを呼びにきた。

「ちょっと来てくれ【くしゃみ】」。突然見知らぬ男が家に入ってきたんだ。ここらへんの部族ではないようなんだが、ひどく弱って死

にかけているんだ」

「オルマ、長老とカチカリヤを呼んできてくれ」

オルマにそう伝えたと、クシは急いでその家に行った。ポコとチヤキもクシに付いて行った。

敷き藁の上に横たわった男は、ロハでもなくクスコ周辺の部族でもなく、クシもロハたちも見かけたことのない身なりをしていた。体中におびただしい数の痣や擦り傷がある。どこか遠いところから必死で逃げてきたのだろうか。体がすっかり弱っていて、もう虫の息だった。

後から長老とカチカリヤが駆け込んできた。

「見慣れない格好だ。この辺りの者ではない」

物知りの長老でさえ首を傾げた。

瀕死の男はいったん意識を取り戻し、弱々しい声で何かを訴えた。その意味は理解できないが、その中に繰り返し出てくる言葉があることにクシは気付いた。

—— チャンカ ——

「この男はその国からやってきたのかもしれない……」

クシが呟いたとき、男が低い唸り声をひとつ上げ、その後はまったく動かなくなってしまった。胸に耳を当てると、もう男の鼓動は聞こえなかった。

「これは……」

クシは男の腕から覗く小さな痣を見つけて袖を捲り上げた。その痣は二の腕にくつきりと何かの図柄を浮かび上がらせていた。明らかに誰かが故意に付けたもの……焼いた石を押し当てて付けられた烙印だ。

「捕虜の印だ。この男はその国に捕虜として捕らえられていたのだ」

捕虜といっても体中の傷や痣を見れば、人の扱いを受けていなかったことが分かる。おそらく虐げられることに耐えられなくなり、やつのことで逃げ出してきたのだろう。

乾季の夜の冷え込みは厳しく、これだけ弱った体で夜を越せばすぐに凍えてしまう。ここまで逃げ延びて来られたということは、一晩もかからない、それほど遠くない場所から逃げてきたに違いない。

「もしかしたら……」

カチカリヤが何かを思い出したようだ。

「随分前のことだが、わしがはぐれたリヤマを追って平原の外れまで行ったとき、焼き尽くされた集落を見たのだ。その村の壁にこれと同じ文様が刻まれていたのを見た。もうだいぶ時間が経っていたようだから、昔火事で滅んだ村だと思っていたのだが……」。

その集落は火事で滅んだのではなく、この文様を持つ部族の侵略を受けたのかもしれない」

「それはどの辺りだったのか？」

「ここからずっと北西に行ったところだ」

「そういえば……」

ポコも何かを思い出したようだ。

「以前、わしらと同じように放浪の生活をする部族と出会ったことがあるのだが、彼らが言っていた。北寄りの西の荒地には近づくな。ピューマよりも獰猛な人間たちが襲ってくるぞ……と」

ロハのいる土地もケチュアの領域ではある。その先の西の地までも、かつてクスコ軍は遠征したことがあると聞いている。

しかしそこから北の方角へ向かえば、そこはまるで未知の世界だ。ロハの存在さえもクスコではほとんど知られていなかったのだ。北西の未知の世界にはどんな脅威が潜んでいるのかなど全く知り得ない。

そしてその不吉なものはいまや、この村の近くまで来ているのかもしれないのだ。

事切れた男の無残な姿を見ながら、クシは背筋が凍てつくような恐怖を覚えた。

7、 混沌とする大地（前書き）

この回は残酷なシーンが含まれています。苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

7、混沌とする大地

7、混沌とする大地

闇夜の中で窪地に身を潜めながら、アンコワリヨは手にした斧の柄をぐつと握り締めた。

いよいよ初陣だ。幼い頃から父親に鍛えられてきた腕前を発揮するときが来た。根拠のない自信と同時にとても不安を抱くのは、経験したことのない世界に飛び込むとする者にはありがちなことだ。

アンコワリヨの胸の内にも、どうにもならない感情の嵐が荒れ狂っていた。とくにまだ十を少し過ぎたばかりの彼には、その感情をうまく調節することは非常に難しかった。

斧の柄が汗でぐつしよりと濡れている。大きな不安から目を背けるには、その斧が滑らない方法だけを考えているのが一番良いと気付き、さらに手に力を込めた。

「大丈夫か？ 坊主」

小さな灯りを灯した固形燃料を持って覗き込んできたのは、アンコワリヨのいる部隊を率いる隊長だった。がっしりとした体格と、顔中に入れられた青黒い刺青から覗く猛獣のような鋭い目つき、こめかみや頬に刻まれた深い傷跡などは、この部族の人間には珍しくない風貌だが、アンコワリヨの目にはどうしても敬愛する父親の姿と重なって映るのだった。

「そんな立派な武器を手にしていながらそんなに震えていちゃあ、ざまあねえな。斧を使っくんじゃなくて、斧に使われちまうぞ」

隊長がせせら嗤うのを聞いて、アンコワリヨは意地になった。

「これは親父さまからもらった大事な斧だ。親父さまは今までたくさん敵を倒して、今は大陣営を仕切る首領、アストウワラカさまのいちばんお側を護っているのだ。おいらはその親父さまから戦い方を仕込まれてきた。戦は初めてだが絶対に手柄を立ててやる！」

隊長は、身の程をわきまえるという言葉はまだ知らないらしいこの少年を一瞬呆れた顔で見たが、それがかえって微笑ましく思え、その顔に似合わない優しい笑みを作った。

「それは頼もしいな。是非その腕前を発揮してもらおうじゃないか。しかしただ敵をなぎ倒すだけでは能がないぞ。首領のトゥマイワラカさまは敵を生かして捕らえた者に褒美をくださるのだ。生かして捕らえるのがいちばん難しいことだからな」

それを聞いてアンコワリヨの目が耀いた。

「さすがはわれらが首領さまだ。敵にも慈悲を施されようというのか。それこそ親父さまが言っていた真の勇者だ。おいらも、敵が自ら従うほどの強さを見せ付けてやるんだ」

隊長が一瞬フンと鼻を鳴らしたことに、アンコワリヨは気付かなかった。緊張が激しくどうにも役に立たなさそうな一番若い部下が、やる気を見せたことに胸を撫で下ろした隊長は、アンコワリヨの気持をくじかないように相槌を打った。

「そうとも。お前ならきつとできるさ！」

隊長は大きな掌で無邪気な少年の背中を力いっぱいはたと、また元の位置に戻っていった。

アンコワリヨは、今まで斧の柄を濡らしていた汗が、いつのまにか掌から引いていることに気付くと、「ようし」と呟いて窪地の上に少し顔を出し、敵の集落の様子を窺った。

目標の敵陣はほとんど闇に沈んでいる。集落の正面で数人の見張り役が焚いている焚き火だけがちらちらと見えていた。

夜の戦いなど、幾多の戦を経験してきた父親からも聞いたことはない。どこにでも身を潜めることができる夜闇は、攻め込まれる側に有利ではないだろうか。雄叫びを上げて集団で攻め込めば、潜んでいる敵にはこちらの動きが手に取るように分かる。四方から取り囲まれたら一網打尽だ。

今更ながら解せないものを感じ、隊長に確かめようと思ったとき、隊長が立ち上がって鋭い声を上げた。

その声で隊の兵士全員が立ち上がって鬨とぎの声を上げた。彼ら独特の、背筋におぞましい物が這い上がってくるような不快な響き。それだけで敵は戦意をくじかれると言われている。

奇声を上げながら一斉に敵陣へと斬り込んでいく兵士たちに遅れを取ったアンコワリヨは、滅茶苦茶に叫びながらその後を追いかけた。

先ほどの見張りたちはやっと敵に気付いたというように右往左往し、あっさりと先陣の手に掛かって倒れてしまった。

戦いの前には代表が敵側に出向いて宣戦布告することは常識だ。事前に行われたであろう交渉で、いつ襲撃を受けるかもしれないと知っているはずなのに、見張りは備えもしていなかったようだ。彼らはほとんど戦を経験したことのない部族なのだろうか。それとも

秘策があるのだろうか。いまのところその戦略が読めない。

見張りを倒した味方たちは敵を炙り出そうと、手にした燃料を放って集落の建物に火を掛けた。

いくから見張りがあっさり倒れたといっても、彼らを囚にして万全の準備を整えている可能性もある。アンコワリヨは燃え上がる集落に、ただ一直線に攻め込んでいく味方たちの後ろで周囲の様子を慎重に窺っていた。

相変わらず、建物から飛び出してくる敵はどれも闇雲に襲いかかってくるばかりで、何か策があるようには思えない。味方たちは面白いように敵をなぎ倒していく。

いとも簡単に集落の中央まで入り込んだ味方は、次々に建物に火を掛け敵をおびき出す。

火の点いた建物から戦闘態勢の整っていなかった敵がふらふらと這い出てきて味方の手に掛かって倒れこむ。

夜の奇襲は敵の意表を突くためだったのだろうか。しかしここまで警戒が薄いとは、まさか事前の交渉のないまったくの奇襲なのか。燃え盛る炎の中で敵の姿も味方の姿もみな黒い影となって判別が付かず下手に手出しができない。

味方たちの発する甲高い雄叫びが敵側の威嚇の声や悲鳴をかき消して、戦況がどのようなになっているのか、敵がどのような戦いをしているのか、後方にいるアンコワリヨにはまったく分からなかった。

ふと後ろに気配を感じたアンコワリヨは、振り向きざまに斧を振るった。アンコワリヨの斧をかうじてかわし、ひとりの少年が両手に槍を握り締めて前屈みで立っている。

炎に照らし出された顔は、自分とそれほど変わらない年齢に見えた。

「ちょうどいい相手だ！」

アンコワリヨは斧を構えなおして少年に向かっていった。少年の方もなかなかの腕前らしい。器用にその斧をかわしてしゃがみこむと、槍を地面すれすれに落として勢いよく回しアンコワリヨの脚を掬おうとした。

槍の穂先が足先を掠める寸前で飛び上がったアンコワリヨは、同時に斧を振り上げて屈んだ少年の背中を狙う。

少年が素早く脇に転がってかわしたため、斧はめいっぱい地面に喰い込んだ。斧を抜くのに手間取っていると、すぐに身を起こした少年が槍の穂先を突き出した。鋭利に削られた石の切っ先がアンコワリヨの頬を掠めた。

間髪を入れずに槍を突き出す少年から、斧を取り損なったアンコワリヨはひたすら逃げるしかなかった。

相手が大柄の戦士なら、きっと武器を失くした時点で気圧されて観念していただろうが、相手が同じくらいの少年であることで、まだどこかで反撃ができるかもしれないという期待があった。

ぐるぐると逃げ回り、再び地面に刺さった斧に近づくことができたアンコワリヨは、槍をかわして仰向けに転んだ瞬間に、斧の柄の根元に足先を掛けてそれを蹴り上げた。

見事に抜けて宙に舞った斧を受け止め、今度は少年に勢い良く斬りかかる。少年は槍の柄でそれを受け止めるが、何度も斧を受け止めているうちに、とうとう槍の柄が折れ、護るものを失ってしまった。

アンコワリヨは観念して跪いた少年にそれ以上斧を向けることはしなかった。

少年は、アンコワリヨがとどめを刺さず斧を下ろしたことに驚いた顔をした。少年の両腕を掴み、それを背中に回してしっかりと押さえ付ける。少年は抵抗しなかった。

アンコワリヨは、少年を引き連れて火の掛からない場所まで退避

し、混戦が治まるのを待った。

夜が明ける頃には、集落は壊滅状態となった。炎はほぼすべての建物を焼き尽くし、もうどこにも敵が潜む場所が残っていないかった。倒された敵の骸もほとんどが焼け焦げ、原型を留めていない。

焼け残った泥レンガの残骸に兵士の一人が勝利の証である刻印を刻んでいた。

結局、敵を生きたまま捕らえたのはアンコワリヨだけだった。手を縛られて隊長の後を付いていく捕虜を眺めて、アンコワリヨは誇らしい気分だった。

隊は広大な平原の真ん中にたくさんの幟のぼりをはためかせている陣に戻った。アンコワリヨのいる部隊の何倍もの数の人間が忙せわしく立ち回っている。

兵士たちは陣に着くやいなや食事の支度をする女たちの中に紛れ込み、焼きあがったばかりの肉を漁り始めた。女たちが叱咤しっさする声と、兵士たちの労を労ねぎう仲間の声、兵士が自分の武勇伝を大声で語って聞かせる声が交じり合う。

賑やかな野営地を抜けて、アンコワリヨは隊長と捕虜を連れた兵士の後を付いていった。

陣の中央には立派な設えしつゐの天幕が張られていた。四方に立てられた柱に梁が渡され、部族の紋章を織り込んだ幅の広い布が何枚も、少しずつ重なるように掛けられている。

隊長は中央の布を押し上げてその天幕の中に入っていた。アンコワリヨはひどく緊張した。その天幕の中には、無数の小部隊を取り纏める首領トウマイワラカが居るのだ。

垂れ幕の向こうに消えた隊長が再び顔を出し、なかなか入っていないアンコワリヨを急かした。

「何をやっておる！ 早く来い！」

アンコワリヨがおずおずと垂れ幕を持ち上げて中へ入ると、そこは外で見るよりもずっと広い空間になっていた。布を透かして入ってくる陽の光と、上座に煌々と焚かれた松明の灯りに、天幕の鮮やかな模様が浮かび上がり、埃っぽい野营地とはまるで別世界のようにだ。

中央の木の椅子に、隊長の貫禄とは比べ物にもならないほどの威厳を感じさせる人物が座っていた。周囲にも屈強な戦士が大勢居並んでいるが、その人物は全く別格だった。

今までアンコワリヨが誰も適うことがないと思っていた自分の父親でさえ、足許にも及ばないと思った。

直視してはいけないと慌てて跪き、視線を地面に向ける。その視線の先に、突然大きな塊が滑り込んできた。

大振りの鹿の腿肉だ。

驚いて顔を上げると、隊長がアンコワリヨを振り返って言った。

「首領さまからの褒美だ。大変な手柄だとおっしゃっている」

アンコワリヨは慌ててその腿肉を抱え込むと、何度も頭を下げた。その姿が滑稽だったのか、天幕に集う屈強な戦士たちから低い笑い声が上がった。

アンコワリヨが肉を抱えて正面を向いたまま、後ろ歩きで下がっていくと、今度は捕虜の少年が首領の前に押し出された。両腕を兵士に掴まれている少年は、背後からも兵士に抱え込まれ、身動きが出来ない状態になった。

まだ自分と同じくらいの年の捕虜に対しては、おそらく寛大な沙汰があるのだろうと気安く考えていたアンコワリヨの目に、信じ難い光景が飛び込んでくる。

玉座の脇の松明の中にくべられていた棒を兵士の一人が取り出し、少年に向けた。棒の先には真つ赤に燃えた石が付いている。石には部族の紋章が彫られていた。

それを見た少年は突然大声を上げて暴れだした。三人の兵士が少年の体を羽交い絞めにして、片袖を捲り上げて二の腕を晒した。

まだ細いその腕に熱した石が押し付けられると同時に、天幕を切り裂くような悲鳴が響き渡った。

アンコワリヨは肉を放り出し両耳を塞いだが、その光景を見つめる眼を逸らすことはできなかった。

自分の立てた手柄とは、神に捧げる貴重な生贄を捕らえてきたことだったのだと、そのときになってやっと知ったのだ。

8、月夜の宴

8、月夜の宴

「【くしゃみ】、是非に頼みたいことがあるんだ」

倉庫の作物を点検していたクシのところに、チャキが顔を出しておずおずと言ったのは、高原から谷へと移る準備を始めた乾季の終わりだった。

いつもは一緒に作業をしているカチカリヤがその日はほかの用で忙しかったので、クシはひとりで倉庫の中身を調べて、種として使う分と来年まで保管する分に分けなくてはいけなかった。

そんな忙しい時に声をかけられても気が回らない。クシは作業の手を休めずに適当に返事をした。

「なんだ？ 私にできることなら別にいいが……」

「じゃあ、今夜月が昇ったら、ぼくの代わりに長老の家の前の広場に行っておくれよ。それだけでいいんだ」

クシは訳が分からなかったが、理由を聞いている暇はない。

「ああ、分かったよ」

そう安請け合いしてしまったのが運のつきだった。

月が昇るころ、村中がざわざわと騒がしくなった。そういえばオルマが明日は何かがあると言って昨晚からそわそわとしていたのだが、倉庫のことで頭がいっぱいで肝心な内容を聞きそびれていたのだ。

チャキに言われたとおり長老の家の前の広場にやってくると、そこにはたくさんの人が集まっていた。口八たちがほとんどそこに集まっていると言ってもいいくらいだ。

人だかりを掻き分けて長老を探し、「チャキの代わりに来ました」と告げると、長老はしかめ面をして溜め息をついた。

「チャキのやつは、やっぱり逃げおったか……」

「逃げる？」

クシは何かまずいことに首を突っ込んでしまったのだろうか、急に不安になった。

「うむ。しかし、クシが参加すれば宴も盛り上がるだろう」

そう言うと、長老はクシの手を引いて広場の中央に連れて行った。広場の中央に大きな焚き火が焚かれていて、それを囲むように若者たちが立っていた。

若い男たちがぐるりと大きな外円を描くように立っており、クシはその円の一部に入れられた。

男たちの円に囲まれる形で、若い女たちが内円を作って男たちと見合うように立っていた。その若者たちの円を遠巻きに囲んで、口八の皆が大騒ぎをして盛り上がっていた。

「それでは、今年はようやく年頃の男女の数が揃ったので、三年振りの『求婚の宴』を始めることとしよう」

長老が声を張り上げると、円を見つめる野次馬たちの歓声が一気に高まった。

「『求婚の宴』とはなんだ？」

隣に立つ小太りの男にクシは訊いた。

「なんだ、【くしゃみ】は知らないで参加したのかい？」

「チャキの代理なんだよ」

「あはは、チャキに嵌められたんだな。あいつはこの宴が嫌いだからな。」

これは男女が結婚相手を決める祭りなんだ。歌に合わせて踊りながら男と女の輪が逆方向になるように回っていく。女は自分の意中の相手のところに來たらその場で踊り続けるのさ。男の方にも気があれば相手の手を取り、そこで婚約が決まるのさ」

「そんな！ 私は結婚するつもりなんてない。下りるよ！」

円から外れようとするクシの腕を、隣の男はきつく掴んだ。

「だめだよ、【くしゃみ】。男女の数が揃わなければ宴は中止だ。こんなに盛り上がっているのに、皆をがっかりさせるつもりか？」

小太りの男はこの祭りに賭けているのか、殺気立った様子でクシを諭した。

「なに、別に求婚に応じなければいいのさ。求婚者が来るかどうか

も分からないしな」

反対隣りの男が笑って言った。クシはもう逃げ出すことが出来なかった。

ほどなく円の周りの観客から、リヤマの皮を張った太鼓を打ち鳴らす音に合わせて大合唱が始まった。手拍子や掛け声も入って大変な盛り上がりだ。

その歌に合わせて円になっている男女が愉しげに踊り出す。隣の小太りの男も陶醉したように夢中で踊っている。

もうこうなったら愉しむしかない、クシも一緒になって踊り出した。

ふと目の前の女がクシの前で立ち止まって踊り続けているのに気付いた。ほどなく彼女を押し退けるように別の女もやってきて、クシのすぐ目の前で踊り始めた。

やがてぞくぞくと集まってきた女たちは、クシの周りで団子になって踊り続けた。観客からどっと笑いが起こる。

今やほかの男たちは皆ひとりで虚しく踊り続け、クシの周りに集まった女たちはもみくちゃになりながら、かわるがわるクシに愛想を振りまくのだった。

「【くしゃみ】ー！ さっさと相手を決めろ！ ほかの男に迷惑だぞ！」

「いいぞ、いいぞ。【くしゃみ】を取り合って踊れ踊れー」

円の男たちからは罵声が、観客からは野次が飛び、笑いが起こる。クシはほとほと困り果てた。とにかくこの場から逃げ出さなくてはいけない。どうしたものかと考えながら辺りを見回していると、女たちの集団の後ろ側に見慣れた顔を見つけた。オルマだ。

ひしめいている女たちを掻き分けて必死にオルマの手を掴むと、

そのまま広場を抜けて平原の暗闇の中に走り去った。

クシとオルマの背中を口八たちの大きな歓声が追いかけてきた。

「最初の一組が決まったぞ！」

「幸せになれよー」

「オルマを大切にするんだぞー」

野次を聞いて、また笑いがどつと起こる。

残された女たちは拗ねた顔でしばらく立ちすくんでいたが、再び円を作ると、最初のように踊りながら再び回り始めた。

広場を外れて誰もいない平原にやってきたクシは、ようやくオルマの手を離れた。全力で走るクシに引つ張られてきたのでオルマは息も絶え絶えだ。肩で息をして話することもできない。

オルマが倒れこむように草地に座り込んだので、クシもオルマの横に腰を下ろすと、彼女の背中を優しくさすった。

ほとんど満ちた月は明るく、ふたりの姿をくつきりと照らし出していた。

「すまない、オルマ。あの場から逃げ出すにはこうするしかなくて……」

「なんだ……そういう……ことか……」

オルマは胸に手を当てて、必死で息を整えようとしていた。しばらく経ってようやく呼吸が整うと、オルマは再び口を開いた。

「チャキが【くしゃみ】に代わりをさせたんだな。故郷に帰りたいと言っていた【くしゃみ】が、ロハで結婚するはずはないから、おかしいとは思っていたんだが」

「オルマにもあの場で求婚したい相手がいたんだろうに。私が連れ出してしまったから、せつかくのチャンスが無駄になってしまったな。申し訳ない」

「最初からそんな相手などいやしないさ。困っていたところに【くしゃみ】の姿を見つけたから、まさかとは思いつつあんたの前に行ったのさ。」

【くしゃみ】の気が変わってロハで結婚してもいいと思っているなら、あたしを選んでほしくて……」

オルマが真顔になって、クシの瞳をまっすぐ覗き込んだ。

「ねえ、【くしゃみ】。あんたを捨てた故郷にどうして帰りたいのさ。あんたはここで楽しく暮らしているじゃないか。ロハの生活は嫌いか？」

「そんなことはない。私はロハの民もこの生活も気に入っている」

「だったら、あたしと結婚してずっとここにいてくれないか？」

思わぬオルマからの求婚だった。答えを待ってオルマはじっとクシの顔を見つめた。

月明かりに照らされて、健康的な艶のある褐色の肌が蒼ざめて見える。いつもは強気なその瞳は、今は不安気に揺れていた。胸の前に合わせた手を強く握り締め、クシの瞳を真摯に見つめるその健気な姿に、クシの心は揺れた。

故郷は自分を陥れ、無理矢理罪を着せて追い出した。未だになんの音沙汰もないうえ、あと何年こうして放っておかれるのか分らない。クシが生きていようがいまいが、故郷の人間には何も関係のないことなのだ。

そんな故郷に何故帰りたいと思うのだろうか。

オルマのことは妹のように思っていたが、気の置けない仲であることには変わらない。二人でいるときはいつも心から笑える。この先夫婦になったとしても何も変わらないだろう。いやむしろ、いつまでも仲良く幸せに暮らせるのではないだろうか。

「そうだな。それがいいのかもしれない……」

しかしオルマに返事をしようとすると、何故かクシの中のもうひとりの自分が、オルマとの結婚を止めようとした。クシの心は激しく葛藤した。

瞬きもせずに見つめるオルマの視線から逃れようと、思わず顔を逸らしてきつく目を閉じる。すると瞼の中にぼんやりと人影が浮かんできた。その人影はゆっくりと近づいてくる。少しずつその姿がはつきりとしてきた……。

「キヌア……」

言われて、クシははっと目を開けた。怪訝な顔をオルマに向けると、彼女の表情にわずかに翳が差したのが分かった。

「やっぱりそうなんだ。【くしゃみ】には想う人がいるんだね」

「何故、その名を知っている？」

「なんだ。あたしも女の端くれだったんだな。なかなか鋭いじゃないか」

オルマは答えをじらすように、独り言を言った。

「キヌアという名はどこで？」

クシは焦ってもう一度聞く。オルマは溜め息をひとつつくと、月を見上げた。

「【くしゃみ】がピューマにやられて生死の境をさまよっているときに、何度もうわ言で呼んでいたんだよ。そのときピンと来たんだ。きつとそれは故郷にいる恋人の名じゃないかって。生きるか死ぬかというときに呼ぶくらいだから、よほど想っている相手なんだろうなって」

「そうか。私はそんなことを……。でも恋人なんかじゃないよ。彼女は恋してはいけない相手だから」

オルマは心配そうにまたクシを見た。

「どういうこと？」

「詳しくは話せないが、決して結ばれる相手ではないんだ。彼女は私の武術の師だ。尊敬こそすれ、恋することなど……」

「でもクシは生死の境を彷徨いながら、彼女を呼び続けていた。もしあれが最期だったとしたら、いちばん会いたい相手だったんだろう。ただ尊敬しているだけの相手ならあんな風に呼び続けたりしないさ」

「……私が彼女のことを想っているなどと、オルマに言われるまで気付かなかった」

「気付かなかったんじゃなくて、気付いちゃいけないと無理に気持ちを押さえ込んでいたんじゃないのか？」

あたしが、いつかは帰ってしまう【くしゃみ】に恋しちゃいけないと思っていたのと同じように」

「オルマ……」

「嫌だな。そんなところまで気が合うのか」

オルマは下を向いて自嘲するようにふふつと短く笑うと、さっと顔を上げて明るい口調で言った。

「ねえ、【くしゃみ】。約束しよっ！

あんたは故郷に帰って、ちゃんと彼女に想いを伝えるんだ。それで振られてすつきりしたら、口八に帰って来る。あたしはそれまで待っているから」

「私が戻って来なかったら？」

「あたしもそんな間抜けじゃないよ。【くしゃみ】は帰ってこないと思ったら、さっさと結婚するさ」

オルマはいつもの調子を取り戻して、クシの肩を思い切りはいた。た。

「分かった。約束するよ」

クシはオルマに頷き、微笑んだ。

『リュウゼツランが咲く前に、クスコも忘れ、キヌアも忘れ、口ハの民となつて暮らすことになるかもしれないな』

オルマとふたり寄り添うように並んで、月明かりにぼんやりと青く輝く草原を眺めながら、クシは思っていた。

広場に戻ってきたときには、もうすでに焚き火の周りに円はなく、お祭り騒ぎもおさまっていた。

数組の男女がその焚き火の周りで座り込んで談笑する姿や、解散した観客たちがぼつぽつと寄り集まり井戸端会議に花を咲かせている姿が見えた。

クシとオルマの姿に気付いた男が素早く寄ってきて冷やかした。

「愛の語らいは楽しかったかい？」

「なんで今更、あたしが家族同様の【くしゃみ】と結婚するんだい。勘違いもいいところだ！」

オルマがからかった男を怒鳴りつけた。

「騒がせてすまなかった。『求婚の宴』もよく知らずに参加してしまったものだから、オルマに頼って逃げ出すしかなかったんだ」

「まあ、あの状況じゃ仕方ないよな。俺も分かるが、色男は大変なんだよなあ」

クシの肩を抱いてそう言った男に皆が大笑いして、とりあえず騒動はおさまった。クシとオルマは顔を見合わせて苦笑した。

8、月夜の宴（後書き）

むかし、アンデス地方の暮らしを紹介するドキュメンタリーでの『求婚の宴』のような行事を観た覚えがありました。

その後、アンデス地方を舞台にした小説（作者は日本人）にもこんな宴の様子が描かれていました。

残念ながら、何の番組か、どういう題名の小説か忘れてしまい、本当に今もあるのか、どの地方の風習なのかも忘れてしまったのですが、ところ変わればいろいろな習慣があるものだなど、印象に残ったものです。

アンデス流の婚活ですが、単純明快で陽気なところがさすがラテン流！

9、シトウア祭（その1）

9、シトウア祭

アマルの館から数人の貴族が出てきたのは、もう夜半を過ぎたころだ。

アマルが最近館を増築してから毎晩のように貴族たちが出入りしている。それは主にハナンの武将や神官たちだ。館の完成を祝う会としては少々殺風景な集まりに見えた。

アマルの増築と同じ時期に宮殿から独立し、アマルの館の傍に居を構えたリヨケは、その中に自分が呼ばれないのを不服に感じていた。そこでその晩、アマルの屋敷の外でその様子を窺っていたのだ。貴族たちが出て行ったあと、リヨケはアマルの館の門をくぐった。侍従に連れられて部屋に入ると、石の寝台に座ったアマルは疲れた表情で壁にもたれていた。

「兄上、夜遅くに申し訳ありません」

「リヨケか……」

アマルは侍従に席を外すようにと手を払って合図した。侍従の姿が消えると、リヨケは率直に聞いてみた。

「今夜は何の集まりですか？ 毎晩のようにこの館では宴会が開かれていますようですが、何故私には声が掛からないのかと不満に思っているんですよ」

リヨケが鼻を鳴らして笑った。

「そうひがむな。別に楽しい宴会ではないのだ」

アマルはこめかみを押さえて立ち上がると、水差しの水を銀の力ツプに注いで一気に飲み干した。

「ウルコの悪政とウリンの台頭にハナンの貴族たちの不満が募ってきているのだ。毎晩要職にあるハナンの者たちが私を説得に来る。今こそクスコの皇位を奪えと……」

リヨケは衝撃を覚えた。

「ウルコについては、確かに目に余る行為を放っておくのは良くないと思いますが、父上がまだ健在であるのに無理やり政権を奪えというのは、あまりにも乱暴です」

「そうだ。私にそれを扇動しろというのだ」

「そのような誘惑に乗ってはいけません」

「勿論だ。例え反乱を起こしたとしても、それはハナンの者を追い詰める結果にしかない。失敗すれば多くの良識あるハナンの貴族が捕らえられる。それこそウリンに独裁権を与えるようなものなのだ」

「しかし……。今のままではハナンの貴族の不満もいつ爆発するか分からない……」

「ああ、私が曖昧な返事を繰り返していれば、私を立てずともハナ

ンの貴族は決起するだろう。それこそ一番恐れていることなのだ」

「なんとということだ……。どうすればいいのだ」

話を聞いて、リヨケも頭を抱えた。

「ひとつだけ、方法がある。

クシだ。クシを先頭に立てて改革を起こすのだ。クシはハナン、ウリンに関わらず多くの貴族から慕われている。貴族だけでなく民衆にも人気があるのだ。クシが呼びかければ多くの者が付いてくるだろう。ウリンの中にはウルコとその取り巻きの執政に異議を唱える良識あるものもいる。そういったウリンの貴族の指示を取り付けることも不可能ではない。多くの民意を得れば平和裏に政権を取り戻すことができるかもしれないのだ」

「しかし、クシが帰れるのは、あと何年先になるか……」

「そうだ。リュウゼツランの花が咲くのを待っていることなどできない。クシを呼び戻す方法がないだろうか」

アマルは頭をかきむしって部屋の中を歩き回った。

「もうすぐ西の辺境に行っているワイナが任期を終えて帰ってきてます。クシの様子を聞いてみましょう。できればワイナを介して西の地にいるクシと連絡が取れば良いのですが……」

そうアマルを慰めながら、リヨケはほかに良い方法がないものかと考えを巡らせていた。

それから幾日も経たないうちにワイナが任期を終えてクスコに戻ってきた。

一日疲れを癒すと、ワイナは早速キヌアの教室に顔を出した。リヨケがクシの様子を聞こうとワイナのところに行くと、もう既にキヌアが話し掛けていた。

リヨケがワイナに呼びかけると、二人が沈んだ面持ちでリヨケを振り返った。

「せっかく無事に帰還したというのに、随分と暗い顔をしているな」

リヨケがワイナの背中を叩いた。

「リヨケさま。クシさまの行方が分からなくなりました……」

「どういうことだ？」

「西の辺境に赴いてから、私はその辺りの村を探したのですが、どこにもクシさまはいなかったのです。道を外れてもう少し北の方角に行ったのかもしれないと、一度休暇をもらってだいぶ外れの地まで行ったことがあるのですが、どこまでも荒地が続いているばかりで、やっと建物を見つけたと思ったら廃村でした。あの地に迷い込んだとしたら、もう生きてはいないかもしれない……」

キヌアが両腕を抱え込んで震えていた。

「まだ分からないではないか。滅多なことを言うのではない！」

「しかしリヨケさま。クシさまは何かも取り上げられてあの地に放り出されたのです。食料も水もないあの地で生きていくのは不可能です」

「搜索隊を出してもつと広範囲を探せば見つかるかもしれない。しかし刑期が明けなければそれも出来ない」

「リュウゼツランを早く開花させる方法など……。ないでしょうね……」

ワイナが呟くと、キヌアがそれを繰り返した。

「リュウゼツランを早く開花させる方法……」

突然、キヌアがリョケとワイナの腕を掴んだ。

「あるわ！」

驚いて二人はキヌアの顔を見た。

「それは一体……」

「ちょっと待って」

キヌアは走って中庭の中央に行くと、整列して稽古をしている少年たちを集めて何やら指導した。すると少年たちは中庭全体に大きく広がって、各々合わせ稽古を始めた。すぐに中庭が少年たちの元気な掛け声に包まれた。

キヌアは急いで二人のところに戻ってくると、話の続きを始めた。

「宮殿の裏手の小高い丘にリュウゼツランが群生しているところがあるわ。私はそこで花を咲かせているリュウゼツランを見たの。その辺りの株の生長はおそらく同じくらいだわ。まだ花芽を付けたば

かりの株を掘ってきて、中庭のものと植え替えるのよ。花茎の伸びていない株は若い株と見た目にそれほど違いはないもの」

三人は中庭の向こう側に見える木の囲いに目をやった。人の高さ以上ある木の杭が狭い間隔で打ち込まれ、その中に植えられているリュウゼツランの姿をすっかり隠している。

「キヌア、それは無理だ。植え替えるためには、周りに設けられたあの頑丈な木の杭を抜かなくてはいけない。あれを抜いて植え替えをするにはだいぶ時間と労力が必要だ。中庭には常に人の目がある。夜になれば音も響き、なお目立つだろう。誰にも知られず植え替えることなど出来ないよ」

期待して聞いていたリヨケが、がっかりして溜め息をついた。

「いや、出来るかもしれない」

ワイナが腕を組んで考えながら言った。

「どうやって？」

多少苛立った様子でリヨケが聞いた。ワイナがリヨケの目を見つめて言う。

「シトウアの祭りの期間なら、中庭に人が無くなります」

「なるほど、シトウアか！ もうすぐではないか！」

シトウアの祭り……それは、乾季から雨季に移る春分の時期に行われる厄払いの祭りだった。

祭りは四日間続き、その間、クスコに住んでいる異民族たちは郊外に移動しなくてはならないのだ。

純粋なケチュア人だけになった街では、人々は断食をして家の中に籠って過ごす。宮殿の貴族たちは、たいてい宮殿の大広間か神殿に籠るのだ。

夜、人気の無くなった街の中を、悪霊払いの者たちが松明と香を手し、奇声を発しながら駆け回る。そうやって街の中を清めていくのだ。

宮殿に仕える兵は異民族出身の者も多いため、祭りの間は兵の数が減るばかりか、残った兵たちも各々の家に戻って過ごさなくてはいけない。大広間以外の宮殿にはほとんど人が無くなるのだった。

しかし、皆が大広間に集まるのだから、抜け出せばすぐに分かっ
てしまうだろう。シトウアの最後に行われる祈祷の間なら抜け出し
ても分からないだろうが、われわれも断食で体が弱っている。裏山
でリュウゼツランを掘って運び、重い杭を抜いて植え替えをし、ま
た元に戻す事まで果たして出来るだろうか……」

「私がやるわ」

すかさず声を上げたのはキヌアだった。

「郊外に移動したあと、宮殿に忍び込んで植え替えをすればいいの
でしょう？　祭りの前に私の部屋の裏手に抜け穴を作っておくわ。
ううん。実はもうそこには抜け穴があるの。いつも気晴らしにそこ
を抜けて草原に行っていたのよ。そこでリュウゼツランを見つけた
んですもの」

「キヌア、危険だぞ。万一見つかったら死罪は確実だ」

「大丈夫よ。私を誰だと思っているの。簡単に見つかるようなへまをすることって？」

キヌアが自信たっぷりに胸を叩いた。

「それに、ひとりではなくティツカにも手伝ってもらうわ」

リョケとワイナはしばらく顔を見合わせていたが、やがてゆっくりと頷き合った。

「分かった。シトウアまでにわれわれが良さそうな株を裏山から掘り起こし、その抜け穴の外に置いておこう。そしてシトウアの前日に目立たない裏側の杭を何本か抜いて鍬を隠しておく。キヌアはシトウア祭の夜に中庭の株と植え替えてほしい。後は最終日の祈祷の時間にわれわれが杭を元に戻しておくからな」

「わかったわ」

「リュウゼツランの株は巨大で根が深く、おまけに葉は鋭く尖っています。女性ふたりで大丈夫ですか」

ワイナが心配して訊くと、キヌアは腕に力こぶを作って笑った。

「ふたりとも力には自信があるのよ。後は鋭い棘に射抜かれないように、慎重に作業しなくてはね」

「キヌアたちだけではない。そう言うわれわれも十分に気をつけなくてはな」

三人は軽く肩を叩き合ってその場を離れた。

キヌアが戻って声を掛けると、今まで中庭中に響いていた少年たちの賑やかな掛け声が一斉に止んだ。

9、 シトゥア祭 (その1) (後書き)

シトゥアの祭りについて

春分に行われる日本で言えば節分のような意味合いの厄払いの行事です。

ここでの描写はかなり脚色や想像を加えていますが

厄払いをする人物が夜中に街中を奇声を発しながら香を持って歩き回る。異民族は街の外に出されるといのは記録にある通りです。

9、 シトウア祭（その2）

リヨケとワイナはその丘に向かって跪き、頭を地面に擦り付けるようにして平伏^{ひれふ}した。しばらくして立ち上がり空を仰いだあと、また跪いて平伏す。

その動作を何度行ったか忘れてしまうほど念入りに繰り返して、ふたりはようやく立ち上がり、丘に上がっていった。

「まさか此処だとはな……」

「天罰が下るかもしれませんね」

シトウアが二日後に迫った。

リヨケとワイナは、足踏み鍬を持ってキヌアに教えてもらった場所に行った。『聖なる岩』と呼ばれる大岩の陰にリュウゼツランが群生していた。数本のリュウゼツランの大株が天高く花茎を伸ばし、そこから枝を伸ばしてたわわに蕾をつけている。

そこはクスコの人々にとっては聖域であり、誰もが敢えてその場所に踏み入るうなどとはしない。足を踏み入れたからといって刑罰があるわけではないのだが、そんなものが無くても神の祟りをもつとも畏れるこの国の人々が、わざわざ危険を犯してまで入るうとするはずがなかった。

異国人のキヌアとティツカだからこそ、畏れもなくこの場所に足を踏み入れることができたのだ。

「そのときはふたりで仲良く神の裁きを受けようじゃないか」

苦笑いしているワイナの横で、リヨケはどこか楽しげだ。

ふたりは、花芽を伸ばしている株の横の、なかなか立派な株に目をつけた。尖った葉の中心にほんの僅かだが、花茎が出ているのが見えた。

リユゼツランの葉の先には固く鋭い棘があり、不用意に近づけば傷だらけになってしまう。まずは鋭い棘が体に刺さらないように、丈夫な布を幾重にも巻きつけた。

株をしっかりと包み込んで棘を封じたあと、その根元を両側からふたりで掘り進んでいく。しかし根は相当に深く、なかなか容易には掘り起こせない。

だいぶ長い間黙々と地面を掘り進み、ふたりの手が痺れてきた頃、ようやく株が抜けた。土がこぼれ落ちないように根も布で幾重にも包む。巨大な株は巻かれた布の重さも加わり、かなりの重さだった。キヌアの部屋の裏手にある抜け穴の外まで運んだときにはふたりとも大汗をかいていた。

「これは大変な重労働だな。キヌアたちは大丈夫だろうか……」

リヨケが汗を拭いながら大岩の固まりのような株を見下ろして言った。

異民族たちが順々にクスコの郊外へと移動していく。キヌアも、ティツカと数人の侍女に従われて宮殿を後にした。

前もってティツカに作戦を話すとティツカはキヌアと同じように胸を叩いて言った。

「それくらい、お安い御用ですよ！」

しかし宮殿から離れて行くにつれ、逆にキヌアの中に不安な気持ち湧いてきた。

自分で提案しふたりの前では強がって見せたものの、果たして誰にも見つからずに宮殿に忍び込み、大掛かりな植え替えなどできるのだろうか。

無口になつて不安気な表情を浮かべているキヌアに気付き、横を歩くティツカが「大丈夫です」と慰めるようにキヌアの手を強く握り締めた。

シトウアの前日、宮殿では儀式に備えて宮殿に仕える者たちがせわしなく動き回っていた。宮殿中が上を下への大騒ぎだ。

召使いも、他の部族から移住してきたり、クスコとの戦で捕らえられてきた者たちはすべて街から出されるため、この日は給仕をする者がいつもの半分以下になってしまふのだ。それに加えて儀式の準備や皇族、貴族の身に付けるものの支度など、やることは倍になる。

「ちよつと手伝つておくれ！」

呼ばれて番兵たちも給仕の手伝いをさせられている。

貴族たちは、断食を終えた後に着飾る衣装を選ぶことに夢中だ。

宮殿では誰も彼もが忙しく、のんびりと中庭でくつろいでいる暇などない。しかも貴族たちが集う大広間や皇族の住まいとは離れている中庭にやってくる余裕のある者など、この日はいなかった。

「ワイナ……明日の支度は済んだか？」

廊下ですれ違ったワイナにリョケが声を掛けると、ワイナは「あと少しです」と頭を下げた。

これが二人の合図だった。シトウアの前日の一番忙しい時間帯に、杭を抜いてしまおうと話合ったのだ。

合図を交わしたあと、ふたりはそれぞれ頃合いを見計らってリュウゼツランの囲いの前に行った。

リョケが囲いに一番近い廊下の隅に立って見張り、その間にワイナが杭を一本ずつ揺らして固まった地面をほぐしていく。杭は深く突き刺さったまま数年を経ているので、はじめはビクともしなかった。

リョケとワイナはときどき交替しながら、杭の根元の土を少しずつ緩めていく。何度かそれを繰り返していくとようやく杭が大きく揺れるようになってきた。土が緩めばあとは早い。ワイナが手応えを感じて杭の根元を掴んで引き上げると、あれほど固く地面に食い込んでいたものがいとも簡単にするりと持ち上がったのだ。

一本目が抜けたちょうどそのとき、ひとりの若い召使いが、不慣れで迷ったのか、リュウゼツランの裏側の廊下を渡って行こうとした。

「おい！ ちょっと来てくれ！」

リョケが慌てて呼び止め、取るに足らないことを訊いた。召し使いはひどく恐縮してそれに莫迦丁寧に答えている。「ありがとう。大広間に行くにはこちらの方が近いぞ」と親切に教えてやると、召し使いは勢いよく頭を下げ、飛び上がるように踵を返して走り去った。

「危ないところでしたね。これからここを通る者がいなければいいのですが」

重い杭を持ち上げたためか、冷や汗が分らないが、額をぐつしよりと濡らしたワイナがりヨケの傍に寄ってきて言った。

「いや、明日の準備はもうそろそろ終わり、それぞれ最後の食事を済ませたら大広間に向かう頃だ。もうここに用がある者はいない。それより杭を早く抜いてしまわないとわれわれがいないことが分かっってしまうぞ」

宮殿内が静かになり始めた頃、今度はふたりで一緒にあと二本の杭に手を掛けた。ひとりで奮戦していたときよりずっと早く杭は抜けた。

三本の杭と足踏み鍬を囲いの中に隠し、ふたりの作業はおしまいだ。

「では、キヌアさまとティツカの無事を祈りましょう」

「ああ、あとはあのふたりに任せて、われわれは成功を祈るしかないな……」

不安を抑えきれず、ふたりはクシのリウゼツランを何度も振り返りながら中庭を後にした。

翌日 —— シトウア当日 —— の朝早く、ティツカは、郊外の別邸でキヌアの身の回りの世話をする侍女たちを集めて告げた。

「お方さまは慣れない環境でお疲れになったのか、お加減が悪いようなの。あまり大勢が出入りするとますますお疲れになると思うので、今日は私ひとりが付いてお世話をするわ。静かに休みたいだ

くために、他の者はお部屋に近づかないでほしいの。その代わり、今日はあなたたちもお世話を忘れて休息を取るといいわ」

キリスカチエの者がこれを聞いたらキヌアに限ってそんなことはあり得ないと疑うだろう。しかしケチュアの各地方から寄せ集められた侍女たちは、不審に思うどころか、思わぬ休暇をもらえて喜んだ。

日が落ちるころにキヌアとティツカはそつと別邸を抜け出した。クスコは周囲を緩やかな山や丘に囲まれた盆地である。従って郊外といえどもクスコの街を見下ろす高台の上かそれを越えたところになる。

キヌアの仮住まいのある丘からもクスコの街が一望できた。しかもちょうど宮殿の真裏に当たるその丘からは宮殿内の様子がよく見えた。

いつもは回廊をせわしなく行き来している召使いの姿も、中庭の隅で歓談している貴婦人の姿も見えない。

夕暮れが迫り、普段ならあちらこちらにたいまつ灯りが灯されて仄明るく浮かび上がる宮殿は、中央の大広間の窓から僅かに明かりが漏れているだけで、ほとんどが闇の中に沈んでしまった。

宮殿だけでなく、クスコの街全体も闇の中で静まり返っている。

キヌアとティツカは手を取り合つて、月明かりを頼りに裏手の抜け穴へと下りて行った。

抜け穴の脇に大きな麻布に包んだりユウゼツランの株が置いてある。暗がりの中でそれを探り当てると、ふたりで両端を抱えて持ち上げた。

布で包まれて縛つてあるものの、丈夫な葉が大きく広がっているので持ちにくく、ずっしりと重かった。ふたりは慎重に株を抱えて中庭まで運んで行った。

中庭に立つと、月の青白い光に照らされて周囲を囲む宮殿の廊下や建物が鮮やかに浮かび上がって見えた。しかし宮殿の中は不気味な静けさが支配していた。いつも人が出入りしているところに誰もいないということが、こんなにも人を不安にさせるのだろうか。

キヌアは以前『天の女王』に従って遠征した地で目にした滅びた都の跡を思い起こしていた。

クシのリユウゼツランの囲いまで来ると、裏側の三本の杭が抜かれて囲いの中に隠されていた。その横には足踏み鍬が二本置いてある。普段囲いに阻まれて目にするのがなかったクシのリユウゼツランは、立派に生長して手狭な囲いを押し退けようとするかのように大きく葉を広げていた。

「随分と時が経ったのね……」

キヌアが呟いた。

ふたりは持つてきた株を傍らに置くと、クシのリユウゼツランに棘よけの布を何重にもかけて覆い、その根元を足踏み鍬で掘り始めた。リョケたちが手こずったのと同じく、キヌアとティツカも深い深い根の先にたどり着くには時間がかかった。

鍬を踏みながらキヌアが言った。

「クシは無事でいるかしら」

「大丈夫ですよ。クシさまのことですから、どんな環境でも生き抜いていらっしやいますよ」

「きつと、そうね。これがうまくいってリユウゼツランに花が咲けば、クシを探すことができるんですものね」

キヌアは鍬を踏む足に力を込めた。
かなり深く掘り進んで、リュウゼツランの株が揺れ始めた。

そのとき突然、街の方が騒がしくなった。

悪霊払いをする呪術師たちが、クスコの街を駆け回りながら宮殿に近づいてきたのだ。その声は断末魔の叫びのようだ。叫び声が近くなってくると同時に、強烈な香の香りが漂ってきた。

その声や香りが、キヌアの深い記憶の底に眠る恐ろしい光景を蘇らせた。キヌアはひどく不快になり、思わず耳と鼻を塞いでうずくまっていた。

「キヌアさま、どうしたのですか？　しっかりして。早くしないと中庭にも悪霊払いがやってきます」

キヌアは落ち着くためにゆっくりと息を吐き出すと、まだ早鐘を打っている胸を押さえながら立ち上がった。

株の根元を両側から引つ張ると、リュウゼツランはすりと抜けた。土がこぼれないように根元にも布を巻いて縛る。

次に代わりの新しいリュウゼツランの根の覆いを解いて慎重に穴に差し込み、周りから土をかけ、踏み固めてしっかり固定する。

最後に棘避けの覆いを解くと、花芽を持ったリュウゼツランの葉は大きく広がり、以前からそこに根を生やしていたかのように囲いの中を占領した。

作業を終え、足踏み鍬を元のように隠して、ふたりはクシのリュウゼツランが入った大きな包みを持ち上げた。

叫び声が宮殿に入ってきて中を駆け回り始めた。

本当は今すぐにでも走って逃げ出したいほどだが、リュウゼツランは重いうえに、包みがほどけて土が落ちれば、リュウゼツランに

手を加えたことが分かってしまっただろう。ふたりは、はやる気持ちを抑えて慎重にリュウゼツランを運んだ。

やっとのことでキヌアの部屋の裏の抜け穴まで辿り着いた。振り返ると中庭の辺りがぼんやりと明るくなっているのが分かった。悪霊払いたちが松明を掲げて中庭を走り回っているのだ。香の香りと松明の焦げた匂いが宮殿中に立ち込め、キヌアたちのところまで漂ってくる。

「悪霊払いたち、杭が抜けていることに気付くかしら……」

ティツカが不安になって呟いた。

「大丈夫よ。あの者たちは駆け回ってすぐに次の場所に移るから、囲いの裏側までは行かないわ」

そう言ってティツカの手を握りしめるキヌアのその手のほうが、じつとりと汗をかいて冷たくなっていた。

シトウアの祭りもいよいよ最後の日を迎えた。

宮殿の大広間で三日間何も口にせず祈り続けていた貴族たちがぞろぞろと外に出てきて、ようやく水を一口飲んで喉を潤し、太陽神殿の前まで参拝に行く。宮殿から神殿まで長い列ができた。

リョケとワイナは移動する人々の列から抜け出した。

三日振りに浴びた太陽の光と空腹で足元がふらつく。ふたりはまるで酔っ払ったような足取りでようやく中庭にやってきた。

杭を抜いた場所から囲いの中を覗くと、リュウゼツランの周りに掘り返した新しい土が見えた。傍らの足踏み鍬には乾いた土がこびりついている。そして植えられたリュウゼツランの中心には小さな

花茎が覗いているのが分かった。

「キヌアは無事に植え替えを済ませてくれたようだな」

それを確かめた途端、二人に力が湧いてきた。

残り少ない力を振り絞って杭を持ち上げ、地面に突き刺し、周囲を踏み固める。三本の杭を元通りに立て終わると、掘り返した土が目立たないように草を掛け、使った足踏み鍬を片付けておしまいだ。

「無事に済んだな。あとはリュウゼツランの花が咲くのを待つだけだ」

「では、クシ皇子の無事を祈願に行きましょう」

リョケとワイナは肩を叩き合ってお互いの健闘を称え、太陽神殿へと向かった。

10、 リュウゼツランの花

10、 リュウゼツランの花

谷の生活を始めたロハたちに、新たな問題が突きつけられた。

ティトーの畑を押し流した土なだれが、ロハの留守の間にあちこちで起きていたのだ。長年畑として開墾してきた谷の土地がもろくなり、どの場所で土なだれが起きてもおかしくない状態であった。畑に出来る土地が限られれば、収穫できる作物の量も当然限られてしまう。今年の収穫と倉庫に蓄えておいた分を合わせれば、かろうじて当面は賄えるが、やがて確実に食糧が足りなくなれることを誰もが見過すことができた。

さらに、乾季の終わりに高原で行われた求婚の宴以来、新しい家庭がいくつか出来た。

その家庭に子どもが生まれれば人口が一気に増える。この先も谷の収穫で賄うことはどう見積もっても不可能であった。

ロハの男たちは、夜ごと集落の中ほどに設けられた広間に集い、今後のロハの暮らしについて話し合っていた。

「新しい家庭に子どもが生まれれば、もっと収穫が必要になる。この狭い谷でこれ以上の土地を開墾するのは難しい。来年は新しい土地を見つけて、最初から拓かなければいけないだろう。」

もう少し南へ行けば広い谷があるのではないか……」

長老が言った。続いてカチカリヤが口を開く。

「そのことと関係して……」

以前平原に迷い込んできた奴隷の男だが、【くしゃみ】はすぐ近くから逃げてきたのだろうと言っていたよな。私はあれ以来ずっと気がかりだったのだ。村を滅ぼして人をさらっていくような凶悪な部族がすぐ近くにいるということが。

どうだろう。この際、この谷の農地もあの平原の村も捨てて、どちらにも新しい土地を探してみては……」

カチカリヤの意見にほかの者が眉根を寄せた。

「それにはリヤマたちも率いていなくては。大移動だぞ。今までと同じような暮らしができる土地を見つけるのにも時間がかかるだろうし、そこで新たに家も倉庫も作らねばならない。生活できるようになるにはどれくらい掛かるのか……。大変なことだ」

「そうだ。新たな谷を見つけるだけで済ませておいたほうがいいのではないか。季節ごとの移動は今まで以上に時間が掛かるが、平原の村まで捨てるよりは負担が少ない」

「しかし、凶暴な部族の影に怯えながら暮らすのは御免だ。苦労をしても遠くに移る方が安心ではないか？」

ロハにとっては一大決心だ。皆腕を組んで考え込んだ。

その『凶悪な部族』は本当に近くに迫っているのか、今のところ憶測でしかない。見たこともない『脅威』に備えて負担の大きい大移動をする必要があるだろうか。しかしひとたびその『脅威』が襲って来たならば、ロハは滅んでしまうかもしれないのだ。

クシは黙って皆の意見を聞いていたが、皆が言葉に詰まると静か

に自分の意見を告げた。

「あの『男』が迷いこんできたことは事実なのだ。そしてあの男が捕虜として捕らえられていたということも。この先、ロハに危険が及ばないと言い切れない。」

大移動して新しい土地を拓くには相当の覚悟が必要だ。しかしわれわれは協力して倉庫を作ったではないか。ロハが力を出し合えば、新しい村を作ること難しいことではない。」

クシの一言で、今まで意見を衝突させていた男たちがみな深く頷いた。

「そうだな。皆の力を合わせれば、今よりも立派な村を築けるかもしれない。われわれはこの一年でその方法を学び、実践してきたのだから。」

長老がひとりひとりの顔を見ながら言った。

「これは長い長い旅になるぞ。みな覚悟を決めるのだ。乾季に高原に戻り、十分に準備を整えたら出発じゃ。」

その変化に気付いたのは、キヌアの教室で一番年若い少年だった。

「おや、あの囲いから出ている細い木はなんだろう。」

少年が叫ぶと、近くにいた生徒たちは一斉に手を止めた。みな少年の指差すほうを見つめる。

稽古をしている場所とは反対の中庭の隅に木の囲いがあり、その囲いの中から細い一本の『木』が伸びている。

その囲いが何のためにあるものか、中に何が入っているのかを少年たちは知らない。毎日目にするその木の囲いには、昨日までそんな木は無かったはずだが……。

その騒ぎに、ほかの少年たちも稽古の手を休めて「なんだ、なんだ」と見物に来了。突然生徒たちが稽古を止めて騒ぎ出したので、キヌアが彼らを注意しようとやって来た。

「キヌアさま、あの囲いの中から細い木が生えてきましたよ」

最初に発見した少年は得意げにキヌアに報告した。彼の指差す方を見て、キヌアははっと息を呑んだ。

その細い『木』は、リュウゼツランの花茎だった。

春分に植え替えたときに僅かに出来ていた花茎は、雨季の半ばになつて一気に空を目がけて伸び始めたのだ。

リュウゼツランの花茎はやがて人の何倍もの高さに伸び、四方に枝を伸ばしてその先にびっしりと蕾をつける。そして一斉に花開くのだ。キヌアたちの植え替えたリュウゼツランはちゃんと根付いて花をつけようとしていた。乾季が訪れる前には開花するだろう。

「クシが帰ってくるわ……」

リュウゼツランを見つめながらキヌアが呟いた。

「本当ですか？」

クシのことをよく知る年長の少年たち、そして教室を卒業して今は指導する立場にある若者たちが、それを聞いて興奮した。彼らに

とつてクシは未だに憧れの存在だった。幼い少年たちもその噂を年長の者から聞かされていて、憧れている者も多かった。

「ええ、あの枝に花が咲いたらクシは戻ってくることができるのよ。みんな！」

一斉に歓声が上がった。

「キヌアさま、花が咲くまで毎日私たちで見守りましょう」

誰かが提案した。

「そうね。でもくれぐれも稽古はおろそかにしてはだめよ」

キヌアが笑って言うと、素直な少年たちは揃って元気良く「はい！」と返事をした。

クシのリユウゼツランに花が咲きそうだと聞いて、宮殿中が大騒ぎになった。十年以上かかるはずのリユウゼツランの花が三年で咲こうとしているのだ。

神官たちは「奇跡が起こった」として、クシは神の申し子ではないかと噂した。

ウルコに不満を抱く貴族たちは、「神がクスコを救うためにクシ皇子を呼び戻してくださった」と言って歓喜した。

ハナンの者に決断を迫られて苦悩していたアマルは、自分の切実な願いが天に届いたのだと思った。

悔しいのはウルコだ。ようやく自分の世になり、安穩と暮らしているというのに、それを脅かす邪魔者がこのような短期間で帰ってくるとは。リユウゼツランを切ってしまうおうかとも考えたが、多く

の者が開花を待ち望んで見守っている状況で、それをするのは不可能だった。

それぞれの期待や思惑を背負ったリュウゼツランは日に日に開花へ向けて生長していく。

か細い『木』は、太く逞しく変わっていった。その太い幹からいくつもの枝を天に向かって手を広げるように伸ばしていき、やがてまるで大木を思わせるような立派な姿となった。その枝の先に付いた無数の小さな膨らみが段々と大きくなっていく。

リュウゼツランが育っていくのと同時に宮殿ではクシを迎える準備がちやくちやくと進められていった。

雨季が終わる頃、天高く伸びた花茎の先にびっしりとなっていた蕾のひとつが美しい黄色の花を開いた。

皇帝もウルコも、神官や大臣や將軍たちもそれを確認し、すぐさまクシの搜索隊が用意された。

搜索隊を率いていくのはワイナだった。ワイナはクシの黄金の耳飾りと新しい服を用意して、遠い西の地へと出発した。

以前はひとりで広い荒地を探したので限界があったが、今度は大勢の兵士がいる。西に向かうワイナ自身も、それを見送るリヨケもキヌアも、クシは必ず見つかる信じ、願っていた。

平原に戻ってきた口八たちは大移動の準備を始めていた。

倉庫に蓄えておいた食糧や道具をまとめ、それぞれの持ち分を決める。長旅に耐えられるようなリヤマを見分けて、十分に餌と水を与え、体調を整えさせる。

今まで経験したことのない大移動に、誰もが少なからず不安を抱いていたが、それ以上に新天地を目指すことに希望を持つとうとしていた。

明るい歌声やおしゃべりは止むことがなく、朝早くから夜遅くまで、ロハの村はまるでお祭りのように盛り上がっていた。

準備は整った。

最後は、二度と戻ることのない泥レンガの家を壊して出発だ。

ロハたちは出発までの僅かな間に、長年暮らした家に各々心ゆくまで別れを告げていた。

「この家ともお別れか……」

半期に一度とはいえ、生まれてからずっと過ごしてきた家を捨てるのは切ないものだ。オルマは煤のこびりついた泥レンガの壁を撫でて感傷に浸っていた。

しばらく無言で壁を撫でていたオルマが、ふとクシを振り返って訊いた。

「【くしゃみ】は本当にいいのか？ あたしらと南へ移住してしまつたら、もう二度と故郷へ帰ることができないんだぞ」

クシは平原に戻ってくる間、ずっとそのことを考え続けていた。クスコを離れてまだ三年だ。刑期が明けるまでにはその何倍もの月日がかかる。その長い月日をたったひとり、この平原で過ごしていくことなど考えられない。

クスコにもキヌアにもまだ未練はあるが、ロハの民に近づいてきている自分は、きつと徐々にその記憶が薄れていき、あと数年すればすっかり忘れられるのだろう。

「ああ、もう決めたんだ。皆とともに行くよ」

クスコから持ってきた唯一の物、薄汚れた石斧を眺めながら、クシも故郷に別れを告げようとしていた。

11、旅立ち

11、旅立ち

「もう無理です。引き返しましょう」

ワイナを補佐して搜索隊を率いてきた副隊長が訴えた。

管理下にある西の外れの集落を出てからもう数日。大勢の兵士たちは広大な荒地をいくつかの部隊に分かれて探し続けてきた。四方八方に散った部隊が戻ってくると、どの部隊の報告もまったく同じだった。

「彼方に見える地平線まで見渡す限り何もない大地です」

どの方角も同じ光景だということはこの広大な荒地が途切れる場所は無いに等しい。疲労も手伝って日を追うごとに兵士たちの意欲もそがれ、ただ惰性で荒地を彷徨うようになっていた。食糧ももうすぐ底を尽きそうだ。

さらに昨日から砂嵐が吹き荒れ、それはさらに激しくなっていた。搜索隊の兵士たちは散々彷徨ってほとんど方角も分からなくなつた拳句、窪地にさらに深く穴を掘って潜り込み、かろうじて砂嵐をやり過ごしていた。

彼らの無事を優先するのなら、嵐が落ち着いたときを見計らって引き返すしか方法はないだろう。

—— 確かにこの辺りで廃村を見た。せめてそこまで辿り着ければ何か手掛かりが掴めるかもしれないものを ——

ワイナはそう思っていたが、曖昧なその可能性のために多くの兵士を犠牲にするわけにはいかなかった。

「そうだな。仕方がない。砂嵐が止んだら急いでこの荒地を抜け出そう」

――皇子はとうに亡くなったのだ！――

副隊長に指示をしながらワイナは、自分の気持ちに折り合いを付けるために心の中でそう断定した。

数日激しく吹き荒れた嵐は、ある朝ぴたりと治まった。兵士たちはやつとのことで窪地から這い出すことが出来た。

ワイナは兵士たちを纏めると、引き返す方角に見当を付けようとするりと辺りに視線を走らせた。

彼らを取り囲む地平線を一周見回して、ふとある方角に他とは異なる色を見つけてまたそこへ視線を戻す。そしてじっと目を凝らした。

茶色く乾いた大地の遥か先に碧い筋が走っているのが見える。見渡す限りの乾いた薄い色の中で僅かではあるがそこだけが確かに濃くはつきりとした色に染まっているのだ。

ワイナは叫んだ。

「見つけたぞ。おそらくあれは、私が以前、廃村を見た場所の近くにあった湖だ。

私の当て推量に付き合ってもいいと思う者はあの湖まで付いて来てほしい。無理強いはいしない。都へ帰りたい者はこのまま帰っても良いぞ」

しかし兵士たちの中に引き返そうとする者はいなかった。

僅かでも目当ての物が見つかれば意欲は湧いてくるものだ。今までもよりもずつと早足で、いやいつ砂嵐が戻ってくるかもしれないという恐怖も手伝って、全員がほとんど全力で湖まで駆け出した。

湖までやってくるとワイナの中の忘れかけていた記憶が一気に蘇ってきた。

「そうだ！ この岸をぐるりと回って対岸に行き、あの先の丘を上り詰めたら眼下に広い草原と打ち捨てられた家々が見えた！」

湖の畔で小休止を取っている隊員たちを残してワイナはひとり、湖を回ってその先に何があるのかを確かめに行った。

口八たちはそれぞれの家を壊し始めた。大きめの石や足踏み鍬の先で思い切り打ち付ければ、今までどんな強風にも耐えてきた泥レンガがあつさと碎けて散った。

口八の歴史を見つめてきた泥レンガの家は次々と崩されて平原の土に還っていく。

広大な平原は、もとの自然のままの姿に戻りつつあった。

自分たちの家を崩し終わると、最後に倉庫の前に集まった。これを崩し終えたら、新しい土地を求めて出発するのだ。

男たちが一斉に倉庫の壁を石で叩いたが、家の壁のように簡単に砕くことができなかった。建てばかりでそれほど風雨に晒されたことのない倉庫の壁はとても頑丈で、どんなに叩いてもヒビひとつ入らない。

しばらく虚しい抵抗が続けていた男たちは、やがて疲れて倉庫の壁に背をもたせ掛けて周囲を取り囲むように座り込んだ。女や子どもも集まってきた、すべてのロハが倉庫を取り囲んで休息を取った。彼らの中心に堂々と聳え立つ倉庫を眺めているうちに、皆がこれを壊してしまうのは忍びないと思い始めていた。

そのとき、平原の向こうから見慣れない格好をした一団がやってくるのが見えた。

休んでいたロハたちが一斉に立ち上がった。男たちは手にした鍬や石を握り締めて警戒し、子どもたちは大人の背後に素早く身を隠して怯えた。

クシは石斧を握り締め、ロハたちの前に進み出て様子を窺った。彼方から現れ、まっすぐにこちらに向かってくるその一団はかなり多勢だ。しかも武器を携えているようだ。もしかや奴隷の男が囚われていた国の者なのか。そうならばもはやロハが助かる道はない。石斧を握るクシの手に汗が滲んで、心臓は早鐘を打った。

しかしその姿がはつきりしてくると、クシはハッと息をのんだ。現れた一団の服装は故郷クスコのそれだ。そして彼らの先頭に立つてやってくるのは懐かしい友人ワイナではないか。クシは石斧を放り出して駆け寄って行った。

「ワイナ！」

「クシ皇子！」

ワイナも驚いたように叫んで走り寄ってきた。ワイナに従って後ろの兵士たちも一緒に駆け出す。クシはワイナに飛びついてしっかりと肩を抱いた。

「よくここにすることが分かったな」

「必ず会いに来ると約束したではないか。しかし前に一度ここへ来たときは誰もいなかった。どんなに探したか」

「そうか。私は遊牧民の彼らとともに別の場所に移動して生活していたんだ。心配をかけてすまなかった」

クスコに別れを告げる決心をしたクシだったが、ワイナに会った途端、クスコの街に帰りたと思う気持ちが膨らんできた。しかしロハたちとの約束を考えるとその気持ちは抑えなくてはいけない。それにワイナも無事を確かめに来ただけであって、顔を見たらすぐに戻るつもりなのだろう。

「会いに来てくれてとても嬉しいが、私はこのロハの民たちと南へ移住すると決めたのだ。ここにはもう帰ってこない。私は彼らがいだからここまで生き延びて来られたのだ。これから長い間、ひとりこの土地でクスコの迎えを待っていることなど考えられない」

「何を言うのだ、皇子。咲いたんだよ。リュウゼツランの花が！」

クシは一瞬、耳を疑った。

「なんと言った？」

「リュウゼツランが咲いたのだ。皇子の罪は赦された。われわれは

皇子を迎えに来たのだ」

「本当か？」

ワイナはクシの肩を掴んで何度も頷いた。

兵士のひとりがクシの足許に跪きクシの黄金の耳飾りと新しい服を差し出した。クシは複雑な気持ちでそれを受け取った。

クスコには帰りたいが、自分を必要としている口八たちを裏切ることはいできない。

服を受け取っても浮かない表情で佇んでいるクシを見て、カチカリヤが近づいてきた。

「【くしゃみ】、言葉は分からないが、この者たちはお前の国の仲間なのだろう？ お前を迎えに来たのだろうか？ 口八のことは心配いらん。お前に教わったことは皆決して忘れない。【くしゃみ】の知恵を活かしてまた立派な村を築いてみせる」

カチカリヤはクシの背中を叩いて微笑んだ。

クシは口八たちを振り返り、ゆっくりとひとりひとりを見回した。口八たちはクシと視線が合うと皆笑顔で頷いた。

長老も寄ってきてカチカリヤの後押しをするように言った。

「クシ、故郷に帰りたいという強い願いが天に届いたのだ。良かったではないか。口八はクシが率いてくれたからこうしてまとまることができたのだ。われわれはもう大丈夫だ。あとはクシが望む道に行くのだ」

それを聞いてクシは口八の皆に向かって深く頷くと、渡された服

を手に倉庫の中に姿を消した。

しばらくして現れたクシの姿に口ハの者たちは驚きの声を上げた。頭には立派な白い羽根の付いた頭帯を巻き、両耳に耀く黄金の耳飾りを提げ、鮮やかな色の美しい絵柄をあしらった服に身を包み、長いマントを羽織ったクシの姿は、口ハたちの知る【くしゃみ】とはまるで違っていたからだ。

ワイナと兵士たちはクシの前で一斉に跪き、深々と頭を垂れた。口ハたちがその様子を見て、ざわざわと騒ぎ出した。

「【くしゃみ】は一体、何者なんだ？」

「どこかの王だったのか？」

オルマはすっかり変わってしまったクシの姿を、淋しそうな顔で見つめていた。

クシはオルマの方に行くと、今まで着ていた口ハの服を手渡しなから言った。

「オルマ、一緒に南へ移住すると言ったのにすまない。やはり私は故郷に帰ることにしたよ。」

オルマは最高の友だった。私を救ってくれたのも、口ハの生活を教えてくれたのもオルマだったな。オルマのお蔭で私は口ハの仲間になって楽しく暮らすことができたのだ。感謝している。

故郷に帰っても、決してオルマのことは忘れない。それに約束はちゃんと覚えているからな」

真剣にクシの瞳を見つめていたオルマだったが、突然、笑い出すと大声で言った。

「莫迦正直だな【くしゃみ】は。あれは冗談だよ。そんな約束は忘れてくれ。」

「どうやら【くしゃみ】とあたしは生きる世界が違うらしい。それにあたしらがどこに住み着くのかなんて分からないだろう。口八に帰ってくるかどうかも分からない【くしゃみ】を待っているなんてご免だね。新しい村ができたさっさと結婚しちまうよ！」

オルマはいつにも増して豪快に笑った。それが強がりであることはオルマの瞳に輝いている涙が物語っていた。
クシはそんなオルマの肩を強く抱き寄せた。

「どうか無事に新しい地に着けるように。そして幸せに暮らせるように祈っているからな、オルマ」

「【くしゃみ】こそ、幸せになるんだぞ。自分の気持ちに正直にならなくちゃ駄目だからな！」

オルマは『さあ、行け』と言うようにクシの体を突き放すと、人々の陰に隠れてしまった。

クシは順々にチャキ、ポコ、カチカリヤ、長老の肩を抱いて感謝を述べていった。

そして口八の皆に向かって感謝と別れの言葉を告げた。

「さあ、皇子。出発だ」

ワイナが、名残惜しくてなかなか出発の決意のつかないクシを促した。

クシは三年ぶりにクスコへの帰路についた。大声を張り上げて別

れを告げる口八たちを何度も振り返りながら、クスコのある東の方へと去って行った。

クシの姿が小さくなったとき、オルマがやっと人々の陰から現れて、涙でくしゃくしゃになった顔を隠しもせず、両腕を大きく振って叫んだ。

「【くしゃみ】」。もう二度と戻ってくるんじゃないぞー」

クシの姿がすっかり見えなくなると、長老は口八の皆に告げた。

「この倉庫はこのままにしておこう。二度とここに戻ってくることはないが、ここでわれわれが暮らしていた標^{しるし}として、クシとともに口八の皆が力を合わせて作り上げたこの倉庫を残しておくのだ」

口八たちは皆頷いた。

そしていよいよ新天地を目指し、長い長い旅へと出発した。

ワイナの一行はクシを連れ、数日をかけて、遙か西の果てからようやくクスコの近くまでやってきた。

クスコが近くなってきた頃、クシはその辺りの光景に異様なものを感じた。

自分の記憶にある都の郊外の風景は、緩やかな丘やその間の平地も一面、丁寧に耕された畑が覆い、美しい模様を描いていた。

乾季の休耕期とはいえ、集落では干し芋を作る人々や、刈り取った家畜の毛を紡いで機を織る娘たちが忙^{せわ}しなく働いているはずだが、今眼前の一帯に広がる畑は明らかに手入れがされておらず、打ち

捨てられて久しいのか、どこもおびただしく雑草がはびこっている。そしてその周囲には行き交う人の姿はまったく見られなかったのだ。

ところどころに人の住まいであつただろう小屋が見えるが、どれも無人のあばら家のような。変わり果てた光景に何故か不安を覚える。

やがて一行は、クスコの入り口となる丘の頂上にやって来た。

視界が一気に開け、その麓には多くの建物が整然と立ち並ぶ都の堂々たる姿が現れた。

無数の石畳の通りが街の中に複雑な線を描き、光沢のある藁葺きの屋根がその形をなぞるように並んでいる。

そのとき、今まで薄曇りだった空の靄が途切れて太陽が顔を出した。

街に陽光が差し込むと、屋根に葺かれた艶のある藁、そこに施された派手やかな装飾、磨きぬかれた石の壁、多くの人の往来によって研磨された石畳、それらが一斉に反射し、耀き始めた。

丘から見下ろす街は金をあしらった巨大な織物の模様のようだ。

三年の間、夢でしか降り立つことの叶わなかった都、最後には別れを告げようとさえしていた故郷がいま目の前に広がっている。そしてもうすぐ帰り着くことができるのだ。

クシは胸が熱くなった。

しかしそこから街へと下って行くとしたとき、衛兵がやってきてクシたちを引きとめた。

「ここから先へは夜になるまで入ることはできません」

ワイナが「どういうことか」と問い詰めると、衛兵が答える。

「一度罪を犯した者が白昼堂々とクスコに入城することは赦されないと、皇帝陛下がおっしゃっているのです。人目を忍んで、日が暮れてから街に入っていたいただきます」

「皇子はもう罪人ではない。今更何を言うのか！」

ワイナが抗議したが、衛兵は頑として受け付けなかった。

一行が途方に暮れていると、どこからかひとりの男が現れてうやうやしく挨拶をした。

「クシさまですね。リヨケさまのご命令で郊外の館にご案内いたします」

男はクシたちを、クスコを見下ろす高台に立つ小さな館に案内した。

そしてクシだけを一番奥の間に案内し、告げた。

「ただいま遣いの者がリヨケさまをお呼びしてまいりますので、今しばらくここでお待ちください」

その部屋の小さな窓からもクスコの街並みが一望できる。クシは箱庭のような街を眺めながら、やっと帰ってきたのだという実感が湧いてくるのを感じていた。

しばらくしてリヨケが部屋に駆け込んできた。リヨケはクシを抱き締めて言った。

「良かった、クシ！ 無事だったのだな！」

「兄上、ご心配をおかけしました」

リヨケは見違えるように遅くなった弟を見て感激し、クシは少し老けてみえる兄を見て月日の長さを感じていた。

「街はお前の噂で持ち切りだ。『奇跡を起こした皇子、クスコの救世主だ』とな。」

騒ぎが起こるのを恐れて、クシが帰って来たら人目のない夜に入城させよとウルコが衛兵に命令したのだ」

「父上ではなく、ウルコが……。しかし衛兵は皇帝の命令だと」

「皇帝はほとんど公の場にお出ましにならないのだ。今、この国の決定権は皇太子にある。ウルコの命令は皇帝の命令に等しいのだ。今や、ウルコと彼を利用しようとする貴族たちが自分勝手な政治を行っている。」

ここへ来る途中で住民のいなくなった村を見たであろう。

お前も知っているとおり、貴族たちの糧は各々の所有する畑を農民に耕してもらい得られるものだが、毎晩のように宴会を開くウルコやその取り巻きは、今までの収穫だけでは賄えなくなったのだ。

勝手に広い土地を占有し、近隣の農民を自分たちの土地に連れて行って働かせている。抗議したくても出来ない民の間に大きな不満が溜まってきており、貴族の中にもウルコに反旗を翻そうという動きがある。

クシが帰ってきたことで、ウルコの失脚を望む民や貴族がますます活気づく。ウルコはそれを怖れているのだ」

クシは、留守の間にクスコに起こった変化を聞いて心を痛めた。

「伝統あるこの国が、いま大きく傾いていつている。誰かが救わなくてはならない。しかしそれには誰もが認める指導者が必要なのだ。クシ、多くの者がお前ならクスコを変えることができる^と信じている。いずれは皇帝にと期待している者も少なくない。お前が立ち上がってくれるなら、私もアマル兄上も全力を尽くそうぞ！」

クシはふたたび窓の外を覗いた。

先ほどの靄はすっかり消え、都を追われたあの日と同じく、外には澄みきった青空が広がっていた。

紺碧の空を背景にして朽葉色をしたクスコの街全体が浮かび上がって見える。

しかし、リヨケの話を聞いた後だからだろうか、いまのクシの瞳には、その色がくすんで生気を失っているように見えた。

「私はそのためにここに呼び戻されたというのですね。

クスコが私を必要としているのなら、私は命をかけてこの国を蘇らせ、この国を守っていきましょう」

窓の外を眺めながらクシは誓った。それは傍にいるリヨケにだけでなく、クスコの街全体に誓って言っているようだった。

その夜、闇に紛れるように、クシはクスコの街へと入って行った。国の運命を大きく左右する『救世主』がクスコに現れたことを知る者は、そのときほとんどなかった。

しかし暗闇に沈んだクスコの街に、人知れず小さなともしびが灯った瞬間だった。

11、 旅立ち（後書き）

第二章 完

クシの長い流浪の旅がようやく終わりました！
三章からやつと本題に入れます。

第三章のはじめは

人物紹介と第二章までのあらすじを入れて本編を一旦小休止します。
一週間ほど置いたら本編に入ろうと思います。

—— この場をお借りして ——

今まで評価をいただいた方、お気に入り登録してくださった方、
誠にありがとうございます。

ご期待に添える作品になるよう頑張ってまいります！

これまでの登場人物とあらすじ（前書き）

第二章が終わったので、これまでの登場人物とあらすじをまとめてみました。

これまでの登場人物とあらすじ

（登場人物）

●クシ●

ケチュア族の皇帝ビラコチャの三番目の嫡子。

才能豊かで、奔放な性格が、宮殿内だけでなく、都の市民の間でも広く知られ慕われている。

しかしその人気に嫉妬する義兄ウルコによって都を追われる。

流刑となった地で、ともに暮らす部族に秩序をもたらし、そこでも慕われる。

父の側室キヌアを武術の師として尊敬し、その裏で秘かな想いを寄せている。

●キヌア●

クスコの近隣にあり、有能な戦士が揃う小数部族キリスカチエの王女。

幼い頃から戦士として鍛えられてきたため、優れた腕前をもつ。

ケチュア族と同盟を結ぶため、老皇帝の側室となる。

クシとリヨケの発案で、若い戦士を育てる役目を与えられ、本領を發揮する。

クシの流刑の間に皇帝に認められ、皇帝の寵愛を一心に受ける存在に。

しかしそれが他の側室たちの嫉妬を買う。

●ウルコ●

亡き正妃の代わりに、後宮の権威を握っている皇帝の寵妃の息子。

皇帝によつて後継者に指名されている。

しかし武術の腕も、学もない。

才能に秀で、人々の人気が高いクシに嫉妬し、クシを貶める策略を練ることには余念がない。

老皇帝に代わつて実質的な政權を握るも、怠惰な治世で国は混乱に陥っていく。

●ビラコチャ●

ときの皇帝。クシの父。

若いときは勇壮な皇帝としてその名を広く知られたが、いまは年老いてその面影はない。

娘が孫のように若いキヌアを側室に迎え、はじめは避けていたが、やがて彼女に自分の母親の面影を重ね、毎夜キヌアの部屋へ通うようになる。

ほとんど隠居となつてウルコに全てを委ねている。

●アマル●

クシの長兄。ビラコチャの一番目の嫡子。

クスコの軍部を担う役職にあるが、争いを好まず、保守的で慎重な性格。

ウルコが悪政を行っていることで、周囲はアマルを筆頭に改革を起こそうとする動きが高まる。

●リヨケ●

クシの次兄。ビラコチャの二番目の嫡子。

陽気な性格で、ユニークなアイデアを打ち出すのが得意。

クシと仲が良いが、クシの才能を認め、蔭になつて支える。

父皇帝や兄アマルには不満を抱いている。

●ワイナ●

クシとともに成人したふたつ年上の貴族。

クシとは幼いころから仲が良い。

辺境の警護を自ら志願するなど、意欲的で向上心が強い。

クシにとっては最も頼れる存在。

●ティツカ●

キリスカチエからのキヌアの侍女であり、姉妹のような存在。

ケチュア族に遠縁のものがいるため、ケチュアの言葉が話せ、

はじめはキヌアの通訳としても活躍した。

いつもキヌアを陰で支える。

●天の女王●

キリスカチエ族の女王。キヌアの母。

●オルマ●

荒地を彷徨っていたクシを助けた遊牧民口ハの娘。

クシを想うがクシの心にキヌアへの想いがあることを鋭く見抜く。

●チャキ●

オルマの双子の弟。男勝りのオルマと逆に内向的な性格。

●ポコ●

オルマとチャキの父。

● アンコワリヨ ●

チャンカ族の少年。チャンカの遠征に初めて出陣し、そこで戦地の現実を知ることになった。

● キータ ●

チャンカ族の呪術師。古くから部族の命運を占って首領たちを支えてきたが、

不吉な運命を占ったために、投獄されてしまう。

● トウマイワラカ ●

チャンカの首領。

（その他の名称）

● クスコ ●

ケチュア族の国の都。周囲を緩やかな山に囲まれた盆地。

● ケチュア ●

クスコを治める部族。歴代皇帝のもとで近隣部族を統治下に入れ、クスコ周辺の一帯を広く治める大部族。

● キリスカチエ ●

ケチュア族と友好な関係にある少数部族。

老若男女誰もが有能な戦士であり、少数ながらも武力に長けた一族。

● ロハ ●

流刑になったクシが暮らしていた遊牧民。
厳しい環境で季節ごとに住処を変えて暮らしている。

●チャンカ●

ケチュア族には未知である西の地から勢力を拡げてきている部族。
寧猛な一族で、襲った集落を焼き尽くし、人々を惨殺し、生きて捕らえたものは生贄にする。

●ハナン（天）●

クスコの貴族を二分する派閥のひとつ。
現皇帝の派閥であり、ウルコやクシもこの派閥に属する。
ウルコがハナンの頂点にすることで、逆にハナンの威信が揺らぎ
もうひとつの派閥ウリン（地）の台頭を許す結果に。

●ウリン（地）●

初代から第五代までの皇帝を輩出したクスコの二大派閥のひとつ。
ハナンの無能な皇子ウルコが皇帝の代理となったことで、
自分たちに有利な政策を進めることができるようになった。

（第二章までのあらすじ）

ケチュア族の築いた都クスコ。ときの皇帝ビラコチャには三人の
嫡子がいた。

アマル、リヨケ、クシ。

とくに三男のクシは武術に秀で、賢く、宮殿では神童といわれ、
市民にもその名が知られていた。

十五になったクシはケチュア族伝統の過酷な儀式を難なく通過し、

成人する。

その勇姿に、都でのクシの人気は高まる。

成人の儀の翌日、老皇帝ビラコチャに、近隣部族キリスカチエの王女キヌアが側室として嫁いでくる。

キヌアはまだ十七だが、勇猛な部族キリスカチエでもとくに有能な戦士だった。

クシはキヌアの腕前に感服し、教えを請う。

それならばと、リヨケは広く貴族の子息を集め、キヌアに指導してほしいと提案する。

クシ、リヨケ、クシの友ワイナ、キヌアの侍女ティツカも手伝い、『キヌアの教室』が開かれる。

ビラコチャには三人の嫡子のほかにも側室たちとの間にたくさんの子がおり、そのなかで皇帝は溺愛する側室の息子ウルコを世継ぎとして使命していた。

しかし成人したクシを賞賛する多くの声にウルコは嫉妬し、その地位を脅かされるかもしれないと危惧する。

そして策略をめぐらせ罠にかけて、クシに罪をきせ、西の辺境に追いやることに成功した。

クシは西の荒地で彷徨っていたところを、季節ごとに住処を移動するロハという遊牧民に助けられ、ともに暮らすようになる。

厳しい生活が続けるロハの暮らしを目の当たりにし、彼らを助けようと知恵を出し、その習慣を変えていく。ロハの民は彼らを救ったクシを長に立てる。

辺境の地での暮らしでクシは、北西の大地から謎の部族の脅威が迫ってきていることを知る。

一方クスコの都では、年老いて表舞台に顔を出さなくなったビラ

コチャからウルコへと権力が移りつつあった。

しかしウルコの怠惰な政治は、一部の貴族の私腹を肥やす結果となり、不満を募らせた貴族たちはアマルに革命を起こして政権を手に入れるようにと迫る。

アマルは平和裏に事を解決するために、求心力をもつクシが必要だと考える。

その考えを受けてリヨケはクシを呼び戻す計画を練り、キヌアとワイナの知恵を借りて、クシの刑期を計るリュウゼツランを早く開花させることに成功する。

三年間、西の辺境に追いやられていたクシは、ようやく罪を赦され、故郷に戻ってくる。

これまでの登場人物とあらすじ（後書き）

1、帰還

1、帰還

寝返りを打つと同時に手が石壁の冷たさに触れて、クシは眠りから一気に引き戻された。

見開いた眼に飛び込んできたのは高い藁葺きの天井とそれを支える無機質な石積み。高い位置に開けられた小さな窓から朝の光が細く差し込んで石壁に小さな台形型を映し出している。

横たわる背中に藁の柔らかさや暖かさがないことで、クシは自分の居場所をようやく実感した。

「帰ってきたのか……」

慣れ親しんだ口ハの小屋でないことが嘘のようだ。寂しさと安堵が同時に込み上げてきた。

しばらく仰向けになって天井を眺めていたクシの耳に、鳥のさえずりとともに、微かに切れの良い掛け声が響いてきた。ひとりではなく大勢の若く元気な声。

その声を耳にした途端、自分もその中で声を上げていたひとりであつたことが、ついこの間のことのように思えてきた。

クシは飛び起き、簡単に身支度を整えると部屋を飛び出した。

中庭の手前までやってきて回廊をぐるりと回り、自分の運命を決めたリユウゼツランが植えられている囲いの前にやってきた。

高い木の杭を遥かにしのぐ太い茎が空まで伸び、そこから四方に枝を拡げた立派なりユウゼツランは、下方の枝から枯れてきてはいるが、天に聳える梢には鮮やかな黄色い花が一斉に花開いている。

クシはその美しさに思わず溜め息を漏らした。この花に喚び戻されたのだと思うと神聖な宿命を感じずにはいられない。

振り返って囲いに背を預け、そこに腰を下ろすと、賑やかな声に包まれている中庭を眺めた。

活気のある声は中庭中に響き渡っている。クシが見ていることには誰も気付かず、みな稽古に夢中だ。そこでしばらくの間、黙ってその様子を眺めることにした。

以前よりもかなり人数が増えている。教わる少年の数も、指導している者の数も以前の倍近くになっている。

クシがいた頃に習っていた少年たちは、もう成人して今度は教える側になっているのだ。その指導者たちも、さらに自分の技を磨くため、あちこちで合わせ稽古に励んでいた。

皆体は逞しく鍛えられていて、真剣な表情で稽古に取り組んでいる。

「この国の危機に立ち向かえる者が増えたのだな」

姿の见えない脅威にさらされている西の地の異変がクスコにもやっつてこないとはいえない。そんな漠然とした不安を抱いていたクシは、頼もしい彼らの姿に救われた気がした。

「もしかして、クシ皇子では？」

ひとりの若い指導者が、中庭の隅にしゃがんでいるクシに気付いて走り寄ってきた。クシが彼の方に顔を向けると、彼は興奮して叫んだ。

「やっぱり、クシ皇子ですね！　あまりにも変わられたので最初は分かりませんでした。」

よくぞご無事でお戻りになりました」

以前、クシが稽古をつけたことのある少年だ。

クスコを出たときにはクシもまだ華奢な少年だった。しかし西の過酷な自然の中で暮らした三年間が、彼の体躯を大きく変えていた。もちろん成長期であったため、背は見違えるように伸び、それに伴って四肢も伸びていた。加えて大自然の中で生き延びるために彼の身体はさらに逞しい骨格を作り、しなやかな筋肉を全てに無駄なく付けたのだ。高原の強い日差しが彼の皮膚を艶やかな暗褐色に染め、常に危険を察知するための習慣で、瞳は鋭く輝いていた。

少年クシの姿しか知らない者が、一目見ただけでは分からないのも無理はない。

驚いたように叫ぶ声を聞いて、中庭の者が一斉に手を止めてこちらを見た。

悪さを咎められた子どものように、クシはバツの悪い顔で遠慮がちに立ち上がった。

その途端、中庭から歓声が上がる。生徒たちも指導者も、わらわらとクシの周りに集つてくると、口々に「よくお戻りになりました」「ご無事でなにより」と、クシの帰還を喜ぶ言葉をかけた。

まだ年少の者はクシを見上げてぽかんと口を開けている。幼い彼らは教室が開かれた当初のクシの人気など知らない。しかし、その頃よりも逞しく威厳を増したクシにはどの指導者にもない迫力が備わっていて、初対面の彼らにもそれが伝わっていた。もの珍しげにクシの腕や脚にまわりついてくる。

大勢に囲まれて身動きがとれず、さすがに弱ったクシは、見覚えのある顔の青年を見つけて声をかけた。

「キヌアはどこに？」

「今お知らせしてきます」

彼が押し寄せる人の群れの中に消えていくらしもないうちに、人だかりの向こうから懐かしい声が響いた。

「クシ！」

よく通るその声を聞いて、群がっていた生徒たちがさつと道を開けた。

彼らの向こうには、相変わらずぴつたりと身体に貼り付くような服を身につけて、髪をきつく束ね上げた女戦士の姿があった

キヌアはクシに近づきながら、いささか目を潤ませて言った。

「おかえりなさい。クシ」

クシが西の果てに出発する日、柱の陰から涙をこらえて見送ってくれたキヌア。今の彼女の様子から、この三年間、自分のことを心配し続けていてくれたのだろう。

クシは自然とキヌアに向かって片膝を立てて跪き、深く頭を垂れた。キヌアは何も言わずにクシの背中に優しく手を置いた。

敬意を示す姿勢からクシがゆっくりと立ち上がると、自分の視線の少し上にあつたはずのキヌアの顔が、今は見下ろす位置にあることに気付き戸惑った。

クスコを離れる前は背も技術も見上げる存在だったキヌアが、弱々しくなってしまったように感じて、クシは少し寂しさを覚えた。

「クシさま、久しぶりにキヌアさまとのお手合わせを見せていただけませんか？」

キヌアを呼びに行った青年が提案すると、周りの者が大歓声を上

げた。

「クシさま！」

誰かが叫んでクシに斧を投げてよこした。

クシがそれを受け取ると、群がっていた者たちはキヌアとクシを残して素早く中庭の周囲に退いた。

クシが返事をする間もなく、キヌアとの対戦会場が出来上がった。

キヌアはクシに微笑んで頷き、中庭の中央までゆつくりと歩いて行って振り返ると、斧を構えた。クシもキヌアに向き合う位置まで行くと、静かに斧を構えた。

以前は構えるとすぐに飛び出していったクシだが、今はキヌアの動きにじつと目を凝らしていた。

ふと、相手の様子を探りもせずにあやうく突進していた幼い自分を思い出し、なんと無知で愚かだったのだらうと、笑い出したくなった。

しばらく見合ってお互いの様子を探っていたふたりだが、動き出したのはキヌアの方だった。

気合の声を発すると、キヌアはまっすぐに向かってきてクシの正面に斧を打ち込む。クシが斧でそれを止めると、キヌアは素早く持ち手を返してわき腹を攻撃した。

前のクシならこの時点で防御が間に合わずに倒されていた。しかし今は、クシの動きもキヌアと同じくらい、いやそれ以上に素早くなっている。

キヌアの斧は目にも留まらぬ速さでクシの体のあちこちを攻撃してくるが、クシはそれを余裕でかわしていった。

キヌアの攻撃とクシの防御がひたすら続く。

観客たちは手に汗を握ってふたりの動きを追っていた。

なかなか攻撃の決まらないキヌアが、体勢を立て直そうといった後ろへ退いた。今度はそれを追ってクシから攻撃を仕掛ける。

クシも素早く斧を返してあらゆる方向からキヌアを攻撃した。

キヌアも巧みにそれをかわす。しかしクシの打ち込む斧の威力が勝っているように見える。勝負が進むごとにキヌアの動きに隙ができることが多くなり、僅かにクシに押され気味になった。

しかしその差も些細なもので、ほとんど互角の戦いである。

やがてクシにも疲れが見えはじめ、また身体を離して体勢を立て直す。

そしてふたたびキヌアが攻撃を仕掛ける側になり、それが長く続くとクシの攻撃に移るといった繰り返しだ。

長い長い戦いになった。

体力も筋力も格段に成長したクシは、戦いが進むとともに身体が慣れ、ますます勢いづいた。

反対にキヌアの方は段々と弱っていくのが誰の目にも分かった。

そのうち肩で息をしながら必死に斧を振るようになった。クシの斧を受け止めるたびに腕が震え、体がぐらついている。

「うっ……」

とうとうキヌアはクシの斧を押し返す力がなくなり、斧を受けた姿勢のまま仰向けに転んでしまった。

クシはふいに倒れこんだキヌアから身体を引くことが間に合わず、斧を押し当てたままキヌアに覆いかぶさるように前へ倒れた。

クシは咄嗟に片手を付いて自分の身体を支え、キヌアの身体を押しつぶすことは回避したが、斧は振り下ろしたままの勢いで彼女の斧を押し払い、彼女の顔すれすれに地面に打ち込まれた。

キヌアが素早く顔をそむけたので斧は彼女の頭の後ろを掠めるだけで済んだが、髪を束ねていた麻ひもと、ひと房の髪の毛がパラパラと散った。

上から見下ろすクシのほうにそろそろと向き直ったキヌアの顔は、健康的な色が褪せ、彼女らしからぬ怯え切った眼をしていた。

乱れた呼吸を整えようと口を大きく開けるたび、ひゅうひゅうと苦しそうな音ばかりがして、うまくいかないようだ。荒い呼吸が彼女の胸を激しく上下させていた。

固唾を呑んで戦いを見守っていた人々は、勝敗がついてもしばらく声も出せなかった。

クシ自身も自分が勝ったことに気付くまで時間がかかったほどだ。ようやく状況を理解して起き上がると、倒れているキヌアに手を差し伸べた。キヌアがその手を取ると、ぐっと彼女を引き起こした。しかしキヌアは起き上がってもまともに背を伸ばすことができず、膝に手を付いて体を屈め、荒い息をついていた。

観客が一斉に歓喜の声を上げた。宮殿中が震えるような大歓声だった。

久しぶりにクスコに戻ってきた英雄は、人々が想像していたよりもずっと強く逞しくなっていた。

「クシ、随分と腕を上げたのね。西の地で稽古むじうを続けたの？」

やっとのことで息を整えて顔を上げたキヌアが言った。

「いいえ。ただ生きるために必死に日々を暮らしていただけです」

「そう。それがあなたを成長させたのね。私があなたに教えられることはもう無くなったわ……」

キヌアがクシの手を握って微笑む。

しかし広がって顔にかかる髪の毛のせいなのか、未だに顔色が悪く、やつれ、どこか儚げに見えた。

その夜、リヨケの宮殿で三兄弟が久しぶりに顔を揃えた。クシの帰還を待ち望んでいたアマルは、感激してクシを抱き締めた。

「お前が戻ってくるのをどんなに待ち望んでいたか。リヨケから国の状況は聞いておろう。ハナンの者たちもクシの帰還を首を長くして待っていたのだ。無事で何よりだ」

兄弟は再会を祝って杯を傾け、その後はたわいもない会話を愉しんだ。

「しかし、兄上たちが家庭を持ち自分の宮殿を構えているとは。三年の月日というのは大きいものですね」

ふたりは宮殿を構えると同時に妻を迎えた。アマルはもう数名の側室もあり、子どももいる。

「お前ももう十九だな。ちょうど良い年頃ではないか。せつかく三年で戻ってこられたのだ。この際、早く妻を娶って宮殿を構えろ。私はアナウルキなど似合いではないかと思うのだ。妹は十六になった。お前の知るお転婆娘ではないぞ。今では宮殿でも評判の貴婦人になった」

アマルがほろ酔いの顔でクシを覗き込んだ。

皇族たちは血縁者のなかで婚姻を結ぶことが多い。とくに正妃となると、ほとんどがその姉妹の中から選ばれるのだ。

アマルの言うアナワルキ姫も兄弟にとつては腹違いの妹に当たり、クシにいちばん近い年であつた。しかしクシにはまだ幼い印象のその妹を妻に迎えるなど想像できるものではない。

「なんと性急な。まだ帰ってきたばかりではないですか。しばらくはクスコの生活を取り戻すことで精一杯ですよ」

クシが笑つと、リヨケがクシの肩を抱いて言った。

「暢気なことを言っている場合ではないぞ。うかうかしていると、誰からも相手にされずにあつという間に年を取ってしまうぞ」

「ひどいな、リヨケ兄さまは。それでも西の村で求婚されたことがあるんですよ」

早速リヨケが興味津々に訊いてくる。

「ほう、それで何故その申し出を受けなかった？　こんな面倒なところに戻ってくるより、あちらでのんびりと暮らす方が良かったのではないのか」

リヨケはすっかり酔つて、ニヤニヤしながらからかった。

「莫迦なことを言わないでください。私の帰還を喜んでくださったのは嘘だったのですか？　私はクスコに帰る日を切実に待ち望んでいたんですよ」

そうは言ってみたものの、冗談ではなく向こうで暮らすのも悪くないと考えたことを思い出した。

同時に求婚を断った本当の理由も……。

それに伴って、クシはふと気掛かりに感じたことを思い出し、今までの話の脈略を無視して独り言を呟くように話し出した。

「……今朝、『キヌアの教室』に顔を出しました」

クシが突然話題を変えても気にも留めず、すっかり酔いが回っているリヨケは上機嫌で答える。

「おお、皆さぞかし喜んだことだろう！」

「ええ。皆歓迎してくれました。そこで久しぶりにキヌアと手合わせをし、私が勝ったんです」

「それはすごいじゃないか。キヌアに勝つことがクシの目標だったのだから」

「そうですね。まずはキヌアを負かすことを目標に稽古に励んでいたのですから。」

しかし、キヌアの様子が気になりました。覇気がなく、沈んでいるような……。あれは彼女の实力ではない。今朝の彼女は私の知る勇猛な戦士ではなかったんです」

クシが言つと、アマルが溜め息をついた。

「いつまでその様なことを言っているのだ、クシ。彼女は皇帝の側室であって、クスコに来た時点からもう戦士ではないのだぞ。よう

やく陛下のご寵愛を受けるようになって、彼女も側室としてつつましく暮らすことに重きを置いているのであろう」

「陛下のご寵愛？」

クシがアマルとリヨケを交互に見た。

「クシ、お前が西に行ってから、皇帝陛下がキヌアの部屋に足しげく通われるようになったのだ。

あの狩りの日、何故かキヌアが母上の服を着ていたよな」

そう言いながらリヨケがクシを睨む。クシははぐらかすように空を向いた。

「まあ、今はそれを問い詰める気はないが……。

あのとき父上は、キヌアに亡き母上の姿を重ねたのではないか？ その後しばらくしてあれほど避けていたキヌアの部屋へしばしば通われるようになったのだ。

まあ、きっかけはどうあれ、陛下にキヌアが存在が認められたのだ。これでキヌアが皇帝の子を授かれば、キリスカチエとの同盟も確かなものになり、キヌアの地位も安泰になる。彼女にとってもクスコにとっても大変喜ばしいことだ」

リヨケは淡々と話すが、クシは聞いているうちにざわざわと強い風が心の中に吹き込んでくるのを感じた。

「キヌア自身は、何と？」

「何も言わないが、側室にとってはこれ以上望ましいことはないではないか。

お前はキヌアを負かしたのだ。もうこれ以上彼女に無敵の戦士の姿など期待するではない。彼女を混乱させ、苦しめるだけだ」

アマルが諭す。

クシは深い溜め息を吐かずにはいらなかった。

兄たちはその溜め息の意味を、クシが戦士キヌアに対する憧れを捨てきれないのだと捉えた。

しかし当のクシは、キヌアが本当にそれを望んでいるのか疑うとともに、皇帝に対して理不尽な嫉妬が膨らんでくるのを感じていた。湧き上がってくるそれらの思いを抑えようと必死だったのだ。

2、ルクマの実（その1）

2、ルクマの実

その夜は新月で、月明かりのない夜空には無数の星が何にも邪魔されることなく派手やかに輝いていた。澄んだ夜空にまたたく星の数があまりにも多く、夜空全体がぼんやりと薄い光を放っているようだ。キヌアの部屋の小さな高窓からもそんな星明りが白く差し込んでいた。

先ほどから身じろぎもせずただじつと高窓を見上げているキヌアの姿に、水差しの水を換えようとして入ってきたティツカは少し異様なものを感じ取った。

「新月の夜は星が一面に輝いてきれいな」

ティツカが心配そうに見つめていることに気付いたからか、高窓に目を遣ったままキヌアが呟いた。

キヌアの長身をたつぷりと包み込めるほど長い夜着に身を包み、ゆるやかに波打った髪をまとめずに無造作に垂らしている。長い艶やかな黒髪は彼女の座っている寝台までも覆っている。

好戦的な服に身を包んでいるときのキヌアとは別人のようだ。

たいまつの灯りに照らされて、顔に落ちる陰影が小刻みに揺れ、キヌアの横顔が泣いているように見える。無防備な彼女の姿が頼りなさげに見せているのかもしれないが、確かにここのところのキヌアは元気が無く、物思いにふけっていることが多いことをティツカは思い出した。

「キヌアさま、そういえば新月の夜はいつも陛下はいらっしゃらな

いすね」

「そうなの。月明かりがないと暗いので、お部屋を出るのがお嫌な
んですって」

「まあ、小さな子どもみたいに……」

ティツカは、娘のような年のキヌアの前で、幼い子のような発言
をする老皇帝の姿を想像して苦笑したが、キヌアはまったく表情を
変えずに相変わらずじつと星を見上げている。

「キヌアさま、どうかなさったのですか？」

こここのところ、やけに沈み込んでいらっしやるように見えるのです
が……」

その途端、キヌアがさがるような目でティツカを振り返った。

たいまつ灯りのせいではなかった。キヌアの目はやはり潤んで
いた。

「どうなさったのです？」

ただならぬ様子に、ティツカは駆け寄って跪き、キヌアの膝に手
を置いてその顔を見上げた。

「ティツカ、あなたにだけなら話しても赦されるかしら……」。

これはこの国にとって、とても重要なことなの。もしも他の者に
知られたりしたら大変なことになるのよ。でも私の胸のうちに仕舞
っておくには、あまりにも荷が重過ぎて……」

そう言ってキヌアは顔を手で覆って俯いた。

ティツカは慌てた。「少しお待ちを」とキヌアに告げて急いで部屋を出ると、廊下を念入りに見回した。

キヌアの部屋は後宮の一番奥にあり、この部屋に用が無い限り人は通らない。はるか向こうの廊下に番兵が立っているだけで他に人影はなく、ティツカは安心して部屋に戻ってきた。

「キヌアさま、大丈夫です。お話になって」

キヌアは膝に置かれたティツカの手に関自分の手を重ねると強く握った。

「皇帝陛下のことなの。」

陛下は、もう一年くらい前から私のことが分からなくなってきているのよ

「……どういことですか？」

「私を、ご自分のお母様……皇太后さまだと思っていらつしやるよ
うなの。しかも、ご自分はまだ幼い皇子だと錯覚していて」

「つまり……」

「少し気がふれていらつしやる……」

「しかし側つきの者たちは、陛下のご様子がおかしいことに気付いてはいないではないですか？」

「今のところ、私とふたりきりの時だけ幼いご自分に戻るようなの。
初めてここにいらしたときに、私が陛下の母君によく似ていると
おっしゃっていたのは覚えているわ。だからその頃は、お母さまの

思い出話や幼い頃のお話を聞いていただけだったのよ。

そのうち、段々とまるで幼子になったように振舞うようになって……。冗談ではなく、陛下の目は本当に幼い子になったようなもの。このままいつたらそのうちご自分が誰だかも分からなくなるわ」

ティツカは蒼ざめた。

まだ誰しもが認める後継者が定まっておらず、激しい権力争いのあるこの国で、皇帝の気がふれていると知られば必ず大きな争いが起こる。それゆえキヌアは誰に言うこともできずに密かに狂気の帝の相手をしてきたのだ。

それなのに、皇帝の寵愛を一心に集めているというやつかみから、ほかの側室から数々の嫌がらせを受けることもあった。

「私はお傍に居ながら、何も気付かずに……」

ティツカは自分を責め、それを償うように憐れな女主人を優しく抱き締めた。

するとキヌアは張り詰めていたものが一度にはじけたかのようにわっと泣き始めた。

キリスカチエにいた時もクスコに来てからも、ティツカがキヌアの泣く姿を見るのは初めてだった。弱い面をさらけ出すことを最も恥としているキリスカチエ族の、王の娘たる者が泣き顔を見せるなどあつてはならないことだ。

しかし今、そのキヌアがティツカに全身を預けて激しく嗚咽している。キヌアの抱えている苦悩はティツカの想像する範囲を大きく超えていることが分かる。

クスコに嫁いだ宿命がキヌアをこんなにも弱くしてしまったことに、ティツカは腹立たしさを覚えた。

どのくらい時が経ったのか分からないほど、キヌアはティツカの

腕の中で泣き続けていた。

長い時間ののち、溜めていた重荷が少し下ろせたのか、やがてひつくひつくとしゃくりあげる程度に泣き声が治まってくると、キヌアはティツカからそつと身体を離れた。

涙の顔を掌で拭いながら、キヌアは静かに話し始めた。

「あの人が教室に姿を見せたわ」

「え？」

突然キヌアの話に湧いてきた人物に一瞬見当がつかず、思わず訊き返したティツカだったが、すぐに誰を指しているのかを察した。

「……ええ、そうですね。ようやくお会いすることができたのですね！」

「久しぶりに手合わせをしたら、私が負けたのよ。」

彼は見違えるように逞しくなっていた。彼に敵うものはクスコにはもう誰もいないわね」

そう話して微笑んだキヌアの目は、無邪気に輝いている風にもどこか切なさや淋しさを帯びている風にも感じる。今の今まで悲嘆に暮れていたキヌアが、何故突然クシのことを持ち出し微笑んだのか……。

ティツカはハツとした。自分はとんだ思い違いをしていたのだ。思わずキヌアの身体を抱き締める。キヌアはされるがままティツカの胸に顔を預けてじつとしていた。

キヌアの癖のあるやわらかい髪を優しく撫でながら、ティツカは故郷キリスカチェでの出来事をつらつらと思い返していた。

キヌアの婚礼が決まった日、キヌアは母である『天の女王』と激しい口論をしていた。ティツカは女王の部屋の垂れ幕の外でそのやりとりを聞いていた。

「冗談じゃないわ。お母さまは私に死ねとおっしゃるのね。

異国の宮殿に押し込まれて知らない者に囲まれて暮らすなんてとても生きている心地はしないわ！」

「莫迦なことを言うのではありません。貴女は一族の運命を背負っているのですよ。自分が好もうと好まざろうと、王族の娘としての縁談を受け入れる責任があるのです。

貴女の使命はケチュアの皇族に嫁ぐこと。キリスカチエの民を守る最も重要な役目なのです」

幼い頃から側にいたティツカはキヌアの夢を良く知っていた。

—— 亡き父、偉大な王カリのように、自分もその名を広くとどろかすような偉大な戦士になりたい。まずは自分の腕を磨き、一族を守って率いていくのが使命なのだ —— と。

強い瞳で将来を語っていた少女が一転、異国の王の寵妃として、戦いを忘れて一生を送れと命ぜられているのだ。

ティツカはキヌアに同情したが、キヌアがどうしてもそれを受け入れなければならない立場にあることも理解していた。

偉大な王カリの亡き後、混乱に陥った国を救ったのはキヌアの母『天の女王』であり、同時にキヌアの姉『地の女王』であった。ふたりの女王のもとでキリスカチエは以前の勢力を取り戻しつつあつ

たが、その周辺ではさらに強力な勢力がつぎつぎと興っていた。

ケチュア族の皇帝ビラコチャとカリはかつてともに大きな敵と戦った盟友であり、カリが存命中は強固であったふたつの部族の信頼関係も、カリの死によって細く頼りないものとなっていた。

キリスカチエを脅かす勢力を威圧するためにはクスコの後ろ盾がどうしても必要であり、そのいちばんの近道が姻戚関係を結ぶことであつた。

キリスカチエには、成人した女子は片胸を切り落とす慣習がある。子孫を残すために必要な乳房を最低限にして身を軽くし、より敏捷に戦えるようにするためだと謂われているが、定かなことは分からない。

ともかく、その儀式を済ませればキリスカチエでは大人の女性、一流の女戦士になつた証とされていた。

しかし、キリスカチエでは成熟した女性である証も、他部族に嫁がせるには相応しくない。

なんと不幸な運命だろうか。キヌアはその儀式を迎える直前であつた。そこでこの若い王女が候補に上がったのである。

「ましてや、あの国の男は戦い方も知らず、着飾ることだけを考えている腰抜けばかりだというじゃないの！ 私に勝てるくらい強い男じゃなくては嫌よ！」

女王の部屋から響いてきたキヌアの叫びに、ティツカはひどく責任を感じた。

幼い頃に両親を亡くしたティツカは親戚筋に当たる名だたる武将の家に引き取られた。武将の妻は、かつてケチュア族とともに戦った際に功績を上げた武将に贈られたケチュアの姫君だった。ティツカのことを本当の娘のようにかわいがっていた彼女は、異国での

孤独を紛らわすためにティツカにケチュアの言葉を教え、よく故郷の歴史や伝承を語って聞かせていた。

ティツカはその異国の話が大好きで、それらをすっかり覚えてしまった。

王女キヌアの側付きに召されたとき、キヌアに珍しい異国の話を聞かせてあげようと、よくケチュアの話語っていたのだ。

——ケチュア族は美しい着物や装飾品を身に纏うんですよ。女性は色鮮やかな長い衣の裾を引いてしずしずと歩き、男性でさえ、長い布を羽織って頭や胸に石や羽根を飾っているのです。そんな人々が集うだけでその場が耀いているように美しいんですって！——

そのときはキヌアも楽しそうに聞いていたが、まさかそのような誤解を抱いてしまったとは……。

ティツカがその後どんなに誤解を解こうと努力しても、頑なな心を持ってしまったキヌアは聞く耳を持たなかった。しかしキヌアが意地を張るのはケチュアに対する偏見からではなく、理想の戦士となることを諦めざるを得ない悔しさからだったようにティツカには思えた。

結局、キヌアは納得しないままに婚礼の準備が進められ、嫌がる王女はたびたび逃走を繰り返した。

やがて、これ以上抵抗しても無駄だということがキヌアにも分かったらしく、自分の運命を受け入れる覚悟を決めたように見えた。

婚礼の数日前、数人の兵士と侍女を従えてキヌアはクスコへと出発した。幾晩か野営を敷き、クスコまではあと一日というところで、キヌアが従える者たちに言った。

「一足早く、クスコの街を見てみたいの。ティツカとともに先に行

くわ。あなたたちは予定通りに進んでちょうだい」

有無を言わさない行動だった。

無理やり駆り出されたティツカは、キヌアに従ってクスコまでの道を寝ずに歩き続けた。

キヌアとティツカがクスコの街に到着すると、ちょうど『成人の儀』が行われていて、街中がお祭り騒ぎだった。ふたりは、街外れの林の陰に潜んでその様子をそっと覗いた。

人々の視線はただ一点、ひとつの険しい山の頂上に向けられている。山の上に並んでいるのは少年たちだ。彼らはほら貝の合図で一斉に山を駆け下りてきた。街中の人々がその少年たちに熱狂的な声援を送っているのだ。

「おかしい行事ね」

キヌアは不思議な顔でその様子を眺めていた。

「ケチュア族の男子は、この式を卒業できなければ大人になることはできないのですよ」

「こんな子ども騙しの様なこと、簡単じゃないの」

「それは、キヌアさまのようなキリスカチエの一流の戦士なら簡単なことでしょうけど……」。

それに、見ているのと実際にやるのでは大きく違うものですよ。麓で待機する兵士たちはみな武装しているのに、あの少年たちは丸腰なんです。大怪我を負うのは覚悟でしょうね」

「ふうん。そんなに大変なものかしらね」

莫迦にしたように鼻を鳴らすキヌアにティツカは苦笑いした。
はじめはさして興味もなさそうに眺めていたキヌアだったが、やがて真剣な眼差しで食い入るようにその様子を見つめるようになった。そしてティツカの肩に手を置いて体を乗り出し、興奮したように言った。

「見てティツカ。あの白い羽根の少年の動きを。
攻撃する兵士をすべて余裕でかわしていくわ。あんなに足場の悪いところでも絶妙なバランスで難なく走り抜けていく。それに、驚くほど速いわ！」

今までとは打って変わってキヌアの目が輝いていた。

キヌアは白い羽根の少年の動きを瞬きもせずに見守っている。夢中になっているキヌアにつられて、ティツカも手に汗を握りながら少年の動きを見守った。

襲い掛かる兵士たちをかわして軽やかに走り抜ける少年の姿は、山肌に沿って飛ぶ白い鳥のようだ。

やがて白い羽根の少年は誰よりも早く到着した。人々が熱狂して彼の名を叫び始める。

—— アウキ・クシ ——

「キヌアさま、あの方はクスコの皇子ですよ。皆がそう呼んでいます。」

確かに、ケチュア族にはひとり有能な皇子がいるという噂を聞いたことがあります」

キヌアは儀式が終わった後も、担がれて街を練り歩く白い羽根の少年の姿を黙って見つめていた。

随分遠いにも関わらず、その視線に気付いたのか、ふと少年がこちらに視線を移した。

ティツ力はキヌアを引っ張って慌てて木陰に身を隠す。

「私はケチユア人のことを誤解していたようだわ……」

キヌアは小さくそう呟くと、そのまま黙り込んでしまった。それを聞いてティツ力は婚礼を迎える前に誤解が解けて良かったと胸を撫で下ろした。

その後引き返したふたりは、クスコのすぐ手前で輿入れの列に合流し、何事もなかったようにクスコへと入城したのだった。

ティツ力は記憶を辿り終えて確信した。

あのとき、それまで戦うことしか興味のなかった王女が、白い羽根の少年に初めて恋を覚えたのだ。

キリスカチエでは一番有能な者が跡を継ぐ。キヌアは白い羽根の皇子がこの国の跡継ぎであり、自分の結婚相手なのだろうと思ったのかもしれない。

しかし実際クスコにやってきて、相手が老皇帝だと告げられたとき、キヌアは動揺の色を見せなかった。

キヌアが一度決めたことを覆すことはしない性格だからだろうが、それ以上に誰の後であろうと、想いを寄せるクシ皇子の国で過ごせることが幸せだと思い直したのだろう。

キヌアの想いが天に届いたのか、偶然にもふたりは出会い、毎日稽古で顔を合わせる仲になった。皇子とともに稽古に励んでいたときのキヌアは輝いていた。

だからこそ皇子が都を追われたとき、ひどく憔悴していたのだ。皇子が戻ってきたことが、今辛い立場にいるキヌアの唯一の救いだ。クシ皇子がいれば、キヌアは『皇帝の寵愛を受ける幸せな側室』

の役を演じていくことができる。

キヌアはティツカの腕の中でいつのまにか静かな寝息を立てていた。

キヌアの癖のある髪をほぐすように撫でながら、ティツカは『本当にそうだろうか』と自問した。

遅しい男性になってキヌアの前に現れた皇子に対して、キヌアはこれから先もただ憧れている存在でいいと思うのだろうか。彼に想いを伝えることもなく、老いて正気を失った皇帝の世話だけをしていくのだろうか。

おそらく皇子が戻ってきたことによって、キヌアの中で堪え続けていた感情の堰が崩れ去ってしまったのだ。

キヌアのまなじりに残る涙の痕を見つめながら、ティツカはあることを決意した。

2、ルクマの実（その2）

次の日の朝早く、ティツカはひとりで中庭を訪れた。

まだ朝靄が晴れきれていないにもかかわらず、もう何人もの生徒たちが元気な掛け声とともに鍛錬に励んでいた。

ティツカはその中にいるはずの人物の姿を探そうと、ゆっくりと流れていく薄白い靄の向こうに必死に眼を凝らした。

中庭の中央に人だかりが出来ている。数人の指導者が集って何やら話し合っていた。稽古の打ち合わせをしているのだろう。そのなかにクシの姿もあった。

やがて靄がすっかり消えて視界が晴れると、クシの方でも中庭の隅で稽古を見つめているティツカに気付き、嬉しそうに駆け寄ってきた。

「ティツカ、久しぶりだな！」

「クシさま、ご無事でお戻りになって何よりです」

「ありがとう。また会うことができてうれしいよ」

クシは懐かしむようにティツカに笑いかけた。すぐにティツカの周りに目を走らせる。

「キヌアさまですか？」

「ああ、今朝は随分と遅いようだな」

「ええ、少しお体の具合が優れないようなので、お部屋でお休みになっっています」

「そうか。以前のキヌアなら考えられないことだが……。そういえばどこか具合が悪いように見えたな。何か病でも患っているのか？」

キヌアのやつれた顔を思い出し、クシは心配した。

「いいえ。別に。少しお疲れになっただけでしょう」

「なら、いいのだが……」

――側室としてつつましく暮らすことに重きを置いているのである
ろう――

クシの頭にふとアマルの言葉が過ぎる。クシに完敗したこともあって、キヌアはもうこの稽古には出てこないかもしれないとクシは不安になった。

クシが黙り込んで考えていると、突然ティツカがクシの腕を掴んで建物の陰に引っ張って行った。

そして唐突に訊いた。

「クシさま。

クシさまは、キヌアさまのことをどう思っいらっしゃいますか」

ティツカが何を知らたいのかが分からず、クシは戸惑いながら答えた。

「どうと……」

……彼女は優秀な戦士であり、私にはいつまでも尊敬する師だよ。
キヌアのいないこの教室はやはり活気に欠ける」

「いいえ。そういうことではなく……」。

つまり、今まで女性としてキヌアさまのことを考えたことがありませんか？」

出し抜けにあからさまな問いかけをされて、クシはティツカに自分の胸のうちを見透かされたと思い、うろたえた。途端に鋭い視線でティツカを睨みつけると、低く途切れ途切れに答えた。

「何故……そんなことを訊くのだ……」。

キヌアは皇帝の側室。私には義理の母に当たる人だ……。そのように考えることなど……」

そこまで言って言葉を切り、目を逸らした。

ティツカの知っているクシは、いつも真っ直ぐに相手を見てはつきりと物を言う。そのクシが言葉を濁し、視線を外した。明らかにうろたえているその様子から、ティツカは、クシの方でもキヌアに想いがないわけではないと悟った。

確信を得て、ティツカは慌ただしくクシから離れると、深く頭を下げた。

「大変失礼なことをお訊きました、皇子。でも……」

そしてまたクシに近づいていくと、小声で続けた。

「ここだけのお話ですが。私はキヌアさまのお相手がクシさまだったらどんなに良かったかと思っているのです。いまのキヌアさまがあまりにもおかしいそうで……」

クシが複雑な表情で再びティツカを睨む。

「キヌアはいま、幸せではないと？」

ティツカは慌てて首を振った。

「いえいえ。こんなことを考えていることが知れたら、私は処罰されます。どうか、このことはクシさまの胸のうちに留めておいてください！」

ティツカはクシに何度も頭を下げた。

気になる言葉をティツカの方から投げかけておきながら、問いかけたことには答えてくれなかったことで、クシの不安が大きく膨れ上がっていった。

そんなクシの気持ちを顧みようとせず、ティツカはあっさりと話題を変えた。

「そうそう、クシさまがお戻りになつたらお渡ししようと思っていた物があるのです。大切な物ですので、外でお渡しするのはどうかと思い、キヌアさまのお部屋に置いてあるのです。稽古を終えたらキヌアさまのお部屋に直接いらしてくださいませんか」

「キヌアは具合が悪くて休んでいるのだろう？ それ以前に私が皇帝の側室の部屋に入ることなどできないよ」

「キヌアさまなら少しお休みになれば大丈夫ですよ。キヌアさまのお部屋にいらっしゃるのは簡単です。お部屋の裏手にある石堀が一部外れているのです。私たちはときどきそこから脱け出しては、野山を走ってくるのですよ。堀づたいに宮殿の裏手に

回りこんでその抜け穴から入れば番兵に気付かれることはありませんから。

『あれ』は、ほかの誰にも見られないようにクシさまにお渡ししないといけないので。どうか……」

クシが返事を返す前に「お願いします」と言って、ティツカは駆け去ってしまった。

突然心をかき乱されたうえ、強引に部屋に呼びつけられて、クシはティツカにひどく苛立ちを覚えた。しかし何か重要な物なら早く受け取らねばならない。キヌアの様子も気にかかる。

仕方なくクシはティツカの言うとおりにすることにした。

宮殿の裏手には低い崖が迫っていてほかからの視線を遮っているが、崖と塀の間にはひとりが余裕を持って通り抜けられるくらいの路地が出来ていた。

キヌアとティツカが野山で遊びたい一心で壁の穴を抜け出て、この路地を楽しそうに走り抜けてくる姿を想像すると、自然と可笑しさがこみ上げてくる。戦士としては優秀でも、いつまで経っても少女のような人だとクシは微笑んだ。

長く薄暗い路地のだいぶ奥まで進んだとき、足元に、這えば通り抜けられるほどの大きさの穴がぽっかり開いていた。穴をくぐり抜けるとちょうどキヌアの部屋の真裏に出た。

壁を回りこんでそとと表側を覗くと、石畳の長い廊下には、見渡すかぎり常駐しているはずの番兵の姿は無く、しんと静まり返っていた。

クシは部屋の周囲に気を配りながら、背中から素早くキヌアの部屋に滑り込んだ。

背中ごしに驚いた声が響いた。

「クシ！ 何故ここに？」

振り返るとキヌアが驚いた顔でこちらを見つめていた。

戸惑ったのはクシの方だ。キヌアはティツカからクシが来ることを聞いていなかったのだろうか。

クシはどう説明していいのか分からず、無言のまま彼女を見つめた。

長い癖毛を腿の辺りまで垂らして、柄のないゆつたりとした部屋着の裾を引いている。無造作で質素だが、飾らない素朴な美しさが神話の世界の女神を思わせた。

きつく髪を結い上げて、ぴつたりと体に合う服を着ている活動的なキヌアと同じ人とは思えなかった。

「どうしてここに入って来られたの？」

キヌアは怪訝そうにもう一度訊く。クシは何と答えていいのか分からず、逆にキヌアに訊いた。

「ティツカはどこに？」

「ティツカ？」

クシはキヌアが答える前に慌てて部屋の中を見回した。

「ティツカなら急用が出来て夕暮れまで戻れないとか。さっき慌てて出て行ったわ」

「ティツカが私をここに呼んだのだ。秘密の抜け穴を私に教えて…」

…」

「わざわざ、あれを教えたの？ ティツカったら！」

キヌアは顔を真っ赤にして頬を手で押さえた。

「なんていい加減なんだ。自分で呼び出しておいて、忘れてしまったのか！」

朝からの苛立ちも手伝って、ティツカへの怒りがどうしようもなくこみ上げてきた。しかしぶつける本人がいないのでは仕方ない。クシは大きな溜め息をついてその怒りを吐き出した。

意識を逸らして何とか平静を取り戻そうと、まずはキヌアの体を気遣う。

「キヌア、体の具合はもういいのか？」

「具合？ 別になんともないわ。

今朝は珍しく寝坊をしてしまったのよ。昨日の夜遅くまでティツカと話し込んでしまっただけ」

キヌアははにかみながらそう言って笑った。それを見てクシの押さえていた怒りがまた湧きあがってくる。

「なんということだ！ すべてあいつにからかわれたのか！ 渡したい大事な物があるというのも嘘か！」

クシが声を荒げたので、キヌアは慌てて必死に取り繕った。

「渡したい物？ そうだったわ。多分あれのことよ！」

キヌアは、壁の方を指差した。キヌアの指差す方に石壁を台形型にへこませた飾り棚があり、そこにきれいに畳まれた着物が一式置いてある。鮮やかな色の織り模様が入った頭巾と肩掛けだ。

見覚えのあるその柄を目にした途端、クシはハツとした。今までの怒りが消え、クスコを発つ前の楽しい日々が蘇ってくる。クシは吸い寄せられるように飾り棚に近づいていった。

その背中にキヌアが説明を加える。

「狩りの日に借りたお母さまの着物よ。クシが帰ってきたら返ししょうと以前からふたりで言っていたの。私たちだけであの部屋に返しに行くには勇気がいるもの」

「これはキヌアに譲ったんだよ。誰もいない部屋で埃を被っているより、誰かが着てくれたほうが母上も喜ぶだろう」

「クシは優しいのね」

クシがキヌアを振り返ると彼女はやんわりと微笑んだ。何故かその笑顔を見ているのが苦しくなり、クシはふたたび着物に目を遣った。

そのときクシは、畳まれた着物の上に小さな実が置いてあることに気付いた。少し突起のある丸い実で、ひび割れた緑の皮から黄色い果実がのぞいている。

クシはその実を手を取った。

「キヌア、この実はいつたい？」

「あら、そんな実があったかしら？ 気付かなかったわ。

きつとティツカが置いていったのね。お礼のつもりなんでしょう

けど、ひとつだけなんて気が利かないわね」

クシはその果実を見つめたまま、キヌアに訊いた。

「ティツカはクスコの昔語りなどに詳しいのか？」

「そうね。ティツカの育ての母親はクスコの貴族の出だったそうよ。私も彼女からこの国の昔語りをいくつか聞いたことがあるわ」

それを聞いてクシは考え込んだ。

その果実はルクマといった。

遙か昔、この大地を創った神は、その姿をみすばらしく変えて世界をめぐり、粗野な人間たちに秩序をもたらした。その旅の途中、ひとりの美しい女神を見かけ彼女に恋をした。しかしみすばらしいなりでは姿を見せることはできず、密かにルクマの実に想いを込めて彼女の前に落とした。

その実を食べた女神は、創造神の子を宿したというクスコの伝承があるのだ。

—— キヌアさまのお相手がクシさまだったらどんなに良かったかと——

それはティツカからのメッセージだ。

キヌアに少しでも想いがあるのなら彼女に正直にそう告げよと。

そして彼女の心を少しでも救ってほしいと。

今朝は冗談のように誤魔化していたが、ティツカはクシの気持ちを見抜いている。そしてキヌアの幸せを願う気持ちは切実だったのだ。

クシはルクマの実を握ったままキヌアを振り返ると、まっすぐに

彼女の目を見つめた。

「どうかしたの？ クシ」

クシが急に深刻な表情になったので、キヌアは心配そうに見つめ返した。

「この後宮にいて、キヌアは今、幸せか？」

俄かにキヌアの表情が翳った。

「何故そんなことを訊くの？ あなたには関係のないことだわ」

キヌアは視線を逸らして深い溜め息をついた。

そのキヌアの様子を見てクシは心を決め、静かに話し始めた。

「キヌア、聞いてほしいことがある。

私は西の地に追放されたときに、オルマという少女に助けられた。彼女はリヤマを追う遊牧民だった。

遊牧民とともに暮らしながら、クスコでは考えられない生活を経験した。

だんだんと彼らの生活に馴染んできたとき、家族のように過ごしてきたオルマから、夫婦になって遊牧民としてずっと一緒に暮らしてほしいと言われたのだ。

私はそのとき、クスコに帰ることをあてなく期待しているより、そのまま遊牧民になってあの地で暮らしていくのもいいのではないかと思った。

オルマとも気が合ったから悪い話ではなかった」

「そうなの……」

『何故そんな話を聞かなければならないの?』と言いたげにキヌアは苛立った表情で素っ気なく返事をした。

「しかし、どうしても受け入れることができなかったのだ。

理由はただひとつ。貴女への想いを断ち切ることができなかったからだ」

キヌアは驚いてクシを見た。

「貴女はあくまで父上の側室だ。だからそれまで貴女への想いを意識しようとはしなかった。してはいけないと思っていた。

しかし本当は、婚礼の儀で貴女を見たときから心を奪われていたのだ。

皮肉なことにクスコを離れて初めてその想いの強さに気付き、そしてどんどん膨らんでいった。彼の地で私は、貴女に再会することだけをずっと願ってきたのだ。そしてこうしてまた逢うことができた。

キヌア、貴女が父上の側室であっても構わない。私は貴女を愛している」

意を決してすべてを告白したあと、クシの心の中には安堵とともに不安が広がってきた。

想いを告げた代償は、もう以前のように気軽に顔を合わせられる関係ではなくなるということだ。キヌアがクシの想いを受け入れてくれないのなら、ふたりは二度と会うことができないだろう。

クシの告白を聞いたキヌアは、クシを見つめたまま動けずにいた。何か言おうとして薄っすらと口を開いたが言葉にならず、そのまま唇を噛み締めて下を向いてしまった。

しばらく沈黙の時が流れた。

クシがキヌアの返事を諦めて小さな溜め息を吐いたとき、キヌアは顔を伏せたままゆっくりとクシに歩み寄ると、その胸のなかに顔を埋めた。

クシは胸にひんやりと冷たいものを感じた。キヌアはクシの胸の中で泣いていた。

そして震える声で小さく呟いた。

「私も同じ想いだっただ。でも認めてしまつのが怖かったの」

それを聞いてクシはキヌアの頭を包み込むように抱えると、囁いた。

「父上に大切にされて貴女が幸せなら、それで良かったんだ。貴女の幸せを願ってこの想いを諦めることもできる。

でも今のキヌアはとても悲しそうで見えてられない。

キヌア、待っていてほしい。いつか必ず私が貴女を幸せにしてみせる」

キヌアはクシから少し身を離して涙の顔を上げると、こっくりと頷いた。

クシはキヌアの顔にかかる髪を優しく払うと、涙で濡れた瞼にそっと口づけをした。

もう日も暮れるころ、ティツカはキヌアの部屋の前に戻ってきた。後から番兵が疲れた顔で付いてくる。

「大変な一日だったわね。ご苦労様。」

でも、お蔭でいたずら好きの猿が隠してしまった大切なピンを見つけることが出来て大助かりよ。うっかりしていてピンを猿に取られたなんて、キヌアさまに叱られてしまっわ。ぜったいに内緒よ」

そう言って手に持った青銅のピンを振ってみせた。

「わかりました。無事に見つかって何よりです！」

汗まみれの番兵は嬉しそうに笑った。まだ年端もいかない素直な少年兵を騙したことは心苦しいが、これもキヌアのためなのだ。
『ごめんなさいね』とティツカは心の中で謝った。

キヌアの部屋はしんと静まり返っていた。薄暗い廊下に、部屋の入り口からぼんやりとたいまつ灯火の灯りが漏れている。

「ただいま戻りました。キヌアさま？」

部屋の外からティツカはキヌアに呼びかけてみた。
しばらくして小さな声が返ってきた。

「ティツカ。お帰りなさい」

その声を聞いてティツカはそっと部屋の中を覗いた。
キヌアは寝台に座って高窓を見上げていた。そのままの姿勢でキヌアが訊いた。

「随分と遅かったのね」

「ええ、ちよつと用が長引いて……」

「クシが怒っていたわよ。あなたがここに呼んだんですって？ それなのに勝手にいなくなってしまうから」

「申し訳ありません」

ティツカはクシが来たことを知って安堵すると同時に、クシがメッセージに気付いたのかどうか心配になり、飾り棚を見た。

着物は畳んだまま置いてあるが、その上のルクマの実は無くなっていた。

「もうすぐ、陛下がいらっしゃる頃ね」

キヌアがティツカを振り返って微笑みかけた。

「キヌアさま、大丈夫ですか？」

キヌアはゆつくりと立ち上がってティツカの方へやってくると、ティツカを優しく抱きしめた。

「ありがとう。ティツカ。私の気持ちを知っていてあの人をここへ呼んでくれたのね。」

あの人と想いが通じたのよ。新月の夜にまたここに来ると約束してくれたの。だから私、どんなことでも耐えられるわ」

今度はティツカが嬉し涙を流す番だった。

「良かった。キヌアさま」

3、革命前夜

3、革命前夜

アマルの屋敷に増設された大広間は、宮殿のそれと比べても見劣りしないほど立派なもので、数十名の貴族たちが一同に会しても十分に余裕があるほどだった。

その立派な大広間はいまや、クスコの暗部でこの国の在り方を根底から覆そうとするハナンの貴族たちの溜まり場となっており、毎夜、怒号とともに過激な議論が飛び交うようになっていた。

仲間が寄れば寄るほど始まりは温和だったはずの集会が極端な方向に傾き出し、やがてそこに集うのはすぐにでも武器を手にして飛び出していきそうな血気にはやる者たちばかりとなっていた。

しかし、その夜は珍しく穏やかだった。いつにない人数が集っているにもかかわらず、広間中が和やかな雰囲気包まれ、誰の顔にも笑顔が浮かんでいる。

今までの険悪な雰囲気はおそらく、それぞれの抱える不安を解消する策が誰にも見出せないことへのジレンマだったのだろう。

しかし彼らの不安を取り払ってくれる希望が現れたのだ。人々の心に荒れ狂っていた不安はその希望の光が見えたことでなりを潜めていた。

希望とは、西の地から帰還したクシ皇子だ。

流刑になる前の皇子の神童ぶりと、半永久的と思われた刑期を大きく縮めて奇跡的に戻ってきたことで、皇子に対する期待は過剰なまでに膨らんでいた。

これまで誰もが解決し得なかった問題を、たったひとりの皇子がすべて解決してくれるという妄想を、そこに集う誰もが信じて疑わなかったのである。

しかし彼らの期待というのは、クシが彼らの先頭に立って明日にでも宮殿に攻め込み、ウルコを失脚させてくれるだろうという勝手な思い込みだった。

大広間に三人の皇子が揃うと、集まった者たちはみな興奮して歓声を上げた。

「国を担っているウルコ皇太子とその取り巻きたちは私利私欲に目がくらんでまともな政治を行っていない。皇太子の家系は名ばかりであり、本来ハナンは良識ある者たちを生み出す家系であるのだ。神はクスコを救うためにハナンの正統な皇子クシさまを喚び戻されたのだ。ようやくハナンの希望である三人の皇子が揃ったのだ。われわれはこの機会を待っていた。いまこそ名ばかりのハナンの無能な代表と、それを操って我が物顔に振舞う悪どいウリンの取り巻きどもを排するときだ！」

貴族のひとりが叫ぶと、集う人々から大きな歓声が上がった。異様な熱気が大広間を埋め尽くす。クシはその様子を見て背筋が寒くなった。

きっかけは正当な怒りだったのかもしれない。しかし大勢が寄り集まるとその怒りは異常なほどに燃え上がり、目標を見失ってすべてを焼き尽くしてしまうのだ。

將軍や神官たちが次々と熱い演説を繰り返し、そのたびに集った者たちの喚声が高くなっていくのを、三人の皇子は上座から冷ややかな目で見つめていた。

「アマルさま、われわれはこれ以上手をこまねいているわけにはいきません！」

三人が揃うまでは……と返事を渋っていたアマルに、最初に声を上げた貴族が詰め寄った。

アマルは腕を組んで目を閉じ、難しい顔をしていた。

「もしも……」

クシが口を開いた。その途端今まで怒号のような喚声を上げていた貴族たちがいつせいに鎮まった。

「もしも現皇帝と皇太子から政権を取り上げるため革命を起こしたとして、その後、我らとこの国はどうなると思われるのか」

「アマルさまも同じようなことをおっしゃっていました。クシさま。確かに内紛を起こせば貴族たちは分裂し、今までのようなクスコの社会は成り立たなくなります。我々が勝てばウリンは半数以上の者を失うことになるでしょう。ウリンに加担しているハナンの者も同じく排除される。」

しかし、ここに集うハナンの者たちは有能な者ばかりです。少数であってもここに在る貴族だけで国を動かしていくことは可能。さらに皇子たちが導いてくだされば何も問題はありません。

アマルさまは失敗して革命派が捕らえられたときのこと案じていらっしやいましたが、精鋭揃いのわれわれだ。墮落したいまのウリンの者どもに負けるはずはありません」

皆が「そうだ、そうだ」と声を揃えた。

「問題はウルコとその取り巻きだけなのだ。表立って改革を支持す

ることのできないウリンの中にも重要な役目を担っている有能な者もおろう。同じ宮中で分裂し多くの貴族を排除するというのは、この国にとって大変危険なことだ」

「しかし、今ウリンを動かしているのは皇太子ウルコに傾倒する者たちです。ウリンの者はみな皇太子側にあると言っても過言ではありません。汚泥を取り除くにはその周りのきれいな土も大きく削り取らねばならない。多少の痛みは覚悟せねばなりません」

「私が危惧するのは国内のことではないのだ。」

私は西の地で暮らしていたときに、北方から勢力を広げてきている部族の噂を聞いた。そして実際に逃げ出してきた奴隷を見たのだ。焼き尽くされた村の話も聞いた。それは小さな部族同士の争いなどではなく、かなり大きな勢力が北西から侵出してきているという証拠なのだ。

遠く離れているからといって、この国に彼らが侵出してこないとは言いきれない。

ケチュア族はそのむかし、この辺り一帯でもっとも大きな脅威であったアヤルマカ族を統合し、さらにキリスカチエ族とも手を結んだことで、もうこの国に敵う敵はいなくなつたものと安心している。その安心がすっかり備えを甘くしてしまったのだ。

このうえ味方同士が争えば、ほかの国が攻め込む機会を容易に与えることにほかならないのだ。混乱に乗じて攻め込まれば、この国は簡単に滅んでしまうだろう。

皇太子は確かに身勝手で政治には関心がないようだが、父上がいらっしゃるうちは表向きは皇太子を立て、ハナンとウリンが協力し、危機への備えを整えていくことが一番重要なことなのではないかと私は思うのだ」

「皇子は遊牧民の生活が根付いて随分とプライドが低くなってしま

われたようすな。

今こそハナンの代表を気取るあの『でくのぼう』を引き摺り下ろし、貴方のような有能な皇子が王座に就くべきなのです。現れてもいない敵への備えなどといって、いつまで我慢して『無能な者』に跪いていなくてはならないのか！　まずは王座を奪回して、あとは思うようになさればよろしいではないですか」

「王の役目は、国の民を思い、国の行く末を案じることだ。自分のプライドなどを後生大事にしている王としては失格だ。王座に就かなくても、私は王にふさわしい役目を果たすことができる」

クシに抗議していた貴族はうつむと言って口を閉ざしてしまった。広間が一度静まり、そしてまたざわつき始めた。

「クシ皇子、危機に備えるために何をされようとおっしゃるのですか」

「ひとつは都の周囲の防衛を強化すること。次に戦える者を多く育てること。そして近隣部族との絆を固くすることだ」

「しかし、そのような表立った行動を皇太子と側近たちが許すでしょうか」

「もともと政治になど興味のない者たちなのだ。うまく理由を付け、面倒はこちらがすべて請け負うと言えば、わざわざ反対することもないであろう」

多くの者がクシの言葉に感心して頷いていた。

「われわれが地道にクスコのために働いていけば、皇太子が即位す

る前にウリンの良識ある者たちも味方につけることができるかもしれない」

「そのように悠長なことをおっしゃって、まさか永久に陰の王の地位に甘んじていかれるおつもりではありませんまいな」

年かさの貴族が少し意地の悪い口を聞いた。するとクシは立ち上がって声を張り上げた。

「私を誰だと思っている！ ビラコチャ皇帝と皇后ルントウ・カヤの子。正統なハナンの血筋を受け継ぐ者だ。皇位は本来、我ら三兄弟のひとりが引き継ぐべきもの。必ずこの手に戻してみせる。」

しかし、そのために犠牲を出してはならない。大切なのは時期なのだ。今優先しなければならないのは、クスコを守ることだ」

広間が静まり返った。圧倒されて立ち尽くす者の中から、しばらくすると何人かが自然にクシに向かって跪いた。そしてそれにつられるように次々と跪く者が増えていき、やがて広間に集った者がみな跪いて頭を垂れた。

クシの両側に座っていたアマルとリヨケが静かに立ち上がった。リヨケがクシに囁いた。

「皇位を継ぐ者は三兄弟のうちから選ばれるのではないぞ、クシ。真に皇帝に相応しいのはお前だ」

クシがリヨケを振り返ると、リヨケはニツと笑ってアマルに目をやった。アマルが微笑んで頷く。

「その通りだ。お前が皇帝になるべきだ」

クシは正面に向き直って大広間を埋めつくすようにして跪いている貴族たちをゆっくりと見回したあと、自身を納得させるように大きく頷いた。

4、鷹の砦（その1）

4、鷹の砦

「クシを知らないか？」

リヨケが朝稽古に顔を出して近くにいた指導者を呼び止めて訊いた。

「それがここ数日、いらしていませんね」

「そうか。このところ日中は宮殿にいないようなので此処なら会えると思ったが……。至急話したいことがあるのだが、困ったな」

しばらく稽古の様子を眺めていたリヨケは、キヌアの手が空いたのを見計らって彼女のところに行き、同じ質問をした。

「……知らないわ」

彼女は不機嫌そうに短く答え、ふたたび指導に入ってしまった。

クシがキヌアの部屋を訪れてのち、クシは一度も朝稽古に顔を出していない。お互いの想いが通じたからこそ普段どおりに接することが難しいと感じていたキヌアは、クシが来ないことで救われていた。

余計なことに気を逸らさずに稽古に打ち込めると思っていたとき、

突然クシのことを訊かれて、彼女は戸惑った。動揺を悟られないために、素っ気ない返事でやり過ごすしかなかったのだ。

もちろん、そんな経緯や複雑な心境があることなど誰も知らない。

「何か、随分と面白くなさそうだな……」

リヨケがキヌアの態度を見てそう呟くと、先ほどの指導者が彼女の憶測を述べた。

「クシさまに負けてからずっと苛立っておられるようですよ。今までキヌアさまが誰かに徹底的に負かされることなどありませんでしたからね。よほど自信を砕かれてしまったのでしょうか。あまりクシさまのことには触れないほうがよろしいかと……」

同時にキヌアに合わせ稽古を挑む生徒たちの短い悲鳴がずっと聞こえてきた。

大勢の生徒が一行に並び、順々にキヌアに挑んでいくのだが、いともたやすくいなされ、自らの勢いで転んでしまう者や、軽く叩かれて蹲ってしまう者ばかりだ。

リヨケには、キヌアはいつもどおり十二分に手加減をしているように見える。違うのは、いつもは優しく声を掛けるキヌアにいつさい笑顔が見られないことだ。その鋭い視線を真正面で受ける生徒たちは、それだけでひどく緊張し、うまく斧が振るえないらしい。

「あのくらいでひるむようでは戦場では役に立たん。優秀な戦士を育てるにはキヌアの機嫌を損ねるのがいちばん手っ取り早いかもしれないな」

そう冗談を言って笑ったあと、リヨケはふと先だったのクシの言

葉を思い出した。

—— ひとつは都の周囲の防衛を強化すること。次に戦える者を多く育てること…… ——

「そうか！ クシの居所に思い当たったぞ」

突然そう叫んで、リヨケは慌ただしく中庭を立ち去ってしまった。残された指導者は呆気にとられてリヨケの後姿を見送った。

クシは、丈の短い乾いた草が強い風になびいている小高い丘の上に立っていた。

辺りはところどころに大きめの石が無造作に転がる草地だ。その周囲を広く囲むように巨石を組み合わせた立派な石垣が長々と続いている。つまり頑丈な石垣に囲われた広大な広場のような場所だ。周囲を取り囲んでいる石垣は直線ではなく、ギザギザとした獣の牙のような形になっている。

そこは古代の祭祀場の址あとと言われる神聖な場所だ。荘厳なその石垣に囲まれた空間では、歴代の皇帝たちの即位式も行われてきた。

何段にも重ねられた石垣の最も上の段に登ると、そこからは麓の風景が一望できた。眼下に広がるのはクスコの都である。

太陽を背にして北の方角から都に向かって立つ。

クシの立つ丘の両脇から、ふたつの河が左右に迫った山の裾をなぞるように、まっすぐに南へと流れていく。河は遙か彼方で合流し、ひとつの流れとなつてさらに南東の山間へと続いていく。二つの河の間の、縦長の歪な三角形の土地に発展したのがクスコなのだ。

東から昇りはじめた太陽は、やがてこの丘の中空にやってきて都に満遍なく光を注いでいく。だからこそ遙か昔からこの場所が神聖視されているのかもしれない。

その場所は鷹フマの丘とも呼ばれていたが、石垣の上に立つて都を見下ろしたとき、クシはその名に得心がいった。

そこからの眺望はまさに天空を飛ぶ鷹の目のそれだ。丘からの鳥瞰は都の隅々までを余すところなく映し出していた。

クシはただその景色を愉しみに来たのではない。真っ直ぐに指を向け、都の形をなぞっていく。

東から南に向け、南を通り、西を回る。三方には山が迫り、その下には河が流れ、それらが天然の要害となる。数箇所には渡された橋を渡らなければ都へ入ることはできない。

ここ数日実際にその川沿いを歩きその足でも確かめてきたのだ。残る鷹の丘だけは、北側の大地から都に行きつくまでに何も遮るものはなかった。この奇妙な形の石垣が障害となるだろうが、それも河に比べれば大したものではない。そのうえ石垣は途中で途切れ、その隙間に遮るものはまったく無い。

クシは敵の侵入を想定して都の周辺の地理を調べていたのだ。今まで部族間の争いといえば、ほとんどがそれぞれの領土の境界線をめぐる争いであったが、西の地で聞いた噂の部族は、他部族の土地を奪い取ることに執着しているようなのだ。まだ敵の影が見えないうちに、都の護りを固めておくことは決して取り越し苦労ではなかった。

クシは上段の石垣のへりに胡坐をかき、今まで調査したことを整理して良い策を搾り出すために静かに瞑想した。

「危ないわ。降りていらっしやい！」

突然、下から響いてきた高い声にクシの思考が遮られた。目を開くと石垣の下でひとりの少女がこちらを見上げていた。

長い腰巻スカートに鮮やかな柄の帯、厚い肩掛けを羽織り、その端を金属のピンで留め合わせたその姿は貴族の娘のものだ。細かく分けて編まれた三つ編みの束がいくつも肩に掛かっている。三つ編みの先に付いた薄紅色の石の飾りを揺らしながら少女はまた声を張り上げた。

「話があるのよ。降りていらっしやいよ！」

何故か彼女の声色に刺々しさを感じる。否定は許されないような雰囲気を感じ取って、クシは仕方なく立ち上がった。

かなり高さのある石垣を、足場を探しながら鹿のようにぴょんぴょんと渡り、あっという間に少女の前に降り立った。

少女は先ほどの声と同じく、険しい目をクシを向けた。

長いスカートの裾が泥で汚れている。動きにくいその格好でこの丘の急斜面を必死で上ってきたのだらう。それほどまでに重大なことを伝えに来たのだらうか。

「暢気なものね。わたくしは貴方のせいでひどく迷惑しているというのに」

「ええ、と。一体どちらの姫君でしたか？」

クシはその話を聞く前に、まず少女が誰なのかを確かめねばならなかった。少女はまた高い声を張り上げた。

「呆れた！ 幼いころ、散々からかって遊んだ妹の顔を忘れたというの？」

「……アナ？ アナワルキか？」

クシと、兄弟姉妹のなかでは年の近いアナワルキは、幼い頃いつも一緒だった。

正しくは仲間と遊ぶクシの後をアナワルキが一方的に付いて回っていたのだが。三つほど年下ではあるが、アナワルキにとってクシは仲間であり、時にライバルとして見ていた。

ときどきそんなアナワルキを足手まといに思ったクシが、わざと身を隠して意地悪を働くことがあった。しかし気の強いアナワルキは泣き喚きながらも必ずクシの姿を見つけ出したものだ。

仲が良いのか悪いのか分からないが、そんなことには関係なく常に一緒にいたふたりだった。

しかし今のアナワルキをクシが分からないのも無理は無い。幼い頃は一緒であっても、十になる前に男子は武術や学問を習得するために、女子は貴婦人としての所作を身につけるために、その生活を分かたれてしまったからだ。

「ようやく分かったのね。」

良いこと、クシ。幼い頃は確かに貴方の後ばかり追いかけて回していたけれど、流石に大きくなってまで貴方の後を付いて回ろうとは思わないわ」

「何のことだ？」

「貴族や神官のあいだで、わたくしがクシの後になるという話が広

まっているのよ。クシは知らなかったのかしら」

「いや、まったく知らなかった」

「わたくしがリヨケお兄さまにそのことを訊ねたら、直接ふたりで話をするようにと言われて、此処に貴方がいることを教えてくださったのよ」

アナワルキは服の裾を払いながら深い息をひとつ吐いた。

革命を起こすと意気込んでいたハナンの貴族たちは、クシの説得によってその矛先を失った。それならばクシを皇帝に立てるために先ず相応しい后をあてがおうと考えたのだ。

皇妃^{コヤ}に相応しい皇族であって、さらに年が近いという条件を鑑みれば、自然とアナワルキの名が浮かぶ。

「わたくしはクシの后になるつもりはないわ！

わたくしにはずっと前から想う人がいるの。でもその方にはすでにお后がいらっしゃる。皇女たるものが、側室に身を貶すなど考えられないわ。そこでわたくしは一生その方を想って独り身を通そうと心に誓ったの。独り身で通すなら、神殿の巫女になるのが一番よね。だからわたくしは神殿に仕えようと思っているの。

こんな話が持ち上がらなかったら、わたくしは神官にそのことを願い出るつもりでいたのに」

言葉遣いや所作はだいぶ貴婦人らしくなり、恋の真似事なども覚えたらしい。しかし実際にそぐわない突飛な発想をするところなど、背伸びをしてもまだまだ幼さが抜け切れない妹の姿にクシは思わず微笑んだ。

クシに張り合おうと必死になって追いかけてきた勝ち気な妹の姿

がありありと蘇ってくる。

「恋が叶わないから神殿の巫女になるという話はもう少しよく考えたほうがいいと思うが、私はアナを後に迎えるつもりはないよ。それどころか今は后を迎えることなど考えられない。宮殿に帰ったら勝手に話を持ち上げた貴族たちに私からよく言っておこう」

「良かったわ！　だってわたくしがクシの後だなんて、想像がつかないもの！」

アナワルキは口到手を当てて『ほほ…』と小さく笑った。しかし泥だらけのスカートの裾が彼女らしさを物語っている。

「折角だからアナ、とっておきの話を教えてあげよう。付いておいで」

クシは石垣に登らなくても、クスコの街を一望できる場所までアナワルキを連れていった。

「ここから都の形をよく見てごらん。この丘は頭、南で二つの河がひとつに重なる流れは尾、西側の山が途切れる辺りは脚、そして都の中心は胴体だ。この都は跪いて太陽を見上げるピューマの形をしている。私たちは今、巨大なピューマの頭に乗っているのだ。クスコは巨大な獣神に守られている。

私はいつかこの都の形を整えて、獣神の姿を美しく蘇らせたいのだ」

アナワルキは活き活きと話すクシの姿を少し醒めた眼差しで見つけた。

「いつかクシの奥方になる方は大変ね。いつまでも幼い頃のように大きな夢ばかりを追っている貴方に付いていかなくてはならないんですもの。その方に同情するわ」

そんな憎まれ口をききつつも、アナワルキは幼い頃と変わらない壮大な夢物語を語る兄の姿を懐かしんでいた。この兄はいつか幼い頃の夢を本当に実現させてしまうのかもしれないと思うのだった。

4、鷹の砦（その2）

都の防衛を整える構想がままとすると、クシは將軍や改革派の貴族たちを集めて話をした。

複雑な形の鷹の丘の石垣はそれだけで防御壁の役目を成すが、さらにその高さを上げ、石垣の途切れた先にも延長し、石垣の端には高い見張り塔を建てる。今ある石垣を最大限に利用して鷹の丘に頑丈な要塞を造る計画だ。

早速貴族たちはクシの計画を実現するために必要な技師や人夫の数をとおよそ割り出し、各所に手配した。

しかし要塞の計画を公に始めるには、皇太子の許可を得なくてはいけない。

折りよくその機会がやってきた。

クシが都に戻ってから頑なに接見を拒んでいたウルコは、しばらく経って気が変わったようだ。かねてから帰還の挨拶をしたいと申し入れていたクシとの面会をようやく承諾したのだ。

でっぴりと太った身体を窮屈な玉座に押し込むようにして座ったウルコは、接見の間に入ってきたクシをぎらぎらとした目で睨みつけた。

「殿下、お久しぶりにございます。三年間、西の流刑地で罪を悔い改め、ふたたび都に帰ることが叶いました」

ウルコはクシの風貌を見て嘲るように言った。

「何とクシ！ 黒々としてすっかり西の蛮族になってしまったようではないか。この狭い都より西の広大な大地を走り回っているほうがよく似合いそうだ」

下卑た嗤いを浮かべるウルコにも、クシは表情ひとつ変えずに静かに言葉を続けた。

「私は西の地でずっと故郷のことを案じておりました。

戻ってみれば、父皇帝はすっかりお年を召されて政をまつりごとをされなくなつたとのこと。たいへん悲しく思いましたが、代わって皇太子殿下がその後継を担っていらつしやると知り、安心いたしました。

殿下が正式に皇帝に即位されたのちには、この国が、父皇帝の御代よりもますます栄えるようにと、切に望んでいるのです」

ウルコは、はんと鼻を鳴らして頬杖をついた。

「殿下、私は、いずれ迎える次期皇帝の即位式のために、あの鷹の丘の祭壇をさらに立派なものに改築して殿下に捧げたいと考えております。弟の心を汲んで、どうか工事を許可されますように」

「ほう、殊勝な心がけよ。しかし父上がご健勝でいらつしやるのにもう即位式の話とは、父上に失礼ではないか」

ウルコは片眉を上げ、クシの顔を覗きこむように玉座から身を乗り出した。クシは真つ直ぐにウルコを見据えていた。

「祭壇はすぐにできるものではありません。父上に何かあつてからでは遅い。

殿下への贈り物ではありますが、完成した際には、即位式だけで

なく諸々の祭事にも利用できると思います」

「クシ、昔から私のことをころよく思っていなかったお前が、そのようなことを言い出すとは思議よのう。
いったい何を考えておるのじゃ？」

しばらく見合ったあと、ウルコはふたたび玉座に深く座りなおし、斜^{はす}に構えると、横目でクシを見下した。

「まあ、私を襲うつもりなら、今この場でも十分に可能だ。わざわざ郊外の辺鄙な場所に根城を築いて反逆を企てようなどと、面倒なことはするまい。好きなようにするがよいわ」

ウルコはあくまでクシを疑っていたが、郊外の山の上で何をしようとするの暮らしには差し障りない。

万一郊外の目立つ丘に陣を敷けばその動向は手に取るように分かる。反逆が目的ならば不利を承知で負担の大きい工事をするとはいえられなかった。

それ以上詮索するのも面倒で、ウルコはすんなりと許可を下したのだった。

「よくすらすらと口から出まかせが出るものだな」

同席していたリヨケが大広間を出てから言った。

「兄上を見習ったまです」

クシが笑うと、リヨケはクシをつついた。

皇太子の許可を得て、祭壇、いや要塞の工事が公に進めることができるようになった。丘の上にはすでに名だたる技術者と石工が集められていた。

古代の祭壇に使われた石は人の背の何倍もの高さで、十人ほどが横に並べるほどの幅のある巨大なものだ。祖先がその石をどのように加工したのかは謎だが、その頑丈な基盤の上にさらに高く石を積み上げていけば敵が容易に破ることのできない砦が出来上がる。

古代の遺跡に出来る限り近い形で、手付かずの丘にも石垣を延長していく。

そして遠くを見渡せる高い塔を設置する。

技術者は、石灰石の塊に硬い黒曜石のノミで完成した砦の雛形を刻み込んだ。壮大な要塞の縮図を指でなぞりながら、クシは技術者に訊いた。

「これだけの規模だと完成までにどのくらいかかるのか」

技術者たちが石工と相談しながら答える。

「そうですね。少なくとも二、三年はかかりましょう」

「それでは間に合わない。せめて一年で完成させなくては……」

クシは焦った。今のところ敵の動向は不明だが、勢いのある部族なら一年もあれば広範囲を一気にその勢力下に治めることも不可能ではない。

「省ける部分はできるだけ省き、一番重要な部分から完成させてい

こう」

クシは、石の雛形にノミを入れ、新たに砦を増築しようとしていた部分を大胆に削った。

「うむ。この設計なら一年で完成するでしょう。人夫の数が足りればの話ですが」

「人夫……労働者が……」

「宮殿に仕える者だけではとても足りないでしょうな」

「この国の人口は農民がほとんどを占めています。彼らに協力してもらうことはできないでしょうか」

「農村から働き手を取ることなど無謀な話だ」

「農民か……」

技術者たちの意見が飛び交うなか、クシは腕を組んで考えこんでいた。

「農村に働き手が一番必要なのは植え付けと収穫の時期だ。それ以外の季節はこの工事に協力してもらえるようにいろいろな村に働きかけてみよう。」

しかし、それぞれの村の事情を理解してやらねば、彼らの生活が困窮するだけだ。私が出向いてその事情を調べてくる。

民に頼ってばかりでは民が苦しむことになり、やがて民は恨みを持つ。国に協力してもらうかわりに、村が困っているときには国から助けを出すことを約束するのだ」

次の日から、砦の工事を技術者に任せ、クシはクスコ郊外の農村を回り始めた。小さな村に出向いては村人と親しくなり、仕事を手伝ったり、村で困っていることを聞き出したり、どのような作物をどの時期に作っているのかなどを聞きだした。幾日も幾日も、クシは農村めぐりを続けた。

工事を技術者に任せたままで毎日クシが農村に『遊び』に行くのを見咎めて、ある日リヨケがクシの部屋を訪ねて訊いた。

「クシ、砦の工事の指揮も執らず、いったい毎日何をしておるのだ？」

「協力者を募っているのです」

「しかし、お前は農村に行つて農作業を手伝つたり、村人と話しこんでくるだけだということではないか。貴族の中にはお前がやりかけたことを放棄して農作を始めるつもりではないかと噂するものもいるぞ。あれほど力説していた砦の建設はどうするのだ」

「そろそろ本格的に始められそうですよ」

クシは膨大な量の縄の束を床に並べ始めた。

「縄^{キープ}文字ではないか。こんなにたくさん、何が記されているのだ」

キープとは、縄の結び目の形や位置や色で言葉や数を記すことができる縄の文字である。

クシの持っていたキープはいくつもの束に分けられていて、それ

らを分けて並べると床一面を覆うほどになった。

キープはおもに、祭典のときに謡われる詩歌を伝えるために用いられている記録方法である。クシはそれを利用して調査内容を記録しようと思いついたのだ。

農村から帰ると、キープの表記を専門としている記録係を呼んで、その日見聞きしたことをひとつひとつ記させていた。

「ここに街の周辺にある農村の人口や働き盛りの男子の数、植え付けと収穫の時期が記してあります。ここから協力を取り付けた農夫の人数と彼らの体が空く時期が分かります。

砦の建設には多くの働き手が必要です。そこで農村の若者に協力を申し出ていたのです。彼らの都合に合わせて建設を進めていきます」

「面倒なことを。砦は彼らの村を守るためにも必要なことなのだ。労働者は強制的に徴集すれば済むことではないか」

「農村の者に砦の必要性を説いてもなかなか理解はできないでしょう。それよりは、目下暮らしの中で困っていることなどを聞いて、手助けをする代わりに協力してもらうのが、お互いのためなのです。信頼関係を築けば、今後もしざというときに喜んで協力してくれるでしょう」

リヨケは唸った。

「お前は常に先の先まで見通しているというのだな。しかし、そんな地道なことをしては体がいくつあっても足りないではないか」

「そんなことはありません。最初は地道な努力でも、体制が整って民に浸透していけばうまく回っていくものですよ」

「お前には、どのような立場の者でも、その心を読み取り、その心を自然と掴んでしまう不思議な才がある。お前のやり方で国を治めれば、民はお前のもとにまとまり、平和な国家となるだろうな」

リヨケは才能を発揮し始めたクシを頼もしく思った。

4、鷹の砦（その3）

クシが最後に訪れた農村は、都に程近い緩やかな丘の中腹にあった。

その村はウルコの所有する土地であり、クシが帰還したときに見かけた、都の西側にある廃村から移住させられてきた農民たちが住んでいた。

彼ら在必死で働いて得る収穫は、彼らの生活を最低限賄うための量だけを残し、あとはすべて宮殿に納めなくてはならないのだ。

働いても働いても彼らの生活が潤うことはない。

人々の目は皆生きる意欲を失っているかのように澱んでいた。その心を反映するように村も畑も荒れ、良い収穫が得られるようにはとても見えない。

前年にはそれまでにない不作となり、僅かに収穫できた作物はほとんどが宮殿に取りられてしまったのだ。

何に困っているのか何が必要かなど、誰も答えることはできない。それ以前に人としての生活を送ることができていないのだから。

どの村人も、ただ元の村に帰りたいと繰り返すだけだった。

クシは解決策を探すため、彼らが以前暮らしていた西の谷の村を訪れた。

廃村には草がはびこり、手入れのされない木々は自由に枝を拡げて生い茂っている。

しかし昔丁寧に耕されていた土はまだよく肥えているらしく、その上に生える雑草はたつぷりと栄養を吸い取ってほかの場所よりも大きく生長していた。

クシは雑草を掻き分けて、その土地の様子を丁寧に観察した。

前に作られていた作物が種を落とし、人がいなくても自然のままに生長し、雑草の合間に実を結んでいた。前年に実った立派なとうもろこしの残骸がいたるところに転がり、土の中からはまるまるとしたじゃがいもが出てきた。

クシはそれらをいくつか手にして宮殿へと向かった。

突然訪ねてきて、至急謁見したいと申し出たクシに、不愉快極まらない様子でウルコは応対した。

「いったい、今度は何だというのだ。そなたが勝手に始めたことに私が責任をもつ必要はないぞ」

口を尖らせてふんと息を吐き、ウルコは他所を向いていた。

「祭壇の建設のことではありません。」

私は偶然にも郊外によく肥えた土地を見つけたのです。そこは、今は廃村となっている場所ですが、このように立派な作物が自然と実っていました。

今は打ち捨てられた土地ゆえ、是非私に譲っていただきたい。そこを開拓してどれほどの実りが得られるのか試してみたいのです」

そう言って、採ってきた作物を差し出した。

その話でウルコは途端に顔色を変え、クシを睨みつけた。

「それはどの場所か？」

「西の谷間の一角にある土地です」

「そこは今私の土地で働いている農民が暮らしていた場所だ。今の畑は昨年より不作が続いている。元の場所がそのように肥えているのなら、今度はそこをわが土地として農民を戻し、収穫を得る。そなたに譲るつもりはない」

「殿下、失礼ですが、それではおそらくその土地もまた不作となるでしょう。」

今、殿下の土地が不作となっているのは、土地と民を育まずに摂取することだけを考えてきた結果です。土地に十分な肥料を与え、年月をかけて育まなければ収穫を得ることはできません。民の心も同じ。奪い取るばかりではやがて民も土地も弱っていき、作物を育てることができなくなります。作物が実らなければ、やがてわれわれも生きることができなくなります」

ウルコは「ばかな」とクシの話を嗤いとばそうとしたが、今の所有地の不作は深刻であり、クシの話を聞き流すことができなかった。

「私はあの土地の収穫を自分のものにしたわけではありません。どのようなしたら豊かな実りを得られるのか実験をしたいのです。ですからあの土地を復興させて収穫が得られることが分かれば良いのです。殿下の土地の民を元に戻し、再び開墾させていただきたい。民の生活が安定し実りが得られれば、その一角に国の土地を指定し、その収穫は殿下に納めさせていただきます。」

不作の続く殿下の土地を持ち続けるより確かな収穫が得られることでしょう。

どうか私の腕試しのために、あの土地と民を私に託していただき

たいのです」

ウルコはクシの表情に、何か後ろ暗い気配がないかと探った。しかし真っ直ぐに向けられたその目は真剣そのもので、この弟は、自分の力を試したいというまったく愚直な理由でそれを申し入れたに過ぎないのだと思った。

今の所有地ではいつ収穫が途絶えてしまうか分からない。クシが面倒を肩代わりして新しい土地で収穫を得、その一部を差し出すというのだ。いつ収穫が途絶えるか分からないと不安を募らせているくらいなら、クシにすべて預けてしまっほうが都合良い。うまくいかなければ責任を負わせて排斥してしまえばいいのだ。

ウルコはにんまりとして答えた。

「それではやってみるがよい。貴重な労働力を託すのだ。かならずや結果を出してもらおうではないか」

こうしてクシはウルコの土地の農民たちを元の村に帰すことに成功したのだ。そして近隣の村から少しずつ集めた作物の種や肥料を彼らに与えた。

農民たちは懐かしい土地に帰った途端に働く意欲を取り戻し、荒れ果てた村を再生するのにそれほど時間はかからなかったのだ。

クシの地道な努力が実り、植え付けの時期が終わると、あちこちの農村から砦の工事に協力しようとする大勢の男たちが集まってきた。農夫たちが石切り場から石を切り出して運び、石工たちがそれをきれいに削ると、すぐさま別の農夫たちによって砦に運ばれて積み

上げられる。

持ち場を分担することで作業は驚くほどの速さで進んだ。

皆は、技術者たちが見積もっていた時間よりもずっと早く完成しそつだ。

「クシ皇子、驚きました。まさかこのように順調に進むとは。なかなか皇子が工事に携わろうとなさらないので、一年で完成させることを諦めてしまわれたのかと思っておりました。

この調子なら、半年で計画していた部分が出来上がります」

「そうか、それは良かった。

あの若者たちもいつまでもこの労働に従事してもらわうわけにいかないからな。畑の収穫が始まる時期までに完成させねばならない。

しかし、計画した部分が完成しても、都を守るためにはまだまだ不十分なのだ……」

砦の改築は、クスコを改変させようとするクシの壮大な計画の一端に過ぎなかった。しかしこの工事の成功が彼の構想を実現させるための大きな足がかりとなるのだ。

複雑な形の要塞は、完成が近づいてくると、クスコの街を見守る雄々しい龍のように見えた。クシが出まかせでウルコに告げた『祭壇』というのもあながち嘘とは思えない。

ウルコは遙か向こうの丘の上で賑やかに行われている工事が自分の為のものだと思いつつも、その中心に常にクシがいることが面白くなく、恨めしそうにその建物を眺めた。

クシが大勢の働き手を集めてきたことにも危機感を感じていた。

「何故かあいつは人を集めるのがうまい。もしもあいつが反逆を企

てたとしたら、大勢の者があいつに味方して私に勝ち目はないだろう。なんとかしてあいつを都から追い出さなくては危険だ」

ウルコの猜疑心は、『祭壇』が完成に近づいてくるにつれ大きく膨れ上がっていった。

5、 殺戮の亡者（前書き）

残酷な場面があります。苦手な方はご注意ください。

5、殺戮の亡者

5、殺戮の亡者

恐るべき一団がやってきて村を襲い、村人をさらっていく。そして村をことごとく焼き尽くす。

クスコから遠い遠い西の地ではそんな噂が広まっていた。人々はその運命がいつ自分たちに降りかかってくるのかと戦々恐々としていた。

それは噂にとどまらない。実際に西の地では一晩で村人がほとんど殺され村が焼き尽くされる事件が相次いでいたのだ。その一団は村を襲いながら領土を奪い、少しずつ東へと陣を移動しているらしい。

その魔の手はケチュア族が支配する地域にも着実に迫っていた。しかし混乱する西の地とケチュアの領域の間には広大な平原が横たわっていて、なかなか噂が届かなかったのだ。おそらくケチュアの最西の村にその噂が届くころには彼らも襲われていることだろう。西の村のケチュア人たちはまだそんな運命を知らず、安穩とした日々を過ごしていた。

「あいつはまた皆殺しにしちまったらしい」

血に濡れた手でたくさんの略奪品を抱えた戦士は、隣を歩く戦士に語りかけた。話しかけられた戦士の手には綱が握られていて、その先に女と小さな子どもふたりが繋がっている。

「ああ、殺戮の亡者だ。殺すことに快感を覚えちゃったのさ。慈悲つてもんが欠片もないんだろう」

そう言って戦士は綱を思い切り引き寄せる。引き摺られるようにして女とそのすぐ後ろの子どもが早足になり、最後に付いていた子どもは躓いて転んだ。

戦士はチツと舌打ちすると、後ろに回って転んだ子の尻を蹴った。

「しっかり歩け！ まどろっこしい！」

子どもがよろよろと立ち上がったのを見届けて、戦士はまた彼らの先に回っていった。

「しかし、トウマイワラカさまはあいつを甚く買^{いた}ってなさるそうだ。若いのにその戦い方は見事だと。先ごろ襲った集落は規模が大きかったが、あいつがほとんどひとりで壊滅させたと言ってもいい」

「ああ、悪魔の申し子だよ。敵になつたらたまんねえな」

そう言って最初に話しかけた戦士は薄笑いを浮かべ、隊の後ろの方を黙々と歩いている若い戦士を振り返った。

「殺戮の亡者、アンコワリヨ……か」

アンコワリヨが最初に捕らえた人質は彼と同じ年ごろの少年で、その見事な戦いっぷりをみれば、大首領は戦士として利用してくださるのではと期待を抱いた。人質であっても同志となつて戦うことが出来るのではないかと、まだ素直な年頃の彼は期待を抱いていたのだ。

しかし、彼の捕らえた人質は烙印を押されて本国に送られてしまった。それは人質が本国の大神殿に捧げる生贄となつたことを意味していた。

彼らの神は常に血を欲している。ましてや日の昇る地にある豊かな国を手に入れるという野望を抱いたこの民族が、その大きな目的を果たすためには、下等な動物の血などでは足りない。より多くの人の血を彼らの神に捧げることが必要だった。

彼の捕らえた人質がどんな運命を辿るかは分かりきっている。そしてその人質の少年は、敵の神の生贄にされて最期を迎えることよりも、あの場で戦つて散ることを望んでいたということも。

生贄になることは決して不幸なことではない。彼らの民族の中ではたいへんな名誉とされる。しかし、流れる血の違う他民族にはそれは災難でしかない。恨みを抱いた人の血が果たして神聖な捧げ物になるのだろうか。

若い戦士はそのときから、すべてに疑念を抱いた。しかし、自分がその『狩り』から身を引くことは不可能だということも痛感していた。

逃げ出そうとした戦士が残酷な最期を迎えたのを何度もその目で見てきたからだ。

それならば……と、アンコワリヨは決意した。

進んでこの侵略に加わり、捕らえられて餌食となる前に、ひとり

でも多くの魂を『救う』のだと。まったく手前勝手なことだと知っている。しかし少年にはそれしか自分を納得させる方法が見つけられなかったのだ。

皮肉にもこの妄信がアンコワリヨを戦士として成長させる結果となった。

チャンカー族を取り纏める複数の首領のうち、最も権威のあるアストウワラカに次ぐ地位をもつトウマイワラカは、この若戦士の目ざましい成長を絶賛した。

しかし周囲のものは、ただ殺戮に狂うけたものだと罵った。

アンコワリヨが初めて生贄を捕らえたとき、大首領トウマイワラカはこの年端のいかない少年にまで直々に褒美を下されたとの噂が広まり、今では誰もが襲った部族をひとりでも多く生け捕りにしようと躍起になっていたからだ。

敵を片端から始末してしまうアンコワリヨが逆に異端となっていた。

ある襲撃に向かう前にアンコワリヨの属する部隊の隊長は念を押した。

「今日こそはひとりでも生け捕りにするのだ。故郷の神は生贄の血を待っておられる。殺すことより捕らえることを考えろ」

『女、子どもなど弱い者しか捕らえられない弱虫どもが！』

アンコワリヨは心の中で嘲った。

その日、彼らが襲った部族は手強かった。

敵はすでに襲撃を察知して集落の手前に屈強な戦士たちを待機させていた。夜陰に紛れてチャンカ側が奇襲を仕掛けるはずが、逆に奇襲に掛かってチャンカの戦士が次々と倒されていく。

アンコワリヨは倒れる仲間たちを跨いで集落の奥へと突き進んでいった。

敵側の戦士が次々と彼に襲い掛かる。しかしアンコワリヨは片手の斧をしながら滑らかに動かしながら敵の戦士をなぎ倒していく。

やがて集落の中央あたりに円筒形の建物が現れた。明らかにほかの建物とは赴きが異なり、そこが敵にとって特別な意味をもつ場所だということが分かる。それを裏付けるようにその建物を守る戦士の数は今までの倍ほどいた。

護衛の戦士たちが一斉にアンコワリヨに向かってきた。『殺戮の亡者』と仲間に言わしめた若戦士の顔はその瞬間、まさにその渾名を証明するかのような残虐なものへと変わった。

鋭い雄叫びを上げながら狂ったように斧を振るい、敵の身体を切り裂いていく。

戦うことは故郷くにを守ることなのだろうか、仲間を守ることなのだろうか、それとも広い大地を守ることなのだろうか。いつも戦いながらその問いを己自身に繰り返している。しかし答えが見つかった試しはなかった。

その答えを見つける暇もなく、戦いのスピードは増していく。

敵陣を切り進み、建物の中に滑り込んだアンコワリヨの目に、外の喧騒とは違った静かで幻想的な光景が飛び込んできた。

色とりどりの帯が天井から垂れ下がり、部屋の中央に置かれた大甕の中では熾き火がくすぶって細い煙を上げ、甘やかなそれでいて

喉を締め付けるような刺激のある香りを周辺に漂わせていた。

大甕の向こう側にひとりの女性が座っていた。胡坐をかき、両手をその膝の上に掌を上に向けて置き、静かに目を閉じている。顕わになっっている上半身に鮮やかな色の石を繋げた長い首飾りを何連にも重ねている。額や両頬、首筋から両肩、二の腕にかけてびっしりとまじないの絵柄が刻み込まれている。

「^{シャーマン}呪術師……か」

アンコワリヨの呟きに女呪術師が薄っすらと眼を開けた。

黒い瞳に熾き火や垂れ下がる帯の色を映して耀いている。覚悟を決めた面持ちで真っ直ぐにこちらを見つめる。

アンコワリヨはふと女呪術師の姿に見たことのない母親の面影を重ねた。

突然女の顔がほころんで、形の良いその唇から囁くようなまじないの言葉が漏れてきた。謡うような滑らかな響きは恨み言でも呪いの言葉でもない。おそらく彼女とその一族の至福と復活を祈る言葉なのだろう。

シャーマンは武器を手にしていない。アンコワリヨが彼女を生け捕りにするのは簡単だ。ましてや敵の神に仕えていた女の血は、チヤンカの神への最高の捧げ物となるだろう。

外が騒がしくなった。アンコワリヨに遅れて、仲間がようやく集落の中心までたどり着いたようだ。

アンコワリヨは女の瞳を見つめる。敵の神へとその血を捧げることは彼女にとって耐え難い屈辱だ。言葉が通じなくてもアンコワリヨにはその心が読めた。読めたと思っただけかもしれない。

しかし確信したアンコワリヨは大甕を跨いで女の正面に立った。斧を振り上げ一気に振り下ろす。

瞬間女がこのうえなく美しい笑顔でアンコワリヨを見上げた。屈辱を受けることなくこの場で命を終えられる喜びと、最期まで敵に屈服してなるものかという挑戦だと、アンコワリヨは受け取った。

「最上の献上品となるべき呪術師^{シャーマン}を殺してしまうとは、なんたる失態！ しかも女は何も武器を携えていなかった。お前は攻撃するべき相手を見定める分別もないのか！」

「狂ってやがる。ただ人を殺すことを愉しんでいるのだ！」

仮の陣に戻ったアンコワリヨに、仲間からの私刑が待っていた。したたかに叩かれた背中が青黒く腫れ上がる。

しかしどんなに罵られ、叩かれても、アンコワリヨはそれを苦痛とは思わなかった。

あの呪術師の最期の笑顔が脳裏に焼きついて離れず、それを繰り返す思い描くことで、不思議と身体の痛みを感じなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5493w/>

皇子クシ — 太陽の都を築いた若きインカの伝説 —

2012年1月7日10時46分発行